

祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 十七坪 崇敬者人員 三百九十人

(七一) 竹内御前神社 安田村大字安田字下條

祭神 竹内御前靈神

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社。竹内御前といふは佐々木信胤の女なりと傳ふ。信胤は星が城に據つて吉野朝に盡せしが、正平二年細川師氏の攻むる所となり陣歿せり。當社の社叢は信胤の下屋敷にして滅亡の際妻子眷屬自刃の地なりと。(小豆郡誌)

祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 九十四坪 崇敬者人員 千七百六十人

(七二) 稻荷神社 安田村大字安田字藤神(坂ノ山)

祭神 倉稻魂神

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十七坪 崇敬者人員 千七百六十人

(七五) 地神社 安田村大字木庄字川西

祭神 天照大御神 大己貴命(一に曰 天照大御神 少彦名命 倉稻魂命 大己貴命 埴安媛命)

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月二十二日 主なる建造物 石祠
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 二百五十人

(七六) 若宮神社 安田村大字木庄字谷

祭神 仁德天皇

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五十四坪 崇敬者人員 二百五十人
境内神社 菅原神社(菅原道真公)

(七七) 荒魂神社 安田村大字木庄字谷

祭神 大國美玉神

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

(七三) 玉姫神社 安田村大字安田字植松

祭神 玉比賣命(一に曰 玉依比賣命)

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社。小豆島五社宮起源並草加部八幡宮社傳記(嘉永二年大川巨なる者)に『玉姫明神は安田村治郎太夫と云人明神の後の沼を掘り明神の社地を上げ奉建立祭り居る今も此沼を治郎太夫沼と云其治郎太夫の家斷絶し今の鳥井金大夫の先祖三郎右衛門へ譲り祭らしむと也』。又玉藻集草加部八幡寺の條に『玉姫大明神 社貳間四面 右御除地=成被下也』と見ゆ。

祭日 七月十七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 九百五十七坪 崇敬者人員 千七百六十人

(七四) 地神社 安田村大字安田字植松

祭神 天照大御神 少彦名命 倉稻魂命 大己貴命 埴安媛命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 春秋社日 主なる建造物 石祠
境内坪數 四坪 崇敬者人員 千七百六十人

祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四百九十九坪 崇敬者人員 二百五十人

境内神社 秋葉神社(迦具土神)

(七八) 瑜加神社 安田村大字木庄字谷

祭神 倉稻魂神

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 九坪 崇敬者人員 二百五十人

(七九) 山王神社 安田村大字木庄字上庄

祭神 大山津見神

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 百七十一坪 崇敬者人員 二百五十人

(八〇) 荒魂神社 安田村大字橋字荒神東

祭神 大國魂神

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
 境内坪數 三百六十六坪 崇敬者人員 七百三十人
 境内神社 秋葉神社(迦具土神)

(八一) 廣瀬神社 安田村大字橋字内間

祭神 和加宇加賣命 菅原道真公
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社。一説に此の地(橋)の開拓者廣瀬重兵衛を祀るといふ。小豆郡誌に『廣瀬重兵衛……其ノ先ハ播州赤松籠資ノ裔廣瀬重兵衛則道ニシテ父ヲ廣瀬將監親則ト稱ス本島坂手村ニ來住シ漁農ヲ事トシタリシガ後本村橋ノ開拓スベキヲ思ヒ文明年間始メテ之ヲ開墾セリ實ニ今ヲ距ルコト約四百五十年前ニシテ橋村ノ起原ヲナス後子村民其ノ徳ヲ慕ヒ小祠ヲ建テ、其ノ靈ヲ祀レリ廣瀬神社ト云フ』とあり。

祭日 七月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
 境内坪數 三十六坪 崇敬者人員 七百三十人

(八五) 山王神社 安田村大字橋字岡見場(丸山)

祭神 大山津見神
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 七月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
 境内坪數 七十八坪 崇敬者人員 七百三十人

(八六) 荒魂神社 安田村大字岩ヶ谷字荒神

祭神 大國美玉神
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 七月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿
 境内坪數 七百六十五坪 崇敬者人員 三百二十人

(八七) 山王神社 安田村大字岩ヶ谷字森ヶ谷

祭神 大山津見神
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 七月九日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 四百八十五坪 崇敬者人員 三百二十人

(八三) 金刀比羅社 安田村大字橋字瀧ノ下

祭神 金山比古命 金山比賣命
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
 境内坪數 百十五坪 崇敬者人員 七百三十人

(八三) 惠美須神社 安田村大字橋字内間

祭神 蛭子命
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 七月九日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 十三坪 崇敬者人員 七百三十人

(八四) 嚴島神社 安田村大字橋字城ヶ島

祭神 市杵島比賣命
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 七月六日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 四十二坪 崇敬者人員 七百三十人

(八八) 嚴島神社 安田村大字岩ヶ谷字龜崎

祭神 市杵島比賣命
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 七月七日 主なる建造物 本殿
 境内坪數 一坪 崇敬者人員 三百二十人

(八九) 金刀比羅神社 安田村大字岩ヶ谷字荒神

祭神 金山比古命 金山比賣命
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 拜殿
 境内坪數 三十八坪 崇敬者人員 三百二十人
 境内神社 秋葉神社(迦具土神)

(九〇) 荒魂神社 安田村大字當濱字北原

祭神 大國美玉神
 由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
 祭日 六月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百五十六坪 崇敬者人員 三百人

(九一) 惠比須神社 安田村大字當濱字南原

祭神 蛭子命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 六月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三坪 崇敬者人員 三百人

一〇 苗羽村

(九二) 郷八幡神社 苗羽村大字苗羽字宮山

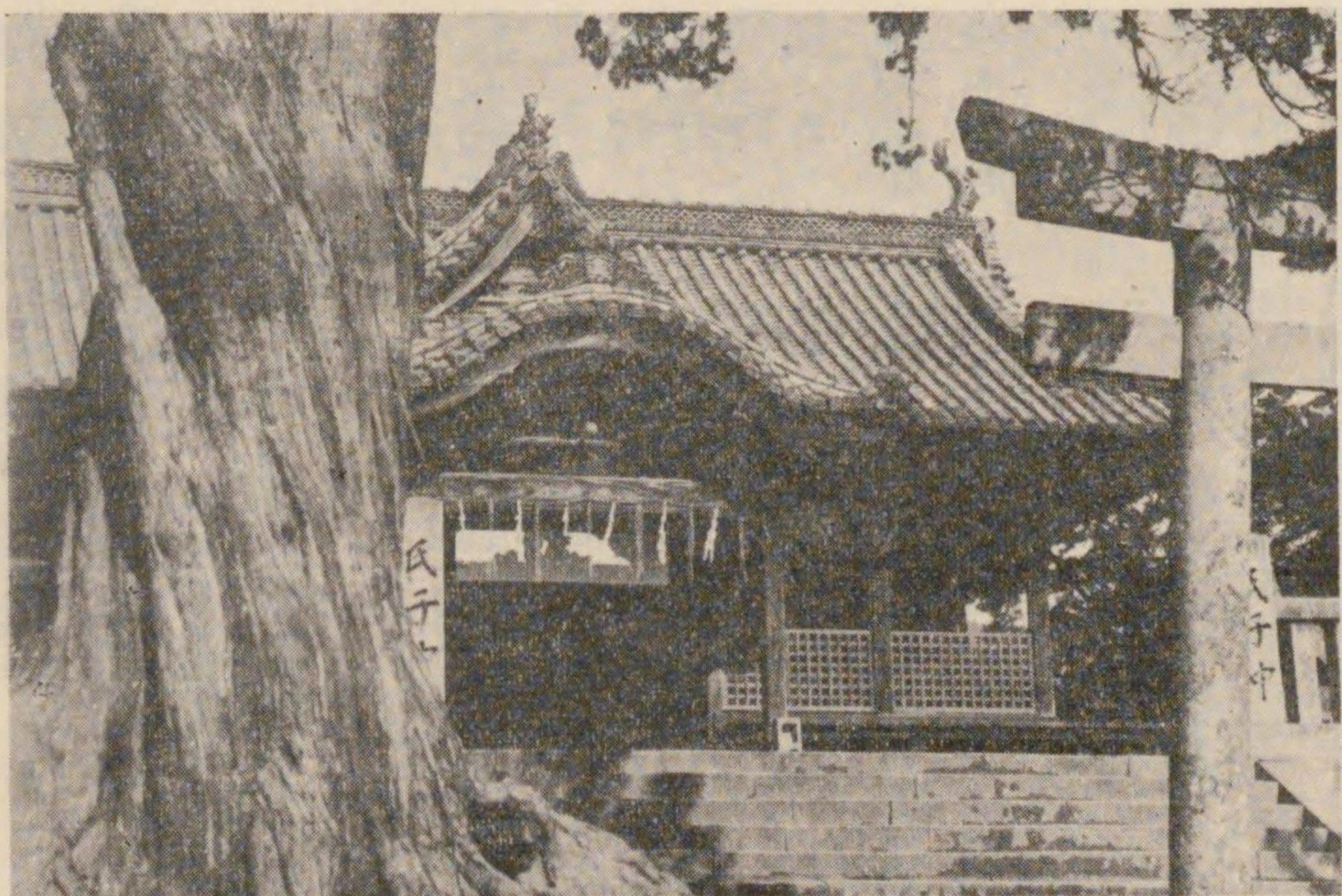
祭神 品陀和氣命 息長帶比賣神 帶中津比古命 底筒男

命 武内宿禰命

由緒 延長四年(紀元一五八六)の創祀にして小豆島五社

八幡宮の一なり。草加部八幡宮(苗羽村は舊草加部郷の内なり)又内海八幡宮と奉稱せらる。鎮座地龜甲山は應神天皇御遊幸の舊蹟にして、山の南にある馬目木臺は天皇行在

の跡と傳ふ。傳ふる所によれば天皇御遊幸の砌馬目木臺の地に行宮を造營し、數日御狩獵遊され橋の濱より御乘船御



出發あらせらる。依ておたち濱と云ふ、橋といふは後世の訛傳なりと。天皇馬目木臺を御出立の砌里民天皇の永世こゝに座ますが如く仕へ奉らむ何なりと神璽を殘し給へと乞へるにまかせ玉牀に等しき丈に木を切り

これに四手紙を掛けよと宣給ひて下し給ふ。里民ら奉齋して馬目木臺大神と稱へ奉り祭祀怠りなかりしが、宇多天皇

(九三) 舊八幡神社 苗羽村大字苗羽字宮山

祭神 應神天皇

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社。由緒は苗羽村郷社

八幡神社の條に述べたる如く、延長四年草加部八幡宮勸請以前、馬目木臺に應神天皇を奉祀せし舊蹟にして、里人氏神と奉祀して祭祀を怠ることなかりし旨草加部八幡宮社傳記に詳なり。里人今に元の宮と稱す。

祭日 六月二十八日 主なる建造物 石祠

境内坪數 百六十九坪 崇敬者人員 約千二百人

(九四) 嚴島神社 苗羽村大字苗羽字沖島

祭神 市杵島比賣命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 七月七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四坪 崇敬者人員 四百人

の第四皇子敦實親王本島を領せらるゝに至り、延長四年七月二十三日八幡宮の御託宣天聽を驚かし奉ることありて應神天皇御遊幸の地に八幡宮奉齋の事となり、親王の令旨を以て山城國石清水の神官紀御豊をして此處に奉齋せしめ給ふ。依て馬目木臺(後世馬木と云ふ)の地を元の宮と稱し奉れり。天明二年村中惡疫流行せし時特に祭祀を奉仕す、當社夏祭はそれより起ると、慶長十年改築の棟札あり。尙應永十三年當社に奉納せられたる鐔口現今中村不折氏の書道博物館に出陳せられあり。(玉藻集 小豆島八幡宮五社由來記 草加部八幡宮社傳記 小豆郡誌 讚岐史談)

例祭日 十月十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神庫 社務所 祓殿 隨

神門 茶堂 旅所

寶物 縁起書 棟札慶長十年

境内坪數 一萬二千五百八十一坪

氏子區域及戸數 苗羽村 草壁町 西村 安田村 坂手村

二千三百八十戸

境内神社 三輪神社(大物主命 伊奢沙和氣神)

住吉神社(上筒男命 市寸島比賣命)

龍神社(綿津見神) 障神社(八衢比古神 八衢比賣

神 久那斗神) 元境外神社なりしが、境内擴張と同時に境内神社となれり。

(九五) 戎神社 苗羽村大字苗羽字カチ山

祭神 蛭子命
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十七坪 崇敬者人員 四百人

(九六) 山王神社 苗羽村大字苗羽字堂ノ向(小川)

祭神 大山津見神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 九月九日 主なる建造物 石祠 休息所
境内坪數 二十坪 崇敬者人員 百四十人

(九七) 金刀比羅神社 苗羽村大字苗羽字若石山

祭神 金山比古神 金山比賣神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 三月十日 主なる建造物 本殿 休息所
境内坪數 五十九坪 崇敬者人員 百四十一人

(101) 金刀比羅神社 苗羽村大字古江字東通

祭神 金山比古神 金山比賣神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 三月十日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五十七坪 崇敬者人員 百五十人

(101) 聖神社 苗羽村大字古江字聖

祭神 聖神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 六月九日 主なる建造物 本殿 休息所
境内坪數 五百八十八坪 崇敬者人員 二百人

(101) 惠美須神社 苗羽村大字堀越字中

祭神 蛭子命
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 六月十日 主なる建造物 石祠
境内坪數 三坪 崇敬者人員 三百人

(九八) 明神社 苗羽村大字古江字東通

祭神 素戔鳴尊
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月九日 主なる建造物 石祠
境内坪數 十七坪 崇敬者人員 二百人

(九九) 荒魂神社 苗羽村大字古江字中通

祭神 大國美玉神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月九日 主なる建造物 本殿 休息所
境内坪數 九十六坪 崇敬者人員 二百人

(100) 戎神社 苗羽村大字古江字中通

祭神 蛭子神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月十日 主なる建造物 石祠
境内坪數 百五十一坪 崇敬者人員 二百人

(104) 荒魂神社 苗羽村大字堀越字中

祭神 大國美玉神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 六月九日 主なる建造物 本殿 休息所
境内坪數 七十五坪 崇敬者人員 三百人

(105) 惠美須神社 苗羽村大字田浦字南原

祭神 蛭子命
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 六月十日 主なる建造物 石祠
境内坪數 四坪 崇敬者人員 百五十人

(106) 明神社 苗羽村大字田浦字下北原

祭神 素戔鳴尊
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 六月十八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十二坪 崇敬者人員 四百人

(104) 荒魂神社

苗羽村大字田浦字切谷(下北原)

祭神 大國美玉命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 六月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百三十五坪 崇敬者人員 四百人

(108) 荒魂神社

苗羽村大字田浦字切谷

祭神 大國美玉命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 六月十五日 主なる建造物 本殿 休息所

境内坪數 二百三十七坪 崇敬者人員 百人

(109) 村荒魂神社

苗羽村大字苗羽字中筋

祭神 大國美玉神 火産靈神

相殿 奥津比古神 奥津比賣神

由緒 明治十二年八月十一日村社に列せらる。

一一坂手村

(110) 稻荷神社

坂手村字波戸上

祭神 倉稻魂命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 七月二十日 主なる建造物 本殿 休息所

境内坪數 十八坪 崇敬者人員 五十人

(111) 加茂神社

坂手村字西片山

祭神 建角見神

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 七月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四十三坪 崇敬者人員 二百人

(112) 惠美須神社

坂手村字中

祭神 蛭子神 金刀比羅大神 住吉大神

小豆郡

例祭日 十一月三日

主なる建造物 本殿 拜殿 社務所



村荒魂神社

境内坪數

百二十六

坪

氏子區域及

戸數 大字

苗羽 二

百六十戸

境内神社

菅原神社

(菅原道

眞公)

松尾神社

(大山咋

神 迦

具土神)

(二)に曰 大山咋命 中津島姫命 殿相 秋葉大神 白鳥

大神)

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 七月十九日 主なる建造物 本殿 休息所

境内坪數 三十二坪 崇敬者人員 二百人

境内神社 祇園神社(素盞鳴尊)

(113) 荒魂神社

坂手村字灘上

祭神 大國美玉命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 七月二十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 百五十五坪 崇敬者人員 八百人

境内神社 菅原神社(菅原道眞公)

(114) 春日神社

坂手村字東谷

祭神 天兒屋根命

由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社

祭日 七月十六日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十八坪 崇敬者人員 二百人

(二五) 猿田彦神社 坂手村字東谷

祭神 素戔鳴尊
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 九十五坪 崇敬者人員 二百人

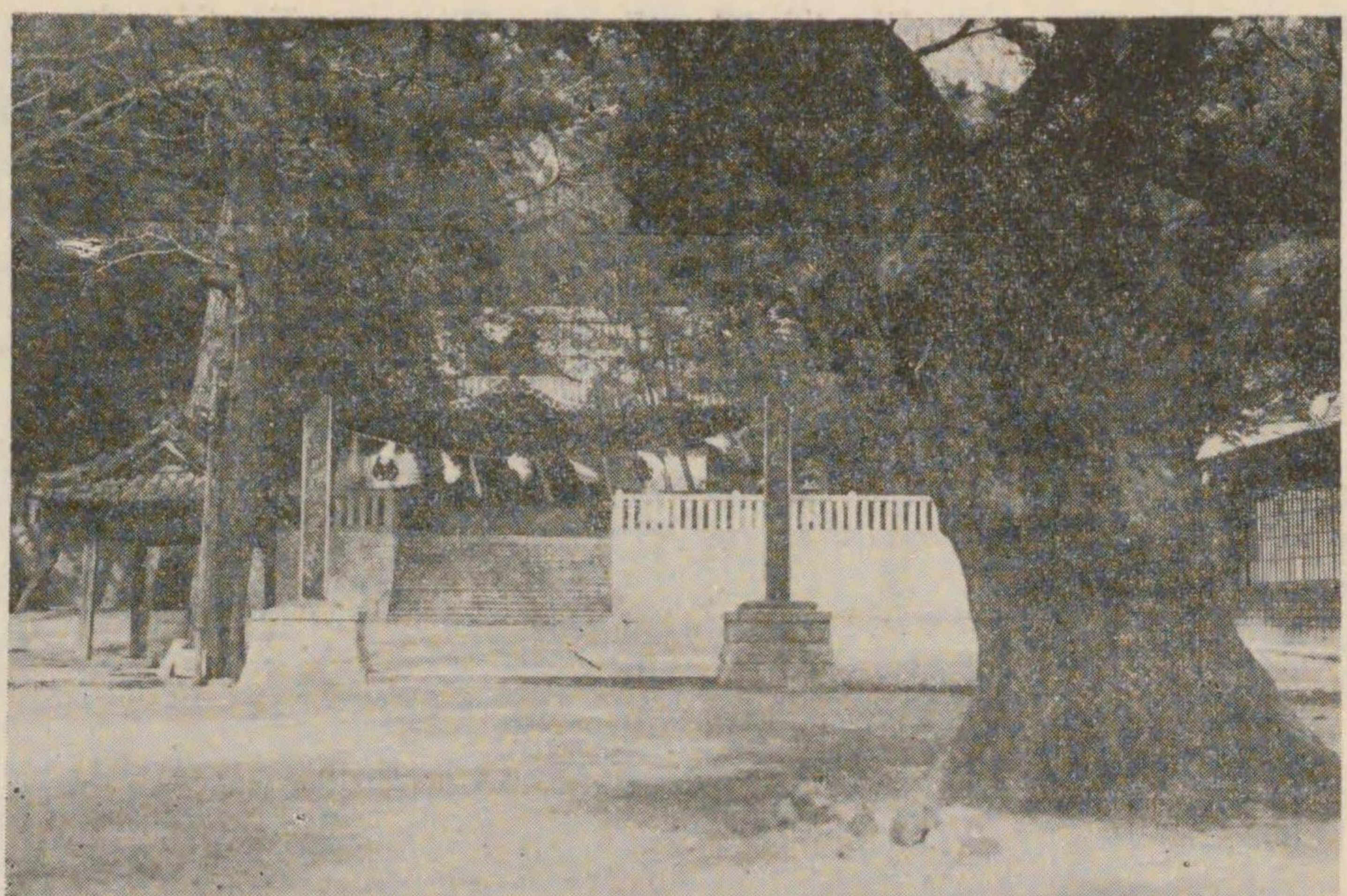
(二六) 稻荷神社 坂手村字東谷

祭神 倉稻魂命
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月二十日 主なる建造物 本殿 休息所
境内坪數 二十八坪 崇敬者人員 百人

(二七) 嚴島神社 坂手村字平兒島

祭神 市杵島比賣命
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 五百七十坪 崇敬者人員 二百人

人田中に行宮を建てて苜穂を以てその屋根を葺けり。依て葺田の森の稱あり。これ後の福田村なり。行在跡は字三ノ坪にありて神田と稱ふ。天皇御還幸の後里人此の地に祠を立て天皇を奉



郷 祀せしが、仁社 和三年(或は八寛平元年)肥幡 土庄は石清水社 八幡宮の社領となり、延長四年に至つて島内五ヶ處の應神天皇御舊蹟へ石清水八幡宮より神靈

を迎へて奉齋せられしものにして當社もその一なり。而して現在の地に遷座せられたるはそれ以後なるべく年次不詳

(二八) 荒魂神社 坂手村字奥籠

祭神 大國美玉神
由緒 苗羽村郷社八幡神社境外末社
祭日 七月二十七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四十四坪 崇敬者人員 三百人

一二 福田村

(二九) 郷八幡神社 福田村大字福田字前濱

祭神 品陀和氣神 息長帶比賣命 帶中津比古神
合祀祭神 豊玉比賣命 玉依比賣命 八衢比古命 大物主神 言代主神 大山津見命 多岐理比賣命
由緒 延長四年(紀元一五八六)の創祀にして小豆島五社の秋天皇淡路島に狩獵あらせられ、轉じて本島に御遊幸あり。伊喜末に御上陸御狩獵の後橋村より御乗船吉備へ御還幸あらむとす。偶々風波荒くして福田浦に御假泊あり。里

と雖も八月十一日を以て奉遷せられ、爾來近年まで此の日を以て祭日と定められたり。室町時代より戰國時代にかけて他の諸社と等しく衰微せしも徳川時代に復興せられ、寛永二十一年改築の棟札あり。其の後延寶九年、元祿十二年、正徳六年、享保二年等十數度の改築、上葺の棟札を存せり。現今の社殿は明治九年の改築とす。

大正七年十月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集小豆郡誌 小豆島八幡宮五社由來記)
明治四十一年 宇津玉比賣神社、崎障神社、言代主神社、原琴平神社、大山八幡神社、島伊都岐島神社、宇近 大山津見神社を合祀す。合祀神社のうち玉比賣神社(豊玉帳に「小豆島玉比賣明神」とあるものにして、口碑の傳ふる所は、往古備前に三社ありしが、一社洪水の爲め流れて本島に來りしを村民馬右衛門、助右衛門之を尾崎庄に奉祀して玉比賣明神と奉稱し、後年藩主より毎年の奉幣ありしと云へり。明治二年池田侯人をして調査せしめしことありしに、多くの棟札を存し崇敬の厚かりしことを證せり。

例祭日 十月十一日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神輿庫 氏子參集所 手洗舎
寶物 劍外六點
境内坪數 三千二百四十二坪三合九勺
氏子區域及戸數 福田村 大部村大字小部 五百戸

境内神社 多賀神社(伊弉諾命 伊弉册命)

伊勢神社(天照大御神) 天満神社(菅原道真公)

荒魂神社(素盞男命) 障神社(八衢比古命)もと境

のところが境内地編入の
爲め境内神社となる。

(110) 言代主神社 福田村大字福田字金ヶ崎

祭神 言代主神

由緒 福田村郷社八幡神社境外末社

祭日 六月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪数 五十四坪 崇敬者人員 九百六十八人

(111) 言代主神社 福田村大字吉田字家ノ上

祭神 言代主命

由緒 福田村郷社八幡神社境外末社

祭日 六月九日 主なる建造物 本殿

境内坪数 十坪 崇敬者人員 二百三十二人

(112) 大山津見神社 福田村大字吉田字テテゴセ

祭神 大山津見命

由緒 福田村郷社八幡神社境外末社

祭日 陰曆正月九日 主なる建造物 本殿

境内坪数 九坪 崇敬者人員 二百三十二人

(113) 荒魂神社 福田村大字吉田字テテゴセ

祭神 大物主神 荒魂五名神

由緒 福田村郷社八幡神社境外末社

祭日 陰曆正月二十七日

主なる建造物 本殿 拜殿 集拜所

境内坪数 五百三十三坪 崇敬者人員 二百三十二人

一三 大部村

(114) 天津神社 大部村大字大部字東黒山

祭神 天御中主命(一に曰 天御中主神 高皇産靈神 神

皇産靈神)

由緒 詳ならずと雖も口碑の所傳は極めて古く、紀元八百

六十一年神

功皇后御征

韓の事終り

御凱旋の際

本島の北海

を過ぎさせ

給ふ。偶々

暴風起り御

船危かりし

かば屋形見

村(後世二村

に分れ見

目、屋形崎

と云ふ。今

北浦村に)

の

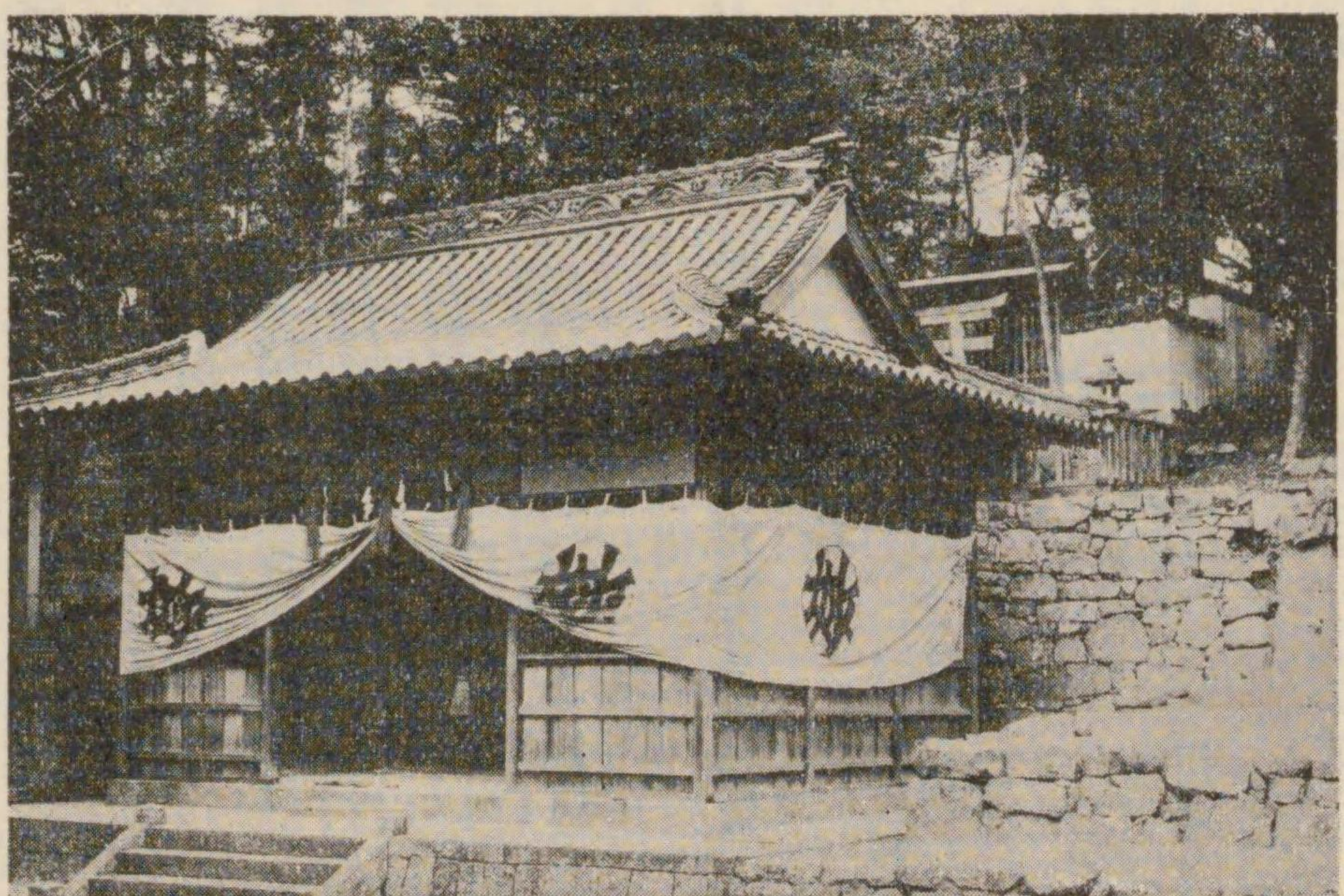
者守護し奉

り御船海岸

に着かせ給

ふ。こゝに皇后親ら神祇を祭り神樂を奏せらる。故に此の

地を神樂崎と云ふ。(今燕崎と云ふ。四海村)轉じて琴塚の浦(今大部村)に屬す。



天津神社

に御滯船中琴を弾じて旅情を慰め給ひしが、後この琴を
土民に賜ふ。土民長敬して之を石棺に納めて奉祀す。爾
來この地を琴塚と稱す。或夜皇后靈夢を感じ給ひ當山に登
らせられ山頂に神籬を樹て、造化三神を招じ戦捷報賽を御
親祭遊さる。土民その聖蹟を讀さむことを惧れ小祠を建て
ゝ祭祀す。即ち當社なりと云へり。尙伊喜末八幡宮縁起に
も皇后此の地に御着船のことを載せたり。其の後永祿十年
の副築、慶長七年、寛永二十年、元祿三年、元文二年、安
永二年、寛政九年、安政四年に再築の事ありて棟札を存せ
り。文祿元年豊臣秀吉の朝鮮を征するや、本村田井に於て
軍船を新造す。其の間重臣をして屢當社に代参せしめ戦勝
を祈らしめたり。玉藻集に『田井村氏社妙見社右觀音寺構
來』と見ゆ。(小豆郡誌)

祭日 九月八日

特殊神事 陰曆十月末日、この日氏神出雲より還御まします

とて夜に入りて崇敬者多数拜殿に参集し十二時に至るや一

同大祓を奏し太鼓を打鳴らし櫓を漕ぎ綱を手繰り手振床し

く氏神を迎へ奉る。俗に神戻しと稱し古來神秘的神事とし

て今猶行はる。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 境内坪数 四百〇七坪

崇敬者人員 五千六百五十人

(二五) 惠美須神社 大部村大字大部字田井

祭神 蛭子命

由緒 大部村天津神社境外末社。玉藻集に『大部村惠美

酒一社 右觀音寺構來』と見ゆ。

祭日 一月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 五十三坪 崇敬者人員 五百人

(二六) 金刀比羅神社 大部村大字大部字東黒山

祭神 大物主命

由緒 大部村天津神社境外末社

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十二坪 崇敬者人員 五百人

(二七) 荒魂神社 大部村大字大部字梅ヶ谷

祭神 須佐之男命

由緒 大部村天津神社境外末社

祭日 六月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 五百人

(二八) 荒魂神社 大部村大字大部字上庄

祭神 須佐之男命

由緒 不詳

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 七十四坪 崇敬者人員 千八百人

(二九) 御前神社 大部村大字大部字上庄

祭神 荒魂五名神

由緒 元字仲ノ坪に鎮座せしが、後現今の上庄荒魂神社境

祭日 六月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 舊鎮座地字仲ノ坪 二十一坪

崇敬者人員 六百五十人

(三〇) 金刀比羅神社 大部村大字大部字仲ノ坪

祭神 大物主命

由緒 不詳

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四十三坪 崇敬者人員 六百五十人

(三一) 大歳神社 大部村大字大部字向町

祭神 大歳神 御年神 若年神

合祀祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命 大物主命 豊

受大神

由緒 昭和二年 桐^{字片}金刀比羅神社・住吉神社を合祀す。豊

受大神は^{字濱}庄 大部神社の祭神なりしを明治二十三年前住

吉神社に合祀せしものなり。

祭日 六月一日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十二坪 崇敬者人員 九百人

(三二) 住吉神社 大部村大字大部字濱畑

祭神 表筒男命 中筒男命 底筒男命

祭日 九月十六日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二百八十六坪 崇敬者人員 四百五十人

(三三) 荒魂神社 大部村大字大部字琴塚

祭神 須佐之男命(一に曰 大物主命 配祀 大山積神)

祭日 六月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十三坪 崇敬者人員 四百五十人

一四 北浦村

(三四) 荒魂神社 北浦村大字馬越字下沖入

祭神 荒魂神(一に曰 大國魂神)

由緒 四海村村社八幡神社境外末社

祭日 陰曆三月二十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十六坪 崇敬者人員 四百五十六人

(三五) 荒魂神社 北浦村大字屋形崎字平ノ久保

祭神 大國魂命

合祀祭神 迦具土神 菅原道真公

由緒 四海村村社八幡神社境外末社。昭和四年八月本殿を新築し、同時に境内神社たりし天神社及び秋葉神社を合祀す。

祭日 陰曆三月二十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪数 二百十六坪 崇敬者人員 四百二人

境内神社 金刀比羅神社(大物主神)

(二六) 荒魂神社 北浦村大字見目字荒神ノ上

祭神 大國魂神

由緒 四海村村社八幡神社境外末社

祭日 陰曆三月二十七日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪数 百十一坪 崇敬者人員 五百七十三人

(二七) 若宮神社 北浦村大字見目字西ノ岡

祭神 天兒屋根命

由緒 四海村村社八幡神社境外末社

祭日 陰曆八月八日 主なる建造物 本殿 拜殿

崇敬者人員 千六百二十人

境内神社 天神社(菅原道真公)

若宮神社(天兒屋根命)

荒魂神社(大國魂神) 昭和四年字荒神谷より移轉境内神社となす。

住吉神社(表筒男命 中筒男命 底筒男命) 昭和四年字中筋より移轉境内神社となす。

一五四 四海村

(二八) 村八幡神社 四海村大字伊喜末字中島

祭神 品陀和氣命 息長足姫命 仲姫命

由緒 延長四年(紀元一五八六)の創祀にして本島八幡宮五社の一なり。伊喜末八幡宮と奉稱せられ、應神天皇御遊幸の舊蹟に男山八幡宮より神靈を迎へて奉祀せしものなり。應神天皇二十二年に天皇淡路島に幸し給ひ、次で吉備の葦森の宮より小豆島に渡り御狩獵遊さる。伊喜末の地は天皇の御船初めて小豆島に着き給ひし地にして、伊喜末の意は御幸居なりとも、御息居なりとも云ふ。延長四年神託あり

境内坪数 八十八坪 崇敬者人員 五百七十三人

(二九) 王子神社 北浦村大字小海字宮ノ西

祭神 國狹

立尊

由緒 四海

村村社八幡

神社境外末

社

祭日 陰曆

三月二十七

日

主なる建造物

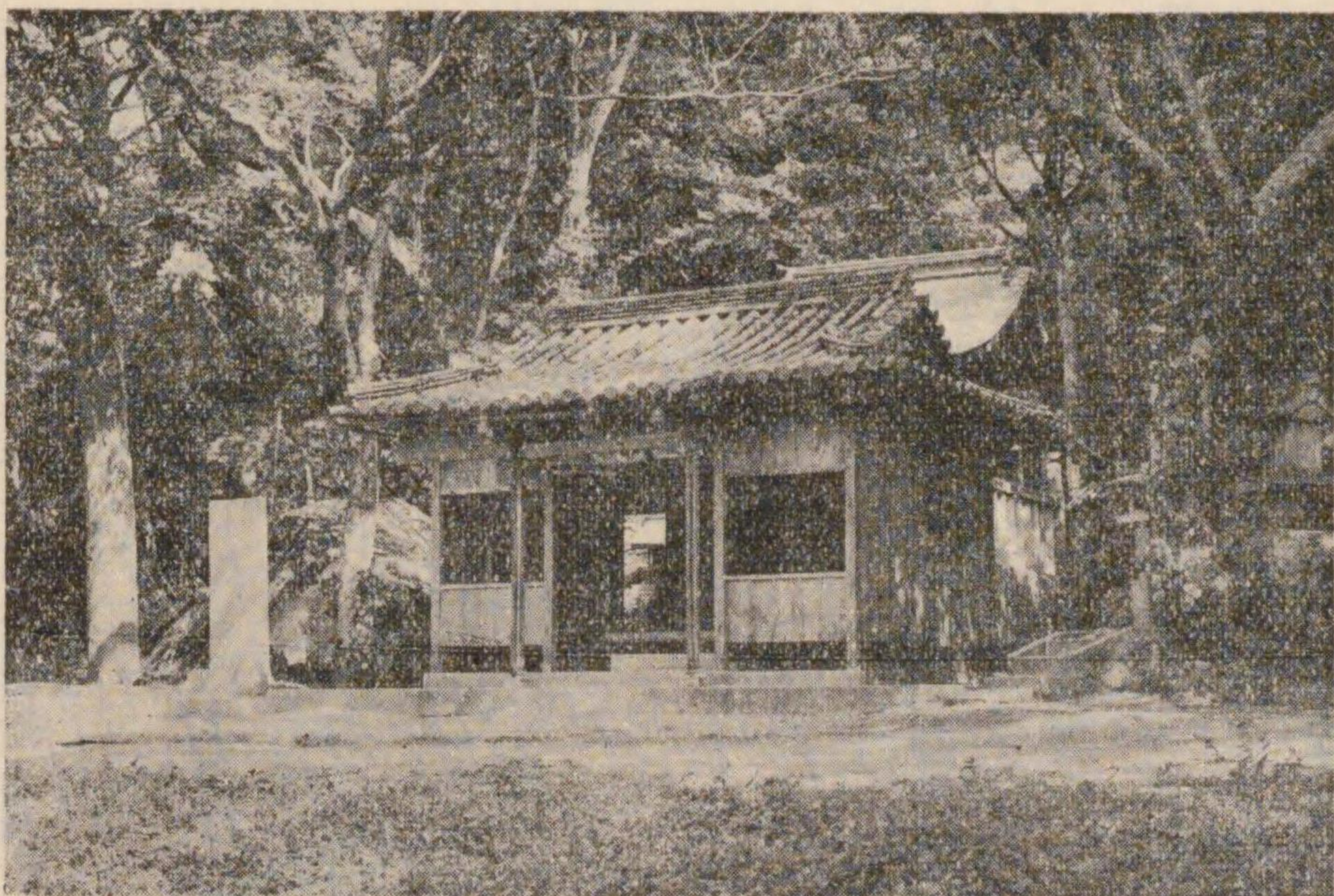
本殿 拜殿

通夜殿 井

戸舎

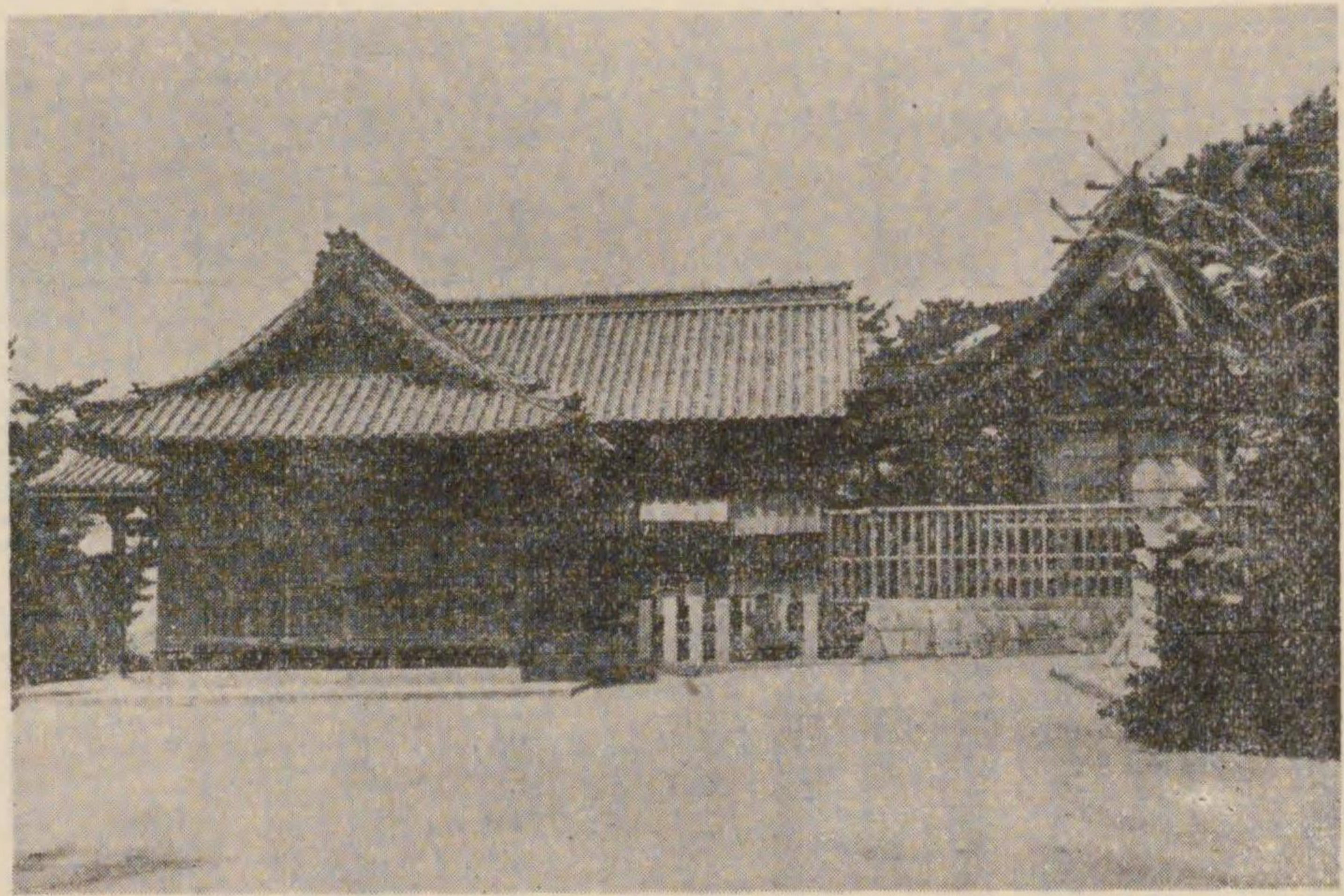
境内坪数 六

百七十一坪



王子神社

て應神天皇の御舊蹟に石清水八幡宮より御神靈を迎へしものにして當時本島の領主なりし敦實親王家及び別當澄雲専ら力を致せりと傳ふ。傳説に依れば例祭に於ける御神輿三基の渡御は古儀に典れるものにして第一は御旅所に沿へる濱に濱に面して御神輿を安置し神事を行ひ、第二は御休息の舊蹟に御神輿を駐めて神



村八幡神社

事を奉仕し、御座船を神輿の前に据ゑ、數人の男子古歌を奏す。第三は御旅殿に渡御ありて甘酒ブドウ飲(オスコ持

とて物忌せる婦人容器を頭上に頂き騎馬甲冑の武人と共に奉持して齋場に到るを供饌、神事ありて再び古歌船歌を奏す。右は何れも古儀によれるものなりと。

社殿の改築は一再ならざれども、應和二年勅命ありて再興あり。其の後寶永四年再建す。明治十六年幣殿、拜殿を、同三十三年御旅殿、繪馬殿を夫々再築し、昭和八年社務所を新築す。

當社は小豆島八幡宮五社の一にして他の四社と共に郷社たりしが、明治十八年九月十六日故ありて村社とせらる。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せられたり。(八幡大菩薩遷座因縁起 伊喜末大木戸兩宮縁起 玉藻集 小豆郡誌)

例祭日 十月十三日

特殊神事 例祭神事は他と趣を異にす。前記由緒の條に述べたり。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌所 繪馬殿 神庫

社務所 旅殿 手洗舎

寶物 縁起書、棟札、劍等五點

境内坪數 五千九百九十三坪

氏子區域及戸數 四海村 北浦村 大部村大字大部 千四百

(二四) 天津神社 四海村大字小江字村内

祭神 天御中主神 大國主神(一に曰 大國魂命) 大物主神 豊受姫神 速玉之男神(一に曰 山家公頼靈)

由緒 四海村村社八幡神社境外末社。古來妙見社と稱せられしを明治十年現社號に改稱。大正十四年五月本殿改築。

祭日 陰曆六月二十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四百二十坪 崇敬者人員 九百二十五人

境内神社 鹽竈神社(上筒男神 中筒男神 下筒男神)

惠美子神社(事代主神 大綿津見神)

(二五) 若宮神社 四海村大字小江字沖島

祭神 大佐々伎命

由緒 四海村村社八幡神社境外末社

祭日 陰曆六月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十一坪 崇敬者人員 九百二十五人

九十一戸

境内神社 高良神社(武内宿禰命) 大正十年宇岡高良神社を合祀す。

注連神社(天宇受賣命)

(二六) 荒魂神社 四海村大字伊喜末字中島

祭神 大國主命(一に曰 大國主命 宇迦之御魂神 菅原道真公)

由緒 四海村村社八幡神社境外末社。古より村社八幡神社の馬場に接して鎮座ありしが、明治八九年の頃土地丈量の際誤つて八幡神社境内に編入せられ、爲に境内神社の如き様となりしが大正四年四月八幡神社有の山林の一部八十坪を永久に借受け、同年十月移轉奉祀せり。

祭日 陰曆六月二十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 八十坪 崇敬者人員 千九十五人

境内神社 王子神社(伊邪那岐命 伊邪那美命) 元宇高尾西しを、大正十年移轉して境内神社となす。

鹽竈神社(上筒男神 中筒男神 下筒男神) 元宇虎濱に鎮座ありしを大正十年移轉して境内神社となす。

祭神 大國主神(一に曰 大國魂命) 相殿 迦具土神

由緒 四海村村社八幡神社境外末社。鎮座の由來詳ならずと雖も、傳説によれば奉齋後一千餘年を経過すと。玉藻集小海村長勝寺の條に『長濱村荒神社 長勝寺構來』とあり。

祭日 五月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿 繪馬殿

境内坪數 七百三十八坪 崇敬者人員 九百六十五人

境内神社 和靈神社 四海村大字長濱字西ノ路

祭神 速玉之男神(一に曰 山家公頼靈 宇迦魂神 火産靈神 天御中主神 素盞鳴神 若宮大神)

合祀祭神 飽咋之宇斯神

由緒 四海村村社八幡神社境外末社。古來より神殿二社ありて兩宮神社と稱へ、其の一を飽倉神社と稱せしが明治四十一年六月社殿改築に際し飽倉神社(飽咋之宇斯神)を合祀せり。傳ふる所によれば飽倉神社はもと飽浦大權現と

稱し、佐々木三郎左衛門飽浦信胤の靈を祀れりと云ふ。信胤は備前飽浦の城主にして興國二年小豆島に星が城を築きて大いに吉野朝に盡し、正平二年本村長濱に於て戦歿せりと傳ふ。而して信胤陣歿の際は未明にして敵の一士と組みたりしが、一人の武士駈來り、傍に海草を擔へる里人の立てるを見て、殿様は上か下かと問へり。里人無意に下なりと答へしかば武士忽ち上なる者を殺せり。然るに上なるが信胤なりしかば大に驚き遺骸を其所に埋めしが、戦後信胤の遺臣里民と共に祠を建て飽浦大權現と稱し三十餘戸之が祭祀に與かりて氏子となれり。後兩宮神社と稱す。而して氏子の者正月の参拜には父子兄弟たりとも互にもの言はず、又人との面會を避くるを以て例とし、傳へて今に至りて以て信胤の戦死を偲ぶと云ふ。(小豆郡誌 四海村志)

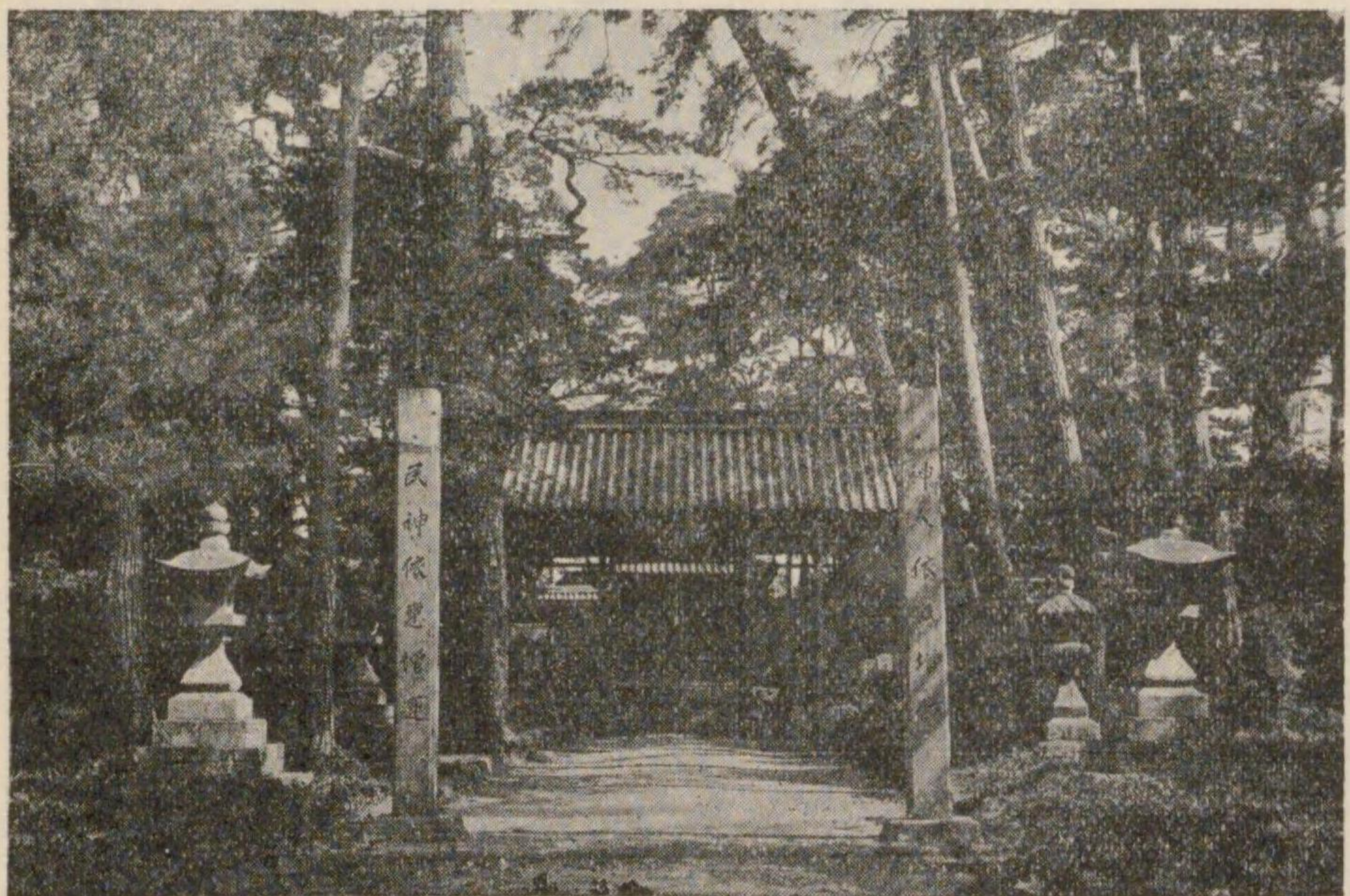
祭 日 五月十五日 主なる建造物 本殿兼拜殿
境内坪數 六十五坪 崇敬者人員 九百六十五人

(二四) 神明神社 四海村大字長濱字西谷

祭 神 天照大神
合祀祭神 菅原道真公 大物主神

(二五) 八坂神社 四海村大字瀧宮字坪江

祭 神 素戔鳴命
合祀祭神 大山津見命
由 緒 四海
村社八幡
神社境外末
社。本郡
最古の神社
なりと傳ふ
里人の傳ふ
る所によれ
ば、御祭神
素戔鳴尊樟
船に御し、
淡路より四
國、吉備を
經て出雲に
出で給ふ途
次、本島に



八坂神社

由 緒 四海村村社八幡神社境外末社。大正二年境内神社なりし天神社、金刀比羅神社を合祀し、同年本殿を新築。

祭 日 陰曆三月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十六坪 崇敬者人員 九百六十五人

(二六) 冠者神社 四海村大字長濱字ウズエ

祭 神 足名稚神 手名稚神
由 緒 四海村村社八幡神社境外末社。口碑の傳ふる所に
よれば、神代の昔素戔鳴尊樟船に御し給ひ、淡路より四國
を經て、吉備に轉じ出雲に出で給ふ。本郡も亦尊の御巡遊
を辱うし、牧畜の業茲に起れり。當社は尊御來航當時の篙
師を祀りしものにして、古來梶取明神と稱し航海の神とし
て尊崇さる。本社を距ること十町餘に八坂神社(大字瀧宮)
ありて素戔鳴尊を祭る。甚だ古社なりと。御祭神との關係
を思ひ合すれば深き故由あるべし。

祭 日 陰曆六月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二百十坪 崇敬者人員 九百六十五人

御來航あり。大字長濱字瀧江の冠者神社は古來梶取の明神と稱し、尊の御先導を爲せし神を祀ると傳ふ。當社はもと大丸の山中(尊御來島の當時御登攀し給ひし所)に鎮座ありしが、延曆の頃官牛が長嶋に移されし後この地に御遷座あり、現社地は官牛放牧の遺址なりといふ。

尊は各地に於て稼穡を奨め牧畜を營ましめ給ふ。本郡の牧畜も亦こゝに起れり。故に本社は航海及び牧畜に縁故深き神社にして里人の崇敬淺からず。

本殿内に長五尺五寸許の屋形船を安置し、その屋形の中を御神座として男女神御座像五柱の木像を御神體とすといふ。御神像は其の作甚だ古く一千年以上と稱せらる。又牛馬の守護神として尊崇せられ、崇敬者は郡内各村に跨り、例祭日には各耕牛を率ゐて参拜するを例とし、宛然牛市の如し。

本殿の御屋根は往古より二十五年目毎に丑年を以て葺替の定例なり。(小豆郡誌)

祭 日 陰曆九月八日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 奏樂殿 寶庫 繪馬殿
通夜殿 手洗所

明治四十四年^{字西}山神社を合祀す。

小豆郡

境内坪數 二千六百三十坪

境内神社 稲田神社(櫛稻田比賣命 合大國主命 大物主神 徳川家康公) 大正二年荒魂神社、金刀比羅神社、東照宮を合祀す。
櫛石神社(櫛石窓之神) 豊石神社(豊石窓之神)

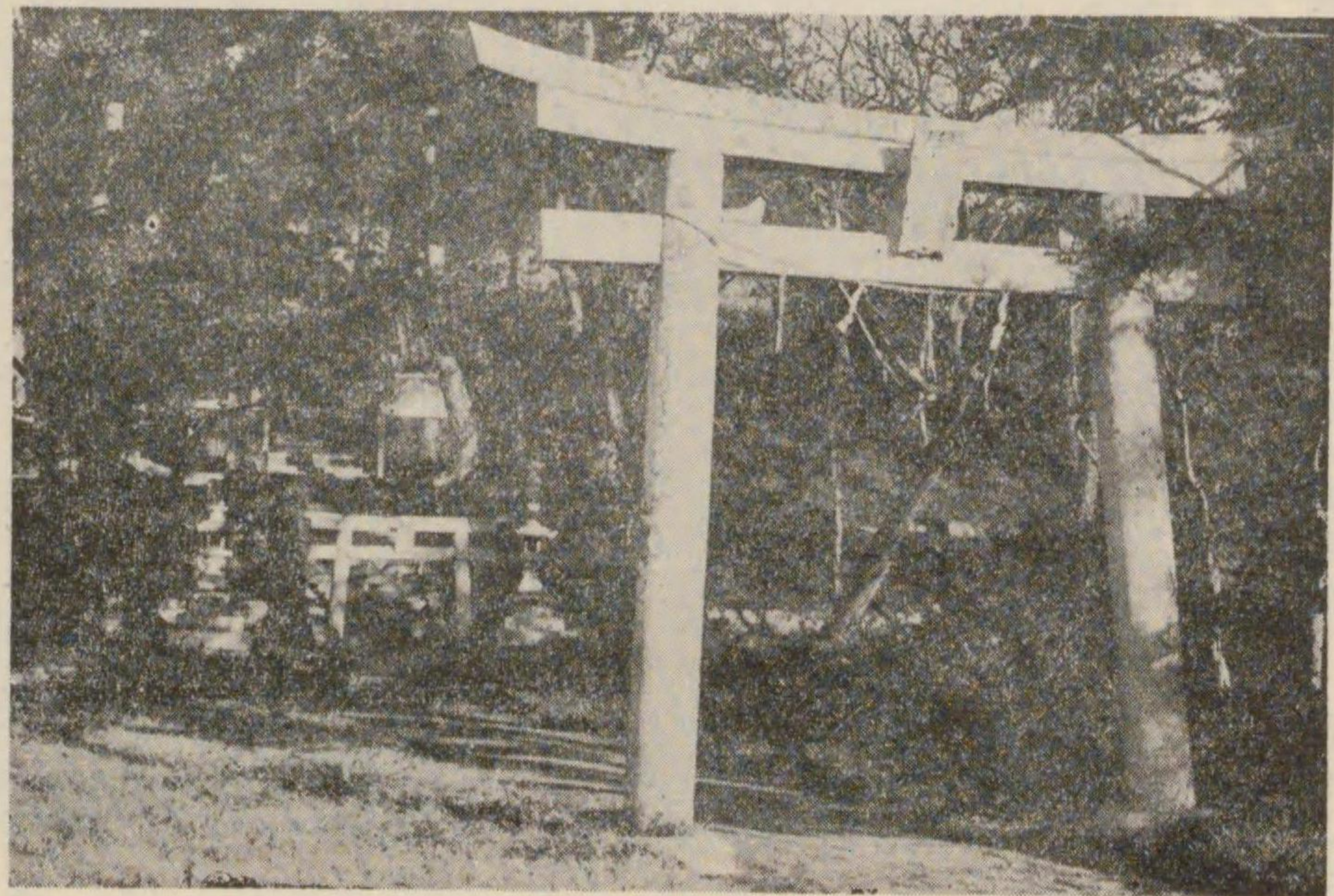
一六 豊島村

(二四) 郷八幡神社 豊島村大字家浦字ウナキ

祭神 譽田別命 氣長足姫命 仲姫命
由緒 嘉曆二年(紀元一九八七)の創建なりと傳ふ。玉藻集に「八幡宮 一社 家浦村分明光寺構來 嘉曆年中棟札有之」とあり。世に家浦八幡宮と奉稱す。文政十二年社殿の改築あり。大正十一年本殿、幣殿を改築、同十二年十月社務所を改築す。社殿は家浦西部丘上にあり老樹鬱蒼として海に臨めり。大正五年十月十八日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(小豆郡誌)
例祭日 十月十八日

(一四) 春日神社 豊島村大字家浦字今宮

祭神 天津
兒屋根命 齋主命 長雷命 大靈命
合祀祭神 大山津見命
由緒 豊島村郷社八幡神社境外末社。玉藻集に「春日一社 家浦村分明光寺構來 最初建立不知」とあり。明治四十四年字今宮山神社を合祀す。
祭日 十月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿

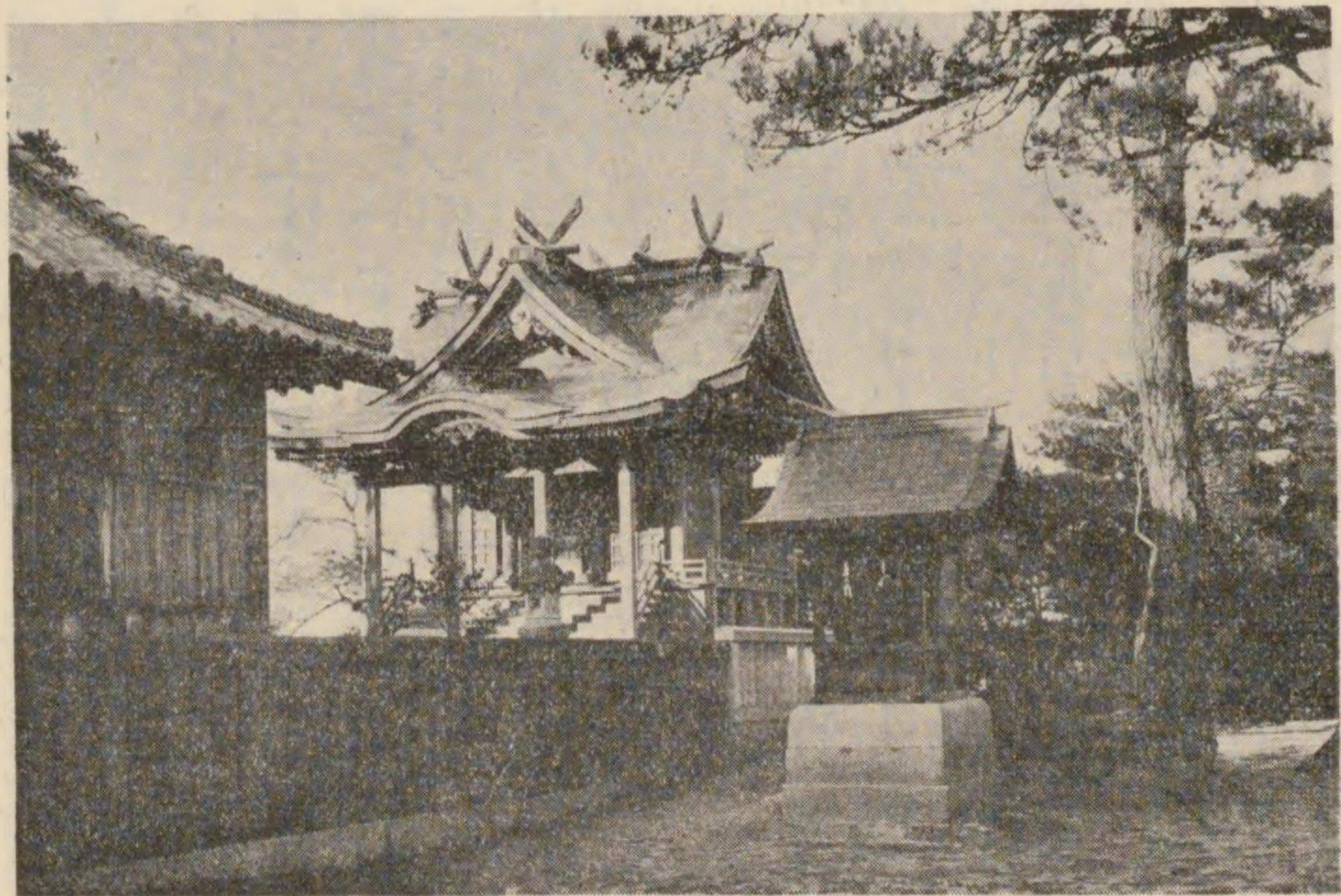


春日神社

小豆郡

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神樂殿 隨神門 社務所
寶物 劍外二點

三三六

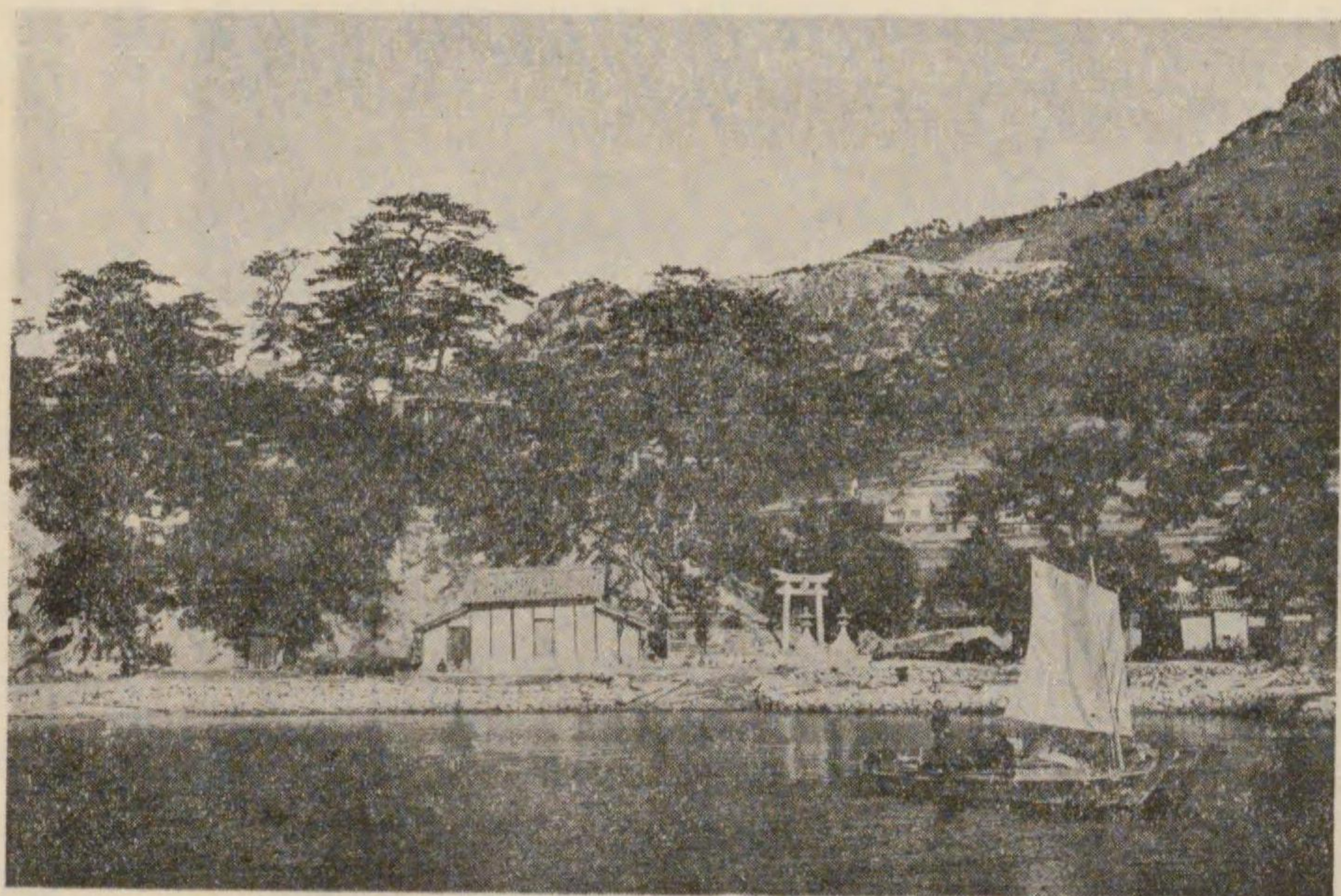


御崎神社(言代主神)

郷八幡神社 境内坪數 七千三百六十坪
氏子區域 二坪
及戸數 豊島村 六百九十八戸
境内神社 痘神社 (八衢彦神 八衢姫神)

境内坪數 百七十五坪 崇敬者人員 千六百二十七人

(一五) 三對神社 豊島村大字甲生字暮石



三對神社

祭神 天御中主神 高皇產靈神 神皇產靈神
合祀祭神 言代主神 底筒男神 中筒男神 表筒男神 八衢彦神 八衢姫神 久那戸神
由緒 豊島村郷社八幡神社境外末社

三三七

社。元享二年（紀元一九八三）九月の創祀といふ。元治元年六月社殿を再建す。明治四十三年字下蛭子神社を合祀、同四十四年字尾土祖神社を合祀す。

祭日 九月九日

主なる建造物 本殿 拜殿 隨神門

境内坪數 千百五十坪 崇敬者人員 四百九十五人

境内神社 金刀比羅神社（大物主神）元龜三年（紀元二二二）二月創祀。

三崎神社（言代主神）元龜三年二月創祀。

栗島神社（少彦名神）天和元年（紀元二二三）三月創祀。

(二五) 村八幡神社 豊島村大字唐櫃字濱田

祭神 足仲彦尊 氣長足姫尊 譽田別尊

由緒 文和元年（紀元二〇二二）の創祀なりと傳ふ。玉藻集に『八幡宮 唐櫃村分十輪寺構來』とあり。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。大正十二年十一月幣殿を改築、同時に社務所を新築す。社地は白砂青松の淨域にして眺望に富めり。（小豆郡誌）

例祭日 十月二十一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 隨神門 社務所

境内坪數 六千八百五十九坪

氏子區域及戸數 豊島村 六百九十八戸

境内神社

三崎神社

（大己貴命）

應安五年創祀。

若宮神社

（大鷦鷯命）

文和元年創祀。

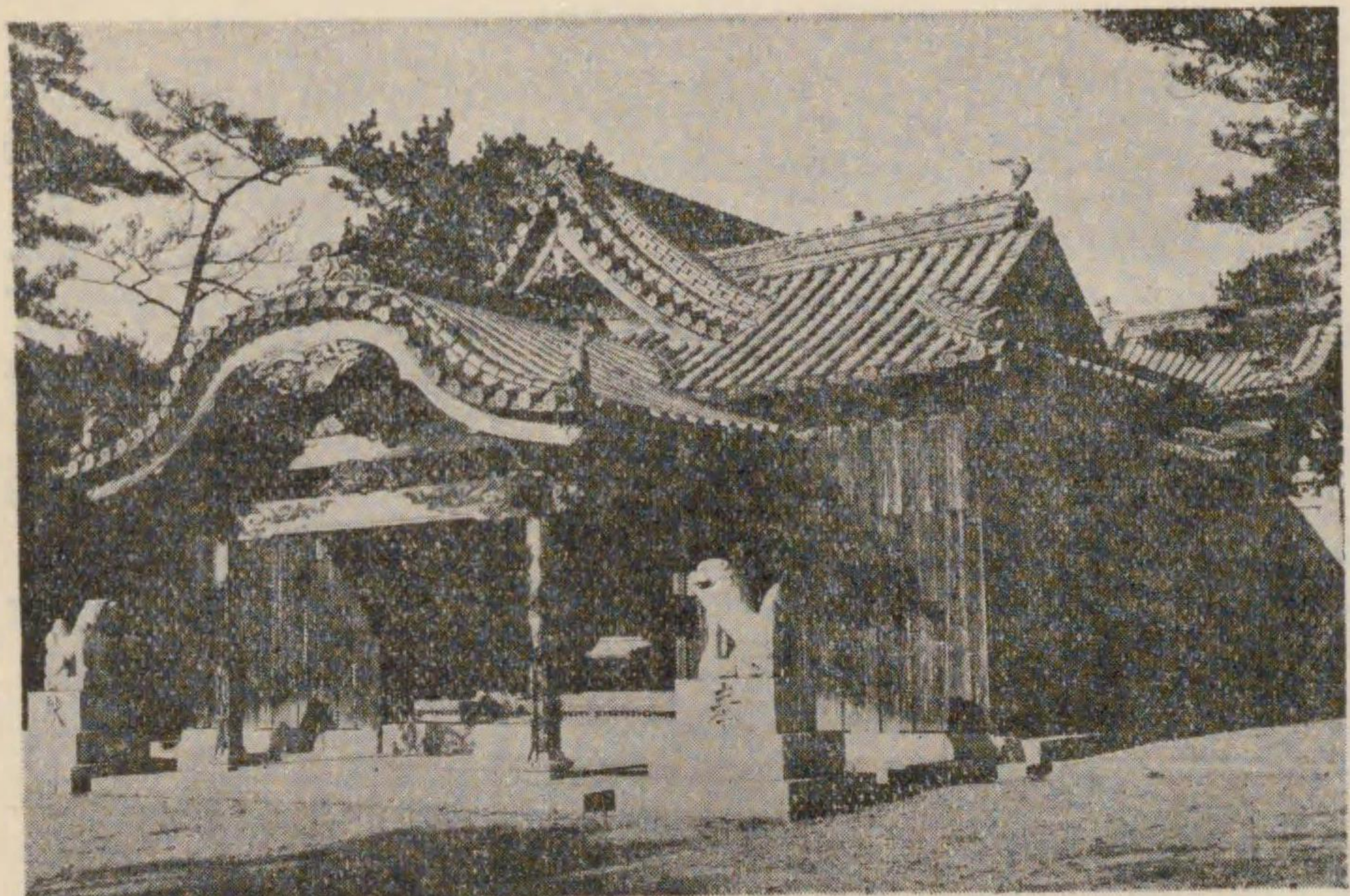
若宮神社

（菟道稚郎子皇子）

文和元年創祀。

武内神社（武内宿禰公）

應安五年創祀。



村八幡神社

武内神社（武内宿禰公） 應安五年創祀。

(二五) 清水神社 豊島村大字唐櫃字東狀

祭神 齋火武主比神 奥都比古神 奥都比賣神

由緒 豊島村村社八幡神社境外末社。貞治元年（紀元二〇二二）の創祀と傳ふ。

祭日 九月二十一日

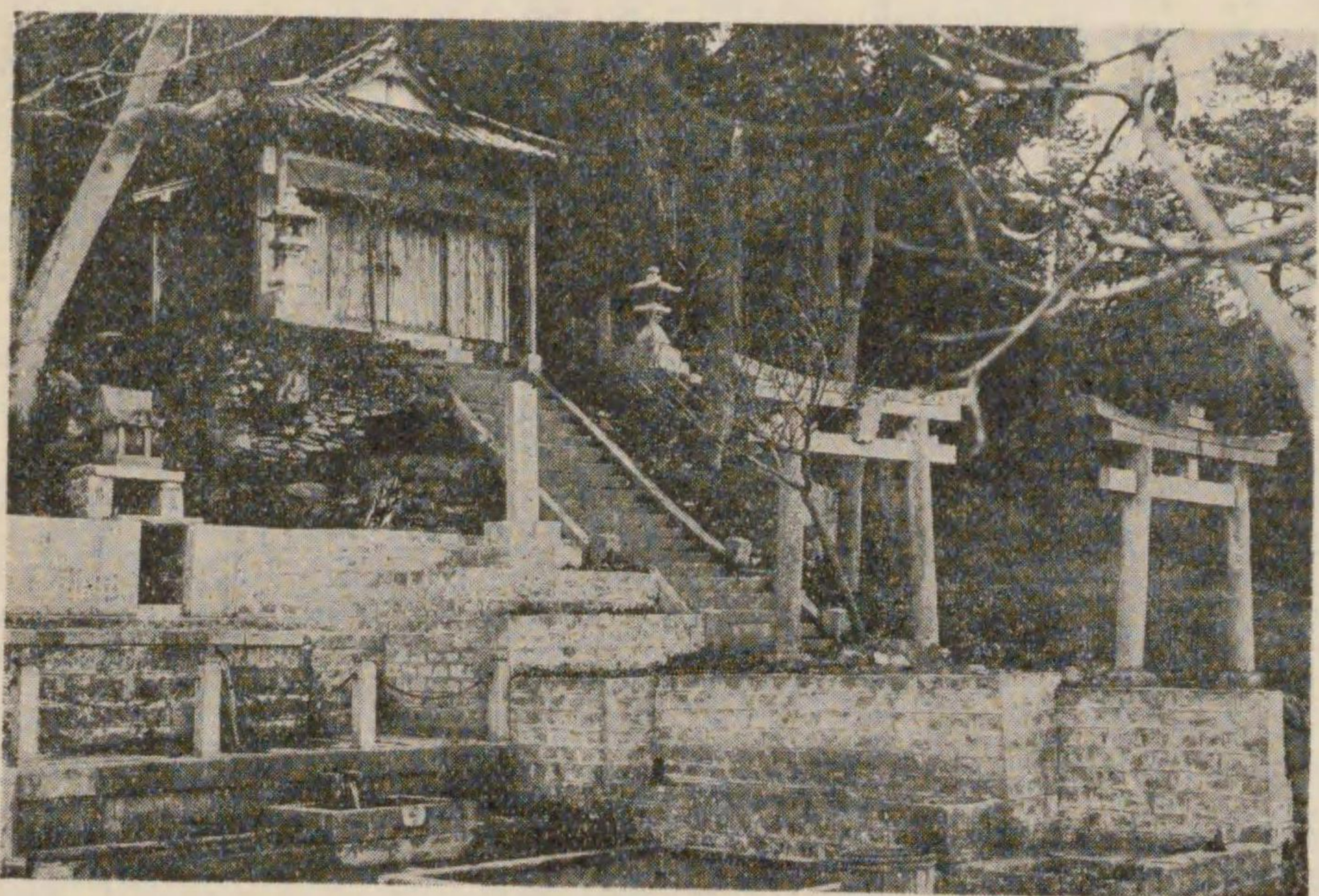
境内坪數 十九坪

主なる建造物 本殿

境内坪數

崇敬者人員 八百七十人

八人



清水神社

(二五) 住吉神社 豊島村大字唐櫃字明神

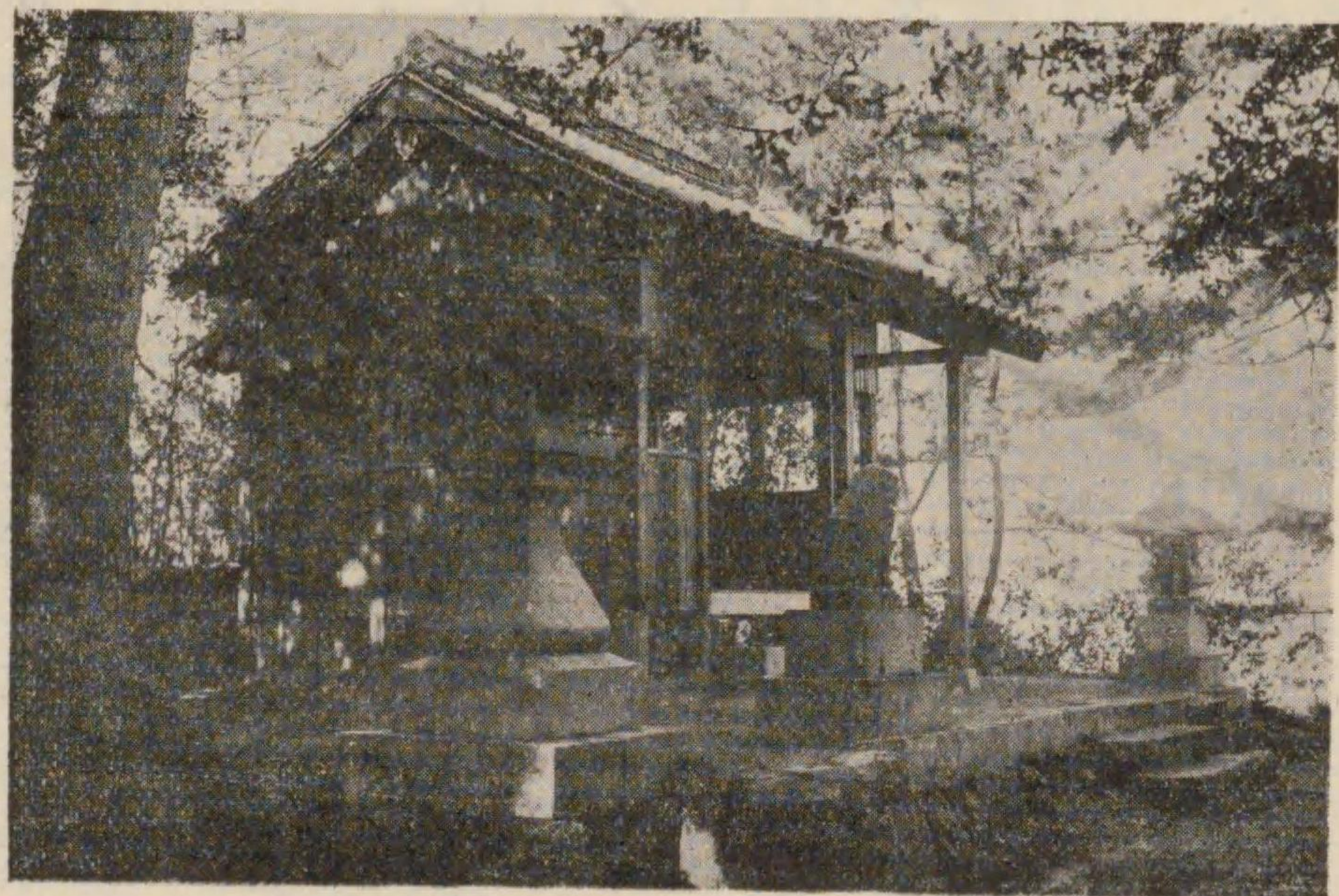
祭神 表土男命 中土男命 底土男命

由緒 豊島村村社八幡神社境外末社。延文五年（紀元二〇二〇）の創祀と傳ふ。玉藻集に『住吉一社 唐櫃村分十輪寺構來』とあり。

祭日 六月二十八日

境内坪數 三百五十六坪

崇敬者人員 八百七十六人



住吉神社

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三百五十六坪

崇敬者人員 八百七十六人

第六章 香川郡

第一節 香川郡概説

東は木田郡及び高松市に接し、西は綾歌郡に隣る。倭名鈔に香川波加とあつて上古は一郡であつたが、中古分れて二郡となり香東郡・香西郡と呼ばれ、又香川郡東・香川郡西と稱へられた。明治五年二郡を合せて元の一郡となし香川郡と呼ぶ。郡名の起源は全讃史に、此の郡の山奥に栳川と云ふ郷ありて上古栳の古木あり、其の下より出る水郡の中央を流れて郡中に匂ふ、郡名是より出たりとあり。西讃府志には、郡内栳川の地由あるか、尙舊事記に五十河彦命は讃岐直五十河別祖、姓氏録に五十香足彦とあるより香河はこの命より出たる名か、郡内十河の地又これに由あるべしとある。倭名鈔に載せられた所屬の郷は、大野於保・井原井乃・多配多・大田於保・笑原乃波・坂田佐加・成相奈良・河邊加波・中間奈加・飯田多育・百相毛奈・笠居乎利の十二郷である。後、井原は由佐、百相は百合、多配は多肥、大田は太田、笑原は笠原、河邊は川

邊、成相は成合、坂田は鷺田と書かれ、更に安原、圓座の二郷を増して十四郷となつた。これに所屬の村名は官社考證によると

安原郷（全讃史にては井原郷の内とす） 安原上・安原下・川内原・東谷。

由佐郷 由佐・岡・吉光・池内・西庄・横井・川東上・川東下。

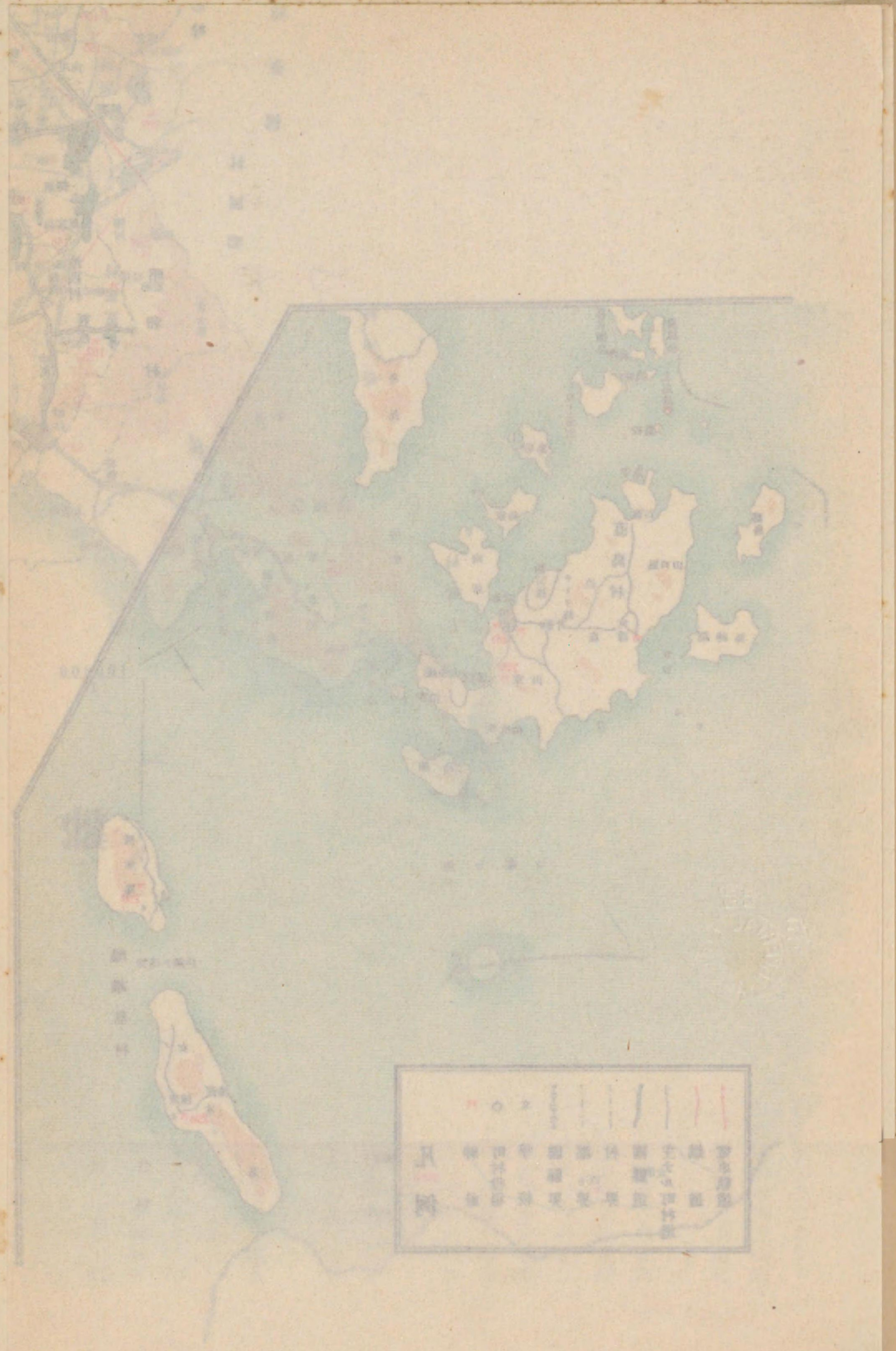
大野郷 大野・鹿角・三名・一ノ宮・淺野・寺井。
百合郷 百合・出作。

多肥郷 上多肥・下多肥。
太田郷 太田・松繩・伏石。

笠原郷 東濱・西濱・宮脇・上村・中村・今里・福岡。
（全讃史は此の郷に笠原村を入れて高松とせり）

川邊郷 川邊。（全讃史には圓座を一村としてこの郷に屬く）

圓座郷 圓座。





に香川波とあつて上古は一郡で
 となり香東郡・香西郡と呼ばれ、又
 へられた。明治五年二郡を合せて示
 ぶ。郡名の起源は全讃史に、此の郡
 りて上古柁の古木あり、其の下より
 郡中に匂ふ、郡名是より出たりと云
 柁川の地由あるか、尙舊事記に五十
 祖、姓氏録に五十香足彦とあるより
 名か、郡内十河の地又これに由ある
 せられた所屬の郷は、大野於保・井
 笑原乃波・坂田佐加・成相奈良・河
 百相奈美・笠居乎利の十二郷であ
 相は百合、多配は多肥、大田は太田

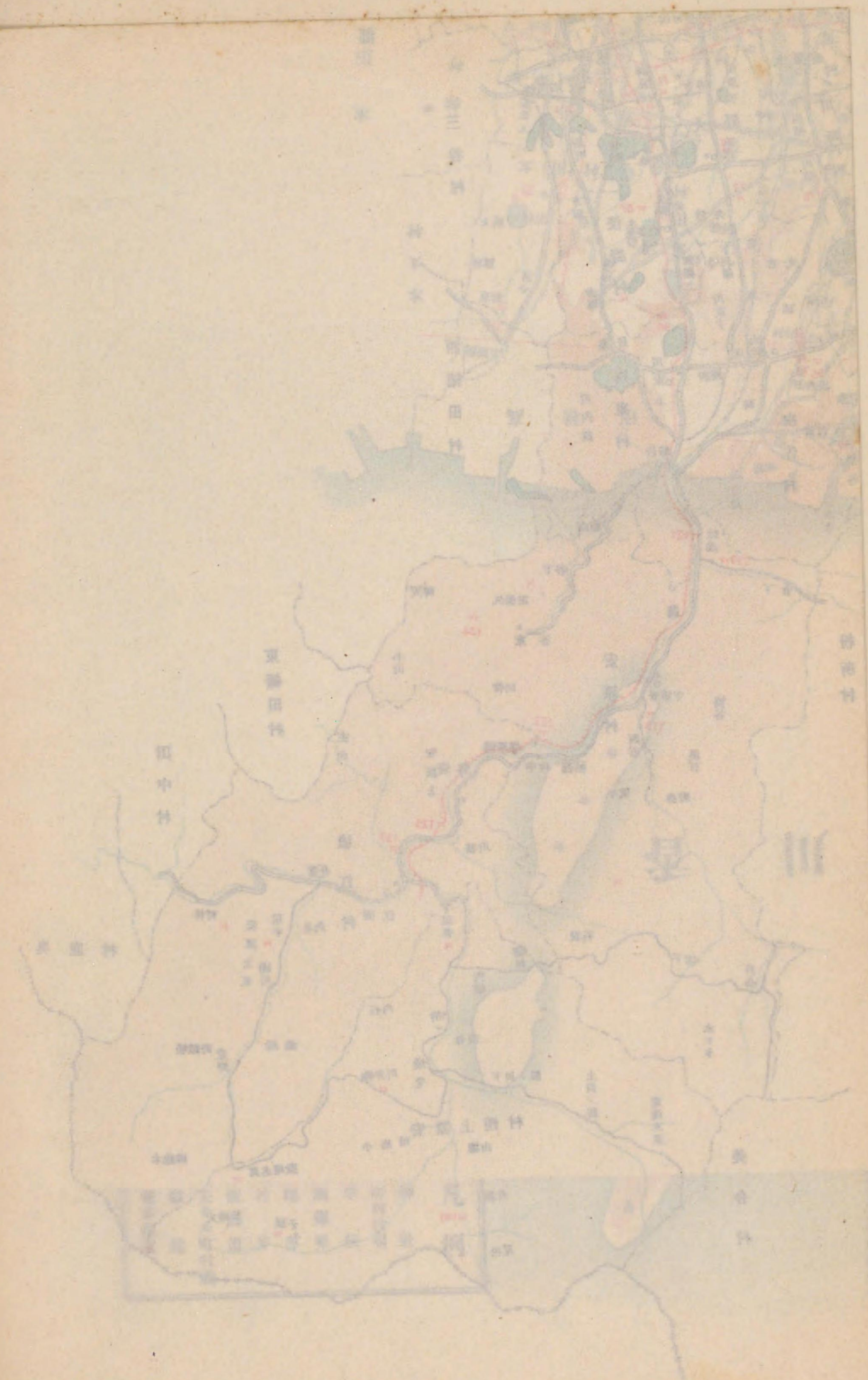
香川郡とあつて上古は一郡であつたが、中古分れて郡となり香東郡・香西郡と呼ばれ、又香川郡東・香川郡西と稱へられた。明治五年二郡を合せて元の一郡となし香川郡と呼ぶ。郡名の起源は全讃史に、此の郡の山奥に栳川と云ふ郷ありて上古栳の古木あり、其の下より出る水郡の中央を流れて郡中に匂ふ、郡名是より出たりとあり。西讃府志には、郡内栳川の地由あるか、尙舊事記に五十河彦命は讃岐直五十河別祖、姓氏録に五十香足彦とあるより香河はこの命より出たる名か、郡内十河の地又これに由あるべしとある。倭名鈔に載せられた所屬の郷は、大野於保・井原井乃・多配多・大田於保・笑原乃波・坂田佐加・成相奈良・河邊乃倍・中間奈加・飯田育百相奈美・笠居乎利の十二郷である。後、井原は由佐、百相は百合、多配は多肥、大田は太田、笑原は篔原、河邊は川

川東下。由佐郷||由佐・岡・吉光・池内・西庄・横井・川東上。川東下。大野郷||大野・鹿角・三名・一ノ宮・浅野・寺井。百合郷||百合・出作。多肥郷||上多肥・下多肥。太田郷||太田・松繩・伏石。篔原郷||東濱・西濱・宮脇・上村・中村・今里・福岡。(全讃史は此の郷に篔原村を入れて高松とせり)(以上香川郡東)川邊郷||川邊。(全讃史には圓座を一村としてこの郷に屬く)圓座郷||圓座。



凡例

○	神社
●	町村役場
×	學校
—	國縣界
—	郡界
—	村界
—	主ナル町村道
—	鐵道
—	電車軌道



成合郷 成合。(全讃史には檀紙を此の郷に屬く)
 坂田郷 坂田・勅使・馬場・沖・萬藏。
 中間郷 中間・岡本・山崎・御厩。
 飯田郷 飯田・鶴市・郷東・檀紙。
 笠居郷 笠居。(全讃史には香西を屬く)
 (以上香川郡西)

明治二十三年市町村制を實施し笠原郷の内今里及び福岡上を除く高松市・宮脇村・栗林村・東濱村が置かれたが、いづれも後高松市に編入された。現今の町村は

太田村 太田・松繩・伏石・今里・福岡上。 多肥村 上多肥・下多肥・出作ノ内。 佛生山町 百相・出作ノ内。
 大野村 大野・寺井。 一宮村 一宮・成相・鹿角・三名
 淺野村 淺野。 由佐村 由佐・岡・吉光。 池西村 池内・西庄・横井。 川東村 川東上・川東下・川内原。
 鹽江村 安原上・安原上東。 安原上西村。 安原村 安原下・東谷。 鷺田村 坂田・勅使・馬場・沖・萬藏。
 川岡村 川邊・岡本。 圓座村 圓座・山崎。 檀紙村 檀紙・中間・御厩。 弦打村 飯田・鶴市・郷東。 香西町。 下笠居村。 上笠居村。 雌雄島村 女木・男木。 直島村。

の二町二十村である。

本郡に於ける延喜式内社は國幣中社田村神社のみである。三代實錄に元慶五年從五位下を授くとある船山神は佛生山町村社百相神社がこれであるともいはれる。この他官社考證に古社と思はれるものとして挙げられた神社は

鹽江村白人神社。安原村村社天野神社、童洞神社、郷社西谷八幡神社、村社平尾神社。由佐村縣社冠纓神社、佐賀神社。大野村天降神社。一宮村國幣中社田村神社境内神社なる素婆俱羅社、宇都伎社。佛生山町村社藤神社。多肥村郷社櫻木神社。太田村村社伏石神社、立石神社、村社平石井神社。鷺田村郷社鶴尾神社。雌雄島村村社豊玉姫神社、加茂神社、豊玉依姫神社。直島村天皇神社、住吉神社。等で、右の外に舊中間村の中間社、御厩村の御厩神社、飯田村の飯田神社、東谷村の小田神社、太田村の今竹神社が挙げられてゐる。

本郡内には細川頼之が岡館に居城した關係上細川氏と縁由ある神社、及び香西氏と縁由ある神社が頗る多い。

本郡に於ては特殊神事として特に記載すべきものなく、田村神社の御蚊帳垂、御蚊帳揚神事の外香西地方に百手神事が行はれてゐるのみである。百手については仲多度、三豊二郡

に多いのでその條下に述べることにする。(倭名類聚鈔 全讚史 官社考證 讃州府志)

第二節 香川郡内神社

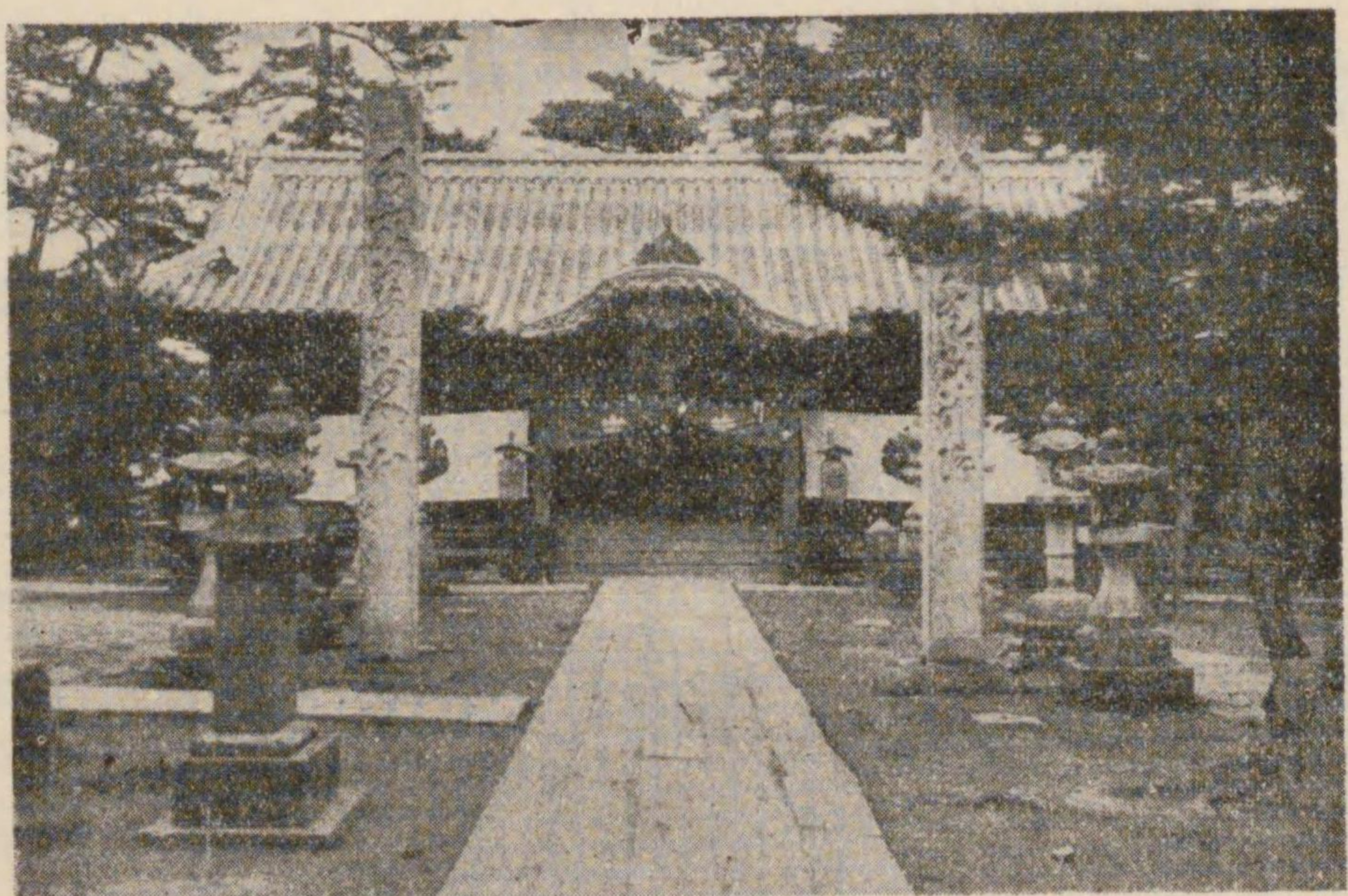
一 佛生山町

(一) 村 藤 神 社 佛生山町大字百相字上町

祭神 稚日女命

由緒 古くは淺野村唐土に鎮座ありしが、萬壽年間(紀元一六八五頃)佛生山と淺野村との境なる現今の平池の松原に遷座し、久安年間宮殿の周圍に池を築く。この池狹隘なりしを以て治承二年平清盛阿波の名族阿波民部をして之を擴築せしめしを以て平池と稱すと云へり。其の後洪水ありて池水溢れ中洲なる宮殿を浸せしかば、西方の岡に遷座し更に現今の法然寺の山に遷座せり。然るに國守松平頼重この山に法然寺を造營するに方り、寛文九年現今の地に社殿

を造營して遷座し奉れり。現今の社殿は即ちその時のものにして頼重の造營する所とす。又國中事ある時は藩主自ら參拜祈禱を爲



村 藤 神 社

し神符を國中に配付する等の事ありて今も藩主祈禱の遺蹟、手植の松等残れり。松平家代々の崇敬厚く、高松藩記に社領六石田村内記と見ゆ。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せら

る。(三代物語 全讚史 玉藻集 古名勝圖繪)

例祭日 十月二十二日二十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 中殿 拜殿 祓殿 神饌殿 社務所 寶藏 神門 休憩所

境内坪數 六千〇六十八坪

氏子區域及戸數 佛生山町(神宮寺、出作を除く) 淺野村字舟岡 岡ノ上 池ノ側 下久保 實相寺 七百四十七戸

境内神社 天神社(菅原道真公)

金刀比羅神社(大物主命) 寛保三年五月十日創建。

稻荷神社(倉稻魂命) 文政二年二月四日創立。

恵比壽神社(事代主命) 享保三年正月十日創立。

大内神社(應神天皇) 寛文四年九月二十日創立。

工初神社(手置帆負命 彦佐知命) 明治九年八月二十日創立。

春日神社(天津兒屋根命) 明治九年八月五日創立。

式内廿四神社(讃岐國延喜式内二十四神) 慶應二年四月二十日延喜式内讚岐

國二十四社の神を奉齋す。

白鳥神社(日本武命) 慶應二年四月二十日創立。

(二) 八幡神社 佛生山町大字百相字柳股

祭神 應神天皇

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。 文治年間の創祀と

いふ。古老の口碑に依れば、昔社前の大川の底掘をなせしに、黄金の像現れしを里人等畏敬して祠を立て祀りしといへり。明治初年右の像を神鏡に改めて御靈代とせりと。

祭日 八月十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 八十二坪 崇敬者人員 百五十人

(三) 龍田神社 佛生山町大字百相字城墟

祭神 龍田大神

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七十五坪 崇敬者人員 二百十五人

(四) 柿木神社 佛生山町大字百相字城墟

祭神 龍田大神

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社

祭日 五月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十三坪 崇敬者人員 百二十八人

(五) 馬神神社

佛生山町大字百相字城壙

祭神 龍田大神

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社

祭日 五月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十六坪 崇敬者人員 百十九人

(六) 小倉神社

佛生山町大字百相字櫻馬場

祭神 猿田彦命

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。明和三平(紀元二

四二六)の創祀といふ。

祭日 八月二十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七坪 崇敬者人員 百二十三人

(七) 金山神社

佛生山町大字百相字櫻馬場

祭神 金山彦命

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。天明四年(紀元二

四四四)九月二十七日の創祀といふ。

祭日 九月二十七日

主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪

崇敬者人員 百五十人

(八) 若宮神社

佛生山町大字百相字苑

祭神 軻遇突智命

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。文化年間、或は

云ふ文政十一年(紀元二四八八)十月上旬當地毎夜出火あ

りしを以て、鎮火祈願の爲め當社を創祀し靈驗を蒙れりと

いふ。

祭日 九月十八日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百九十二坪

崇敬者人員 二百三十五人

(九) 金刀比羅神社

佛生山町大字百相字赤堂

祭神 大物主命

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。寶曆年間の創祀。

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四十二坪 崇敬者人員 百二十八人

(一〇) 生目八幡神社

佛生山町大字百相字長塚

祭神 應神天皇

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社

祭日 六月十五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 二坪 崇敬者人員 二百七十人

(一一) 村百相神社

佛生山町大字百相字神宮寺

祭神 倭迹々日百襲姫命 彦五十狭芹彦命 猿田彦命 天

隱山命 天伊田根命

由緒 社傳によれば、倭迹々日百襲姫命上古讃岐の東部に

來り給ひ、更に移りて當地船山に登り給ふ。此の地は讃岐

の中央にして好き所なりと賞で給ひしにより祠を建て之を

奉す。地名百相(倭名鈔百相^{毛奈美})は命の御名によつて起

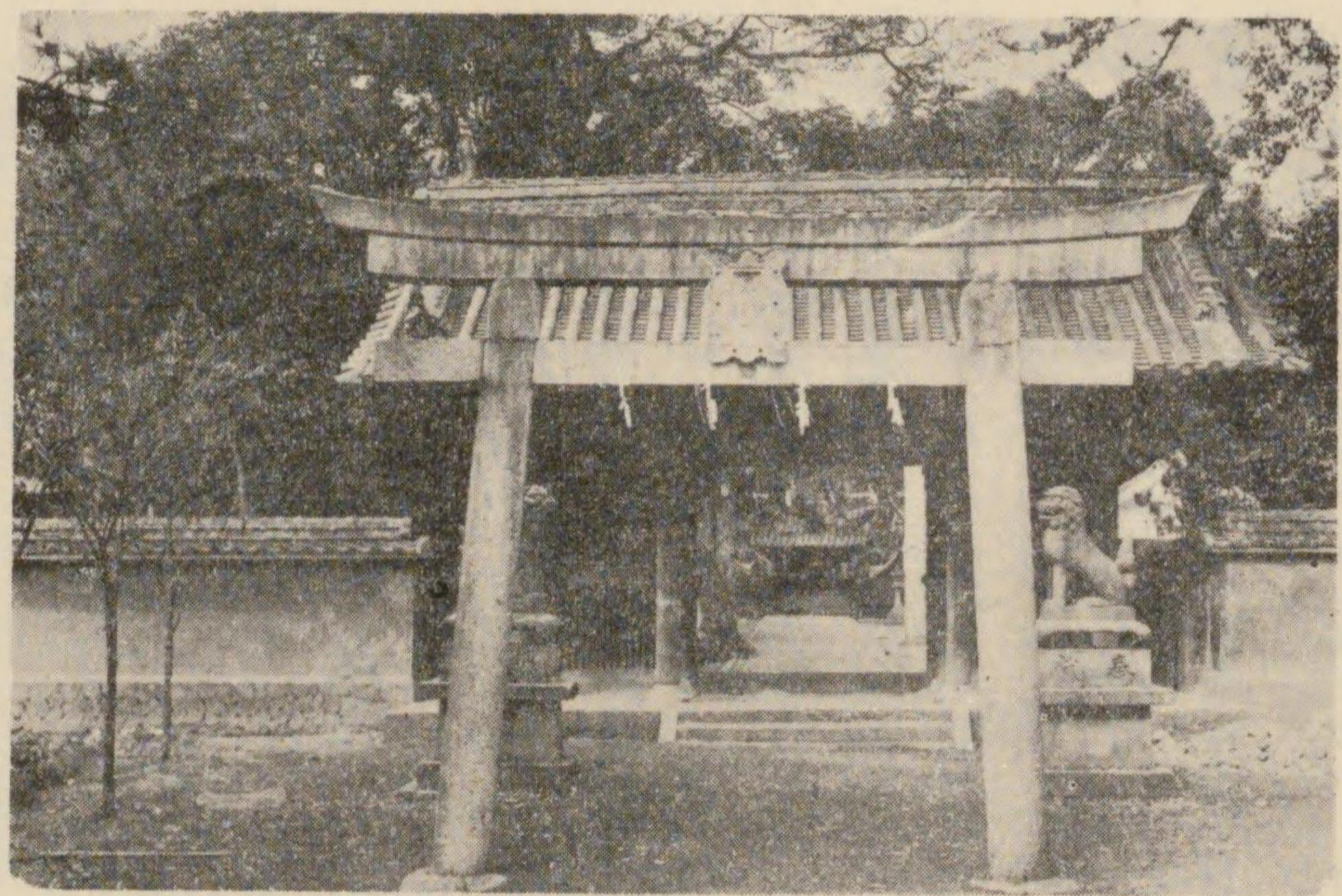
れりと。彦五十狭芹彦命は百襲姫命の御弟に座し、他の三

神は配祀せるなりと云ふ。國幣中社田村神社の御祭神と御

同神なり。創建は天平年間と云ひ、初め淺野村船岡山に鎮

座あり。船岡山は古くは百相郷に屬し船山と稱し、當社又

船山神社と稱へられ、三代實錄に『元慶五年十一月十四日



戊午授讃岐國正六位上船山神從五位下」とあるは當社なりと云へり。鎌倉時代までは社殿宏壯、近郷の大神にして

國司守護の尊

崇厚く、細川

頼之當社を以

て岡館北方の

鎮守となし、

大野、百相の

社間にて二石三

百斗を寄進し、

相貞治五年三月

神扁額を奉納せ

社しこと讃岐細

川記に詳な

り。天正年間

兵火に罹りた

るを以て別當

神宮寺の境内

に社殿を營み奉遷せり。これ現今の鎮座地にして爾來神宮

寺大明神と稱せらる。神宮寺は後世變によりて廢寺となり

しが、當社は氏子の奉祀する所となりて存続す。然れども社號は猶神宮寺大明神と唱へられ、舊藩の帳簿に神宮寺神社と載せられたり。高松藩主松平頼重法然寺を創立し、神宮寺の地を以てその寺領とするに及び領内一社の神として崇敬厚く、年毎に米一石二斗の奉納ありて慣例となり明治初年に及べり。又社地にある古松は頼重が日向國より移植せしものにして他の松と種類を異にせり。明和二年正月火災あり。安永二年本殿を再建し、文化三年幣殿を建築せしが爾來年久しくなりしを以て明治三十二年改築せり。明治初年社號を百相神社と改む。大正五年十月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 讃州府志 玉藻集 香川縣史)

例祭日 九月三十日

特殊神事 御田植祭 大字百相字祇園に當社神饌田あり、毎年六月中旬御田植祭を執行す。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 祓殿 隨神門 寶藏 社務所 旅所 手水舎

寶物 扁額細川頼之奉納 外五點

境内坪數 千三百十七坪

氏子區域及戸數 宇神宮寺 九十七戸

居り、當地擁護の神なきを憂へて豊前國宇佐八幡の神靈を迎ふ。神輿初めて生島浦に着く、依つて其處を宮の浦と云ふ。浦の南檀上原に假宮を造營して神輿をこゝに滞め御幸の装を整へ笠居郷山口邑藤尾の原に社殿を營みて鎮座し奉り、以て當郷擁護の神となし藤尾八幡宮と稱し奉れり。數年にして更に磯崎山に遷座あり。磯崎山は香西氏が居城たる佐料城の北に當り海邊に



郷社宇佐神社

し藤尾八幡宮と稱し奉れり。數年にして更に磯崎山に遷座あり。磯崎山は香西氏が居城たる佐料城の北に當り海邊に

境内神社 神宮神社(保食神)

永井神社(廣瀬大神 一に曰 和賀宇加乃賣神)

(一三) 八坂神社 佛生山町大字百相字祇園

祭神 素盞鳴尊

由緒 佛生山町村社百相神社境外末社

祭日 七月七日より十四日まで

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百十二坪 崇敬者人員 百十七人

二 香西町

(一三) 郷社 宇佐神社 香西町字香西

祭神 仲哀天皇 應神天皇 神功皇后

由緒 嘉祿年中香西左近將監資村の創祀する所にして藤尾八幡宮と稱せらる。資村は中御門中納言家成の後裔なり。

承久の亂關東に與して功あり阿野、香川二郡を領し香西に

位し風光佳良なり。擁護の神なれば磯崎山の名を改めて藤尾山と稱し南面を墾きて奉遷し、舊社地を以て神領の田となし神高と稱せり。然るに天正二年阿波の三好氏來りて香西氏を攻むることあり、又長曾我部氏の起るありて、香西氏はその居城平陸にして守り難きを察し、城地を藤尾山に求め、天正三年社殿を山上に遷し、その跡に城を築く。藤尾城これなり。天正七年香西伊賀守佳清此の城に移る。天正十年長曾我部氏の攻むる所となりしが、香川山城守信景間に居て和を謀り佳清遂に元親に黨す。元親の豊臣秀吉に降るに及びて秀吉遂に香西氏の城邑を廢し、香西氏離散して後當社も亦衰微するに至れり。慶長年中香西氏の支族植松彦太夫、住田入道淨光等願主となり、香西・植松・新居の各氏及びその支族佐藤・竹内・諏訪・渡邊・四宮の諸氏と力を協せ、社殿を舊地藤尾山に復して笠居一郷の神として崇敬せり。國主生駒一正社領六石一斗六升を寄進し、松平氏亦之に倣ふ。後社號を宇佐神社と改め、明治六年郷社に列せられ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。明治十六年火災ありて社殿、神庫を燒失せしが、同三十二年再建せり。一説に當社は山田郡西植田村の藤尾八幡宮を迎へて創立せりといひ、全讃史、三代物語等

之を載せたり。(南海通記 三代物語 全讀史 今名勝圖繪 玉藻集 生駒分限帳) (當社のこと南海通記に載せて甚だ創立の状態、社僧奉仕の事由等就て見るべし。)

例祭日 十月二日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿 隨神門 神樂殿

寶藏

寶物 文書香西記 薙刀藤原守國作 太刀 外三點

境内坪數 千四百〇四坪

氏子區域及戸數 香西町 上笠居村 下笠居村 一千二百三十戸

境内神社

松尾神社(大山咋神)

白峰神社(崇徳天皇 合大年神 罔象女神 武内宿禰命)

彦狭知命 澳津彦神) 香西資村の創祀に係る。香西氏は藤家

へしかば、崇徳天皇の爲には離寇にして、その祖家成鳥羽院に仕

ぜむ爲め、八幡宮と並べて奉齋せりと云ふ。(南海通記)

大正十二年境内神社たりし大歳神社、清水神社、高良神社、藤尾神社、磯崎神社を合祀す。

岩峰神社(天機姫命) 廣田神社(神功皇后)

琴平神社(金山彦神 金山姫神)

(一四) 賀茂神社 香西町字香西

祭神 事代主神

合祀祭神 伊邪那岐神 伊邪那美神(一に曰 別雷神 大山津見神 伊邪那岐神 伊邪那美神)

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。當社古くは惠比須

神社と稱へられ往古より當郷に鎮座あり。香西記に、寛文

年中一郷一社の命ありて郷内の小祠は悉く郷社に合祀せし

が、當社は本津の浦惠比須と稱し、海邊の守護神の由申立

て、寄宮とせざりし旨記されたり。明治十六年津山王神

社、賀茂神社を、同四十年^{字香西}熊野神社を合祀の上、同年

十月十五日賀茂神社と改稱す。

祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百五十二坪 崇敬者人員 千人

(一五) 菅原神社 香西町字西打

祭神 菅原道真公

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。菅公土人平賀某に

賜ふ所の神影を奉齋し、里人小祠を營みて崇敬せしが、後

境内坪數 百〇五坪 崇敬者人員 千二百五十人

(一七) 惠比須神社 香西町字香西

祭神 事代主神

合祀祭神 別雷神 澳津姫神 澳津彦神 大山津見神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。香西記によれば、

當社また本津惠比須神社と同じく、寛文中寄宮の際、中

須賀浦の漁場及び海邊守護神として寄宮とはならずと云へ

り。明治十八年^{字香西}賀茂神社を合祀し、明治四十年一月同

所澳津神社・山王神社を合祀す。當社は平賀神社の御旅所

に充てらるゝ例なり。

祭日 陰曆六月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 百〇二坪 崇敬者人員 五百七十人

(一八) 平賀神社 香西町字平賀上

祭神 仲哀天皇 應神天皇 神功皇后

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。香西雜記によれ

ば、仙石權兵衛秀久封を當國にうけ、宇多津聖通寺山に築城

祭日 陰曆七月二十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

阿野、香川二郡の領主香西氏之を尊崇し、香西中島の南面に社殿を造營し神影を遷して累世厚く崇敬せりと云ふ。名勝圖繪には、神影は平賀某に賜ふ所にして後中村天満宮に納め、その後神像を造りて當社に納む。當所は顯然たる菅公の舊蹟なれば村民の信仰厚しと云へり。中島の南面とは香西氏の天神廓の中にして、現今の字西打小字天神の地なり。(今名勝圖繪)

祭日 七月二十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二百四十七坪 崇敬者人員 三百五十人

(一六) 三和神社 香西町字香西

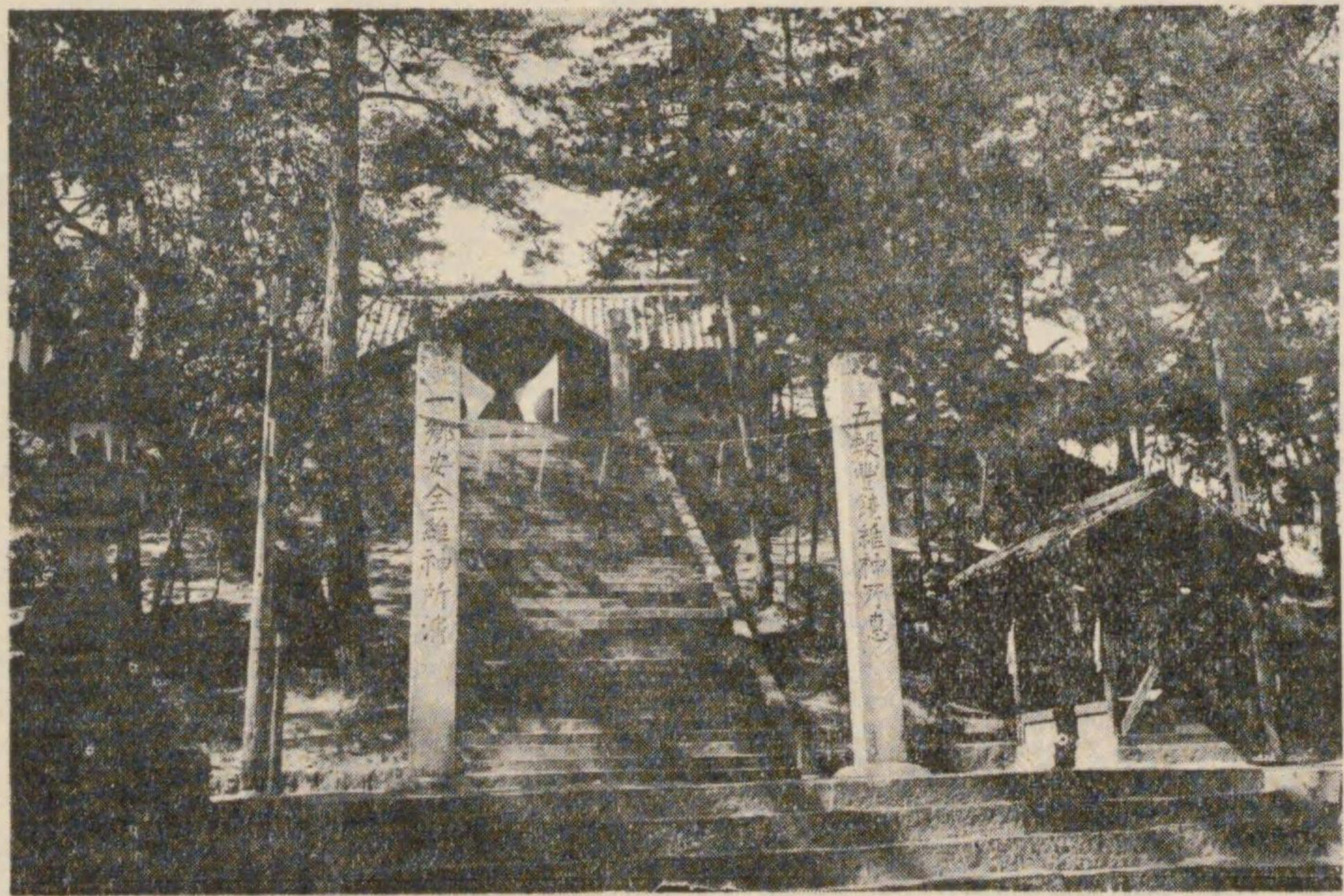
祭神 底津少童神 中津少童神 表津少童神

合祀祭神 別雷神 事代主神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。香西の地海に瀕せるを以て古くより海神を祀れり。當社古くは海神社と稱へ

られしが、明治四十年同所今宮神社を、翌四十一年^{字釣賀茂}神社を合祀し、舊社號海神社を改めて三和神社と稱す。

して引田より移居せし時、香川郡安原山の百姓仙石氏の命を奉ぜざりしかば秀久亂民百餘名を刎せり。故を以て安原の民安住する能はず離散する者多し。當時安原にダケ八幡、又平賀八幡といふ神祠ありしが、崇敬の者共神體を奉じて村を離れ、海邊を志して當地に來り、里人と共に小祠を現今の香西寺の地に營み奉齋せり。爾來邑里の崇敬漸く加はり、慶長、元和の頃に及び繁榮の社となれり。然るに寛文



平賀神社

年中一郷一社の命ありて當社も亦藤尾宮（郷社宇佐神社）へ寄宮となり、社地は地藏院拜受して堂宇坊舎をそこに移せり。正徳四年八月舊社地の傍に本殿一字、拜殿並に中殿一字を建て、藤尾宮より遷座し、以て地藏院の鎮守として往古の如く奉齋し、平賀及び中須賀の兩邑藤尾宮より分離して當社の祭祀に奉仕せり。而して毎年八月十五日の祭日には安原邑より一兩名必ず參列し、安原擁護の神として供御、神酒を頂くを例とせりと云ふ。（全讃史 古名勝圖繪）

祭日 十月一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 五百七十三坪 崇敬者人員 千二百人

(一九) 柴山神社 香西町字平賀下

祭神 大國主神 大歲神 御歲神 事代主神（二に曰市杵島姫神 大國主神 大歲神 御年神 事代主神）

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。政要錄に、平賀山分の内芝山辨天は山上の林共地藏寺支配の處、此度芝山辨天林下にて二町三反の内一町の畑を開き檢地を請ふ。残り辨天佛餉料として寄附す云々の記事あり、此の芝山辨天

とは當社の事なるべし。

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 千〇九十四坪 崇敬者人員 一千人

(二〇) 稻倉神社 香西町字平賀下

祭神 倉稻魂神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳ふる所によれば往古香西寺の鬼門擁護の神として祀られたりといふ。明治三十九年舊社號宇賀神社を改めて稻倉神社と稱す。

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十七坪 崇敬者人員 五百六十五人

(二一) 澳津彦神社 香西町字平賀上

祭神 澳津彦神 澳津姫神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。天正年間香西佳清宇佐神社をこの地に遷し、慶長年間更に舊地に遷座せしを以て、その跡地靈跡なればとて當社を祀りたりと傳ふ。

(二三) 村廣田八幡神社 太田村大字太田字鑄地原

祭神 應神天皇 神功皇后 玉依姫命

合祀祭神 健甞龍命 天照大神

由緒 三代物語に『大田八幡宮郷社石清尾西願寺主三其

三太田村

(三三) 高良神社 香西町字西打

祭神 武内宿禰命

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。當社々地は郷社宇佐神社御旅所に充てらるゝ例なり。

祭日 十月四日 主なる建造物 本殿 拜殿

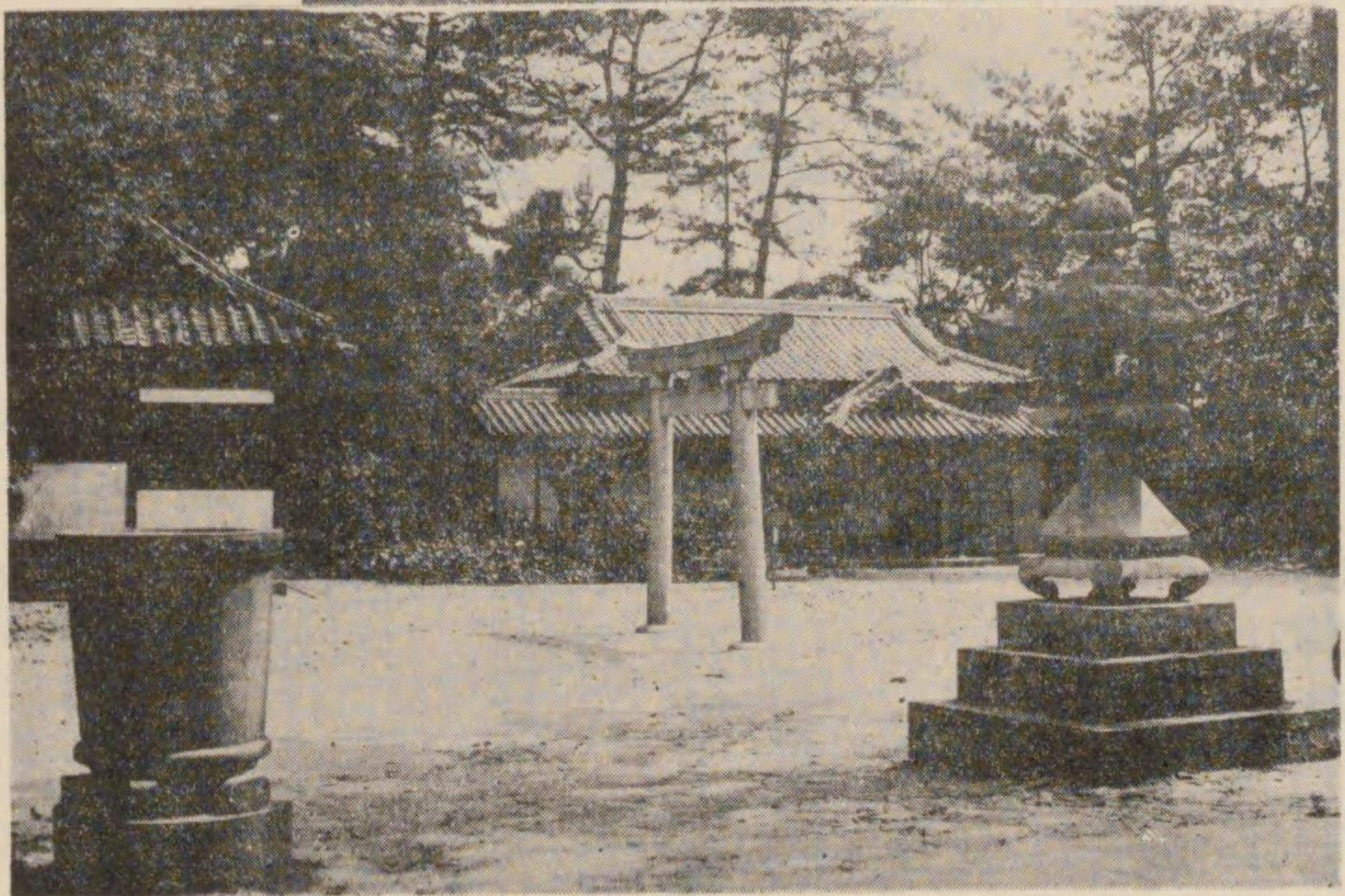
境内坪數 三百七十四坪 崇敬者人員 二百四十人

祭。全讚史に

『太田八幡宮一
村之社也未_レ知_レ
肇_レ一矣』とあ
り。古名勝圖繪
には『社僧西願
寺、祭禮八月十
四日、九月九日、
當社肇祀未詳寬
永六年焼失なり
しを其後再興せ
り』と見ゆ。明
治四十年十月二
十四日神饌幣帛
料供進神社に指
定せらる。



村社 廣田八幡神社



廣田八幡神社社務所

合祀す。

例祭日 十月十一

日十二日

主なる建造物 本

殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二千〇

十坪

氏子區域及戸數

大字太田 二百

七十一戸

境内神社

若宮神社(仁徳

天皇)

(二四) 天満神社

太田村大字太田字皿井

祭神 菅原道真公

由緒 太田村社廣田八幡神社境外末社

祭日 九月五日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八十八坪 崇敬者人員 約二百八十人

(二五) 村熊野神社

太田村大字松繩字宮西

祭神 伊邪册命 事解男命 速玉男命

合祀祭神 熊野新宮神 熊野那智神

由緒 元久、承元の頃熊野清光の勸請と云へり。清光は始
め三木郡田中村に居り、山田郡十河村に移り、後松繩に來
住す。宮脇氏の祖なり。文明年中宮脇越中守長定之を再營
し祭田を寄進すと云ひ、社記に、社僧光明寺、三所權現共
に祭田三石とあり。三代物語に『熊野權現在松繩熊野清光
遷_レ之……社領三石光明寺主其祭』。全讚史に『村社也元
久承元間宮脇氏之太祖熊野清光始祠_レ之祭領三石』。古名勝
圖繪には『熊野三所大權現……新宮祭禮八月十三日、本
宮九月十五日、那智九月十七日……當社は嘉祥年中智證

大師勸請なり三社相去事百歩今に至る迄祭禮怠らざりける
又熊野清光といふ者勸請すともいへり……元龜天正の兵
亂によりて社殿も頽廢せしを元和中生駒正俊朝臣より社
殿再興ありて社領を給へり』と見ゆ。高松藩記寺社領の部
に『光明寺三石』とあるは當社々領なるべし。而して光明
寺は僧園珍の創建と云ふ。
明治四十五年社殿の改築ありて、大正二年九月神饌幣帛料
供進神社に指定せらる。(三代物語 全讚史 古名勝圖繪
玉藻集)

大正六年 宇宮 熊野新宮神社・熊野那智神社を合祀す。

例祭日 十月六日

主なる建造物 本殿 上拜殿 中拜殿 拜殿 神饌殿

境内坪數 七百二十五坪

氏子區域及戸數 大字松繩 九十二戸

境内神社 松熊神社(應神天皇 菅原道真公 久那斗神

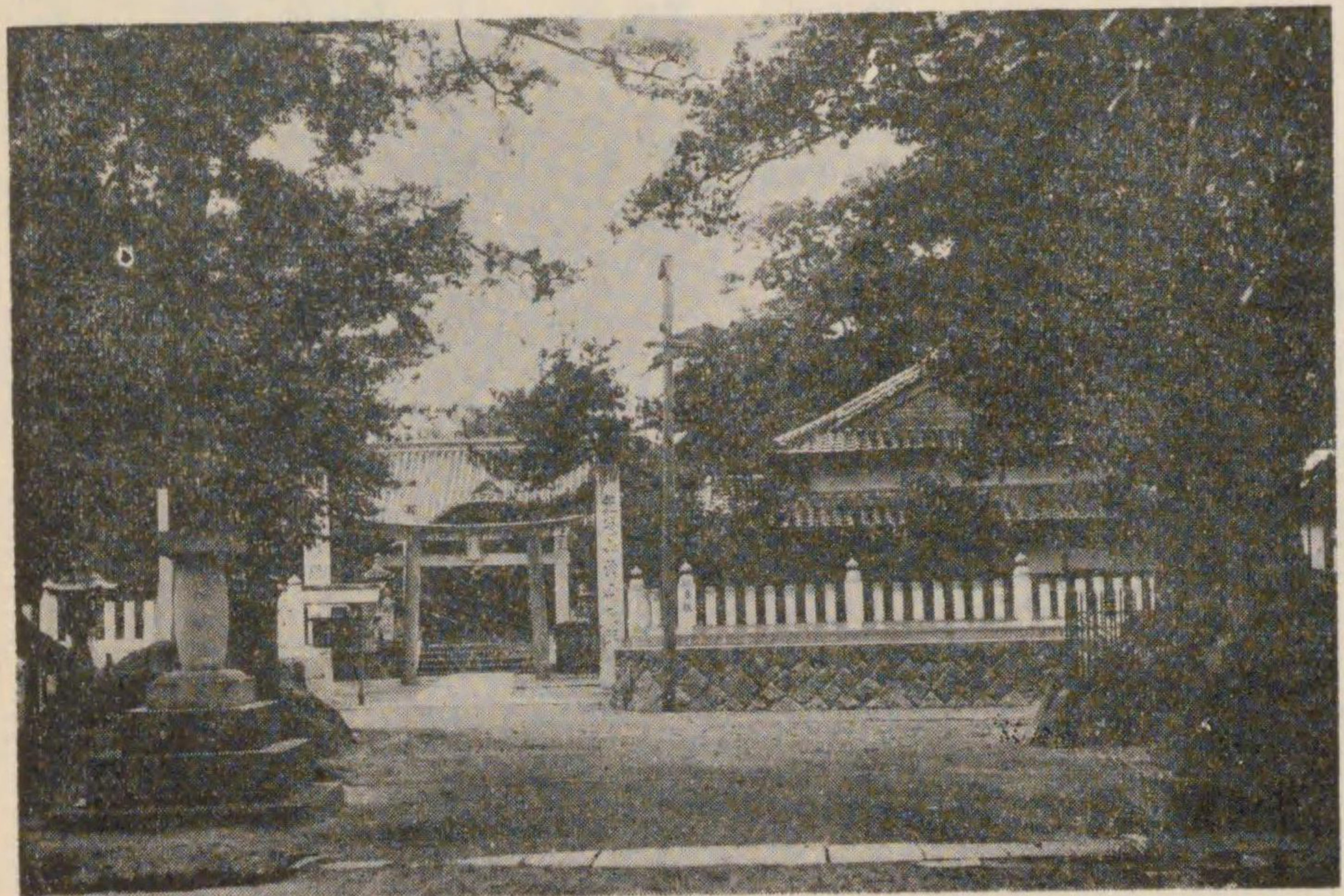
天照皇大神 加具都智神 大山祇神) 大正六年大字松繩流

天満天満神社、宇境目塞神社、宇宮西三所神社
を合祀して境内神社となし松熊神社と改稱す。

(二六) 村伏石神社 太田村大字伏石字狹壘

祭神 應神天皇 玉依姬命 神功皇后

由緒 慶長七年當村の土寺島彌兵衛吉長の創祀なりとも云ふ。當社及び立石神社居石神社を以て古來より三所八幡宮と稱す。貞享二年再營の事名勝圖繪に見えたり。又此の神蝮蛇を憎むを以て當社蝮蛇を生ぜず。村民他村に行くと雖も其



村伏石神社

主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三百四十一坪 崇敬者人員 約百八十人

(二八) 居石神社 太田村大字伏石字居石

祭神 應神天皇 玉依姬命 神功皇后

由緒 太田村社伏石神社境外攝社。村社伏石神社及び立石神社と共に三所八幡宮と稱され、御神體に彫刻せられたる文に『保安三年大旱六月八日居石翁出現忽鹿化西南際行而穿泉深二尺里人集汲飢凌鹿泉云々同五年太田多肥堀事廣水大出食邑由縁有因加保安五年二月二十三日 綱光記』とありといふ。古名勝圖繪に『居石神社、祭神月萱、傳云景行天皇子大碓小碓二皇子靈魂と云、社記曰本社は保安年居石五郎右衛門綱光の勸請其子孫姓曰佐藤又曰居石猶詳在家譜之を略す』と見えたり。

祭日 十月五日六日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二十一坪 崇敬者人員 約七十人

(二九) 村平石井神社 太田村大字今里字東脇

祭神 應神天皇 神功皇后 玉依姬命

の害を蒙ることなしと翁姫夜話に云へり。大正六年十一月三十日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(翁姫夜話 全讃史 古名勝圖繪)

例祭日 十月四日五日

特殊神事 御衣裝替神事 二十年毎に御神體御衣裝替の神事を行ふ。御衣は氏子中の老姫七十歳以上の者の手により綿より糸を製し布に織りて仕立上りの物を用う。當夜は開扉して一般に御神體を拜せしむるを例とすといへり。

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 五百四十四坪

氏子區域及戸數 大字伏石 百六十四戸

(三七) 立石神社 太田村大字伏石字立石

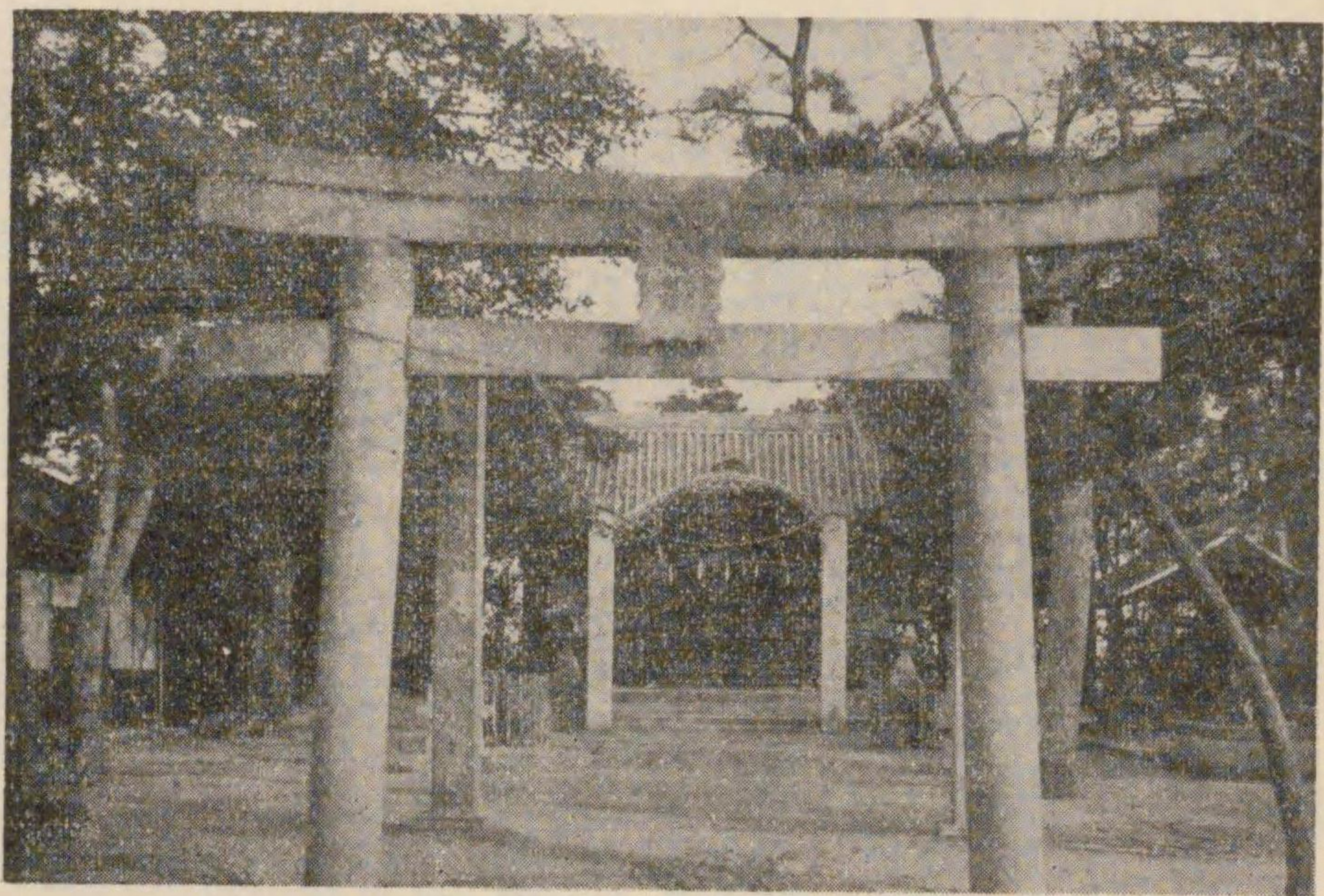
祭神 應神天皇 神功皇后 玉依姬命

由緒 太田村社伏石神社境外攝社。立石八幡宮と稱せられ、村社伏石神社と同時の創建とも云へり。伏石神社、居石神社と共に三所八幡宮と稱せられたり。

祭日 十月五日六日

特殊神事 御衣裝替神事 伏石神社に同じ。

由緒 永正五年(紀元二一六八)の創祀と傳ふ。往昔當所は石清尾八幡宮の氏子たりしが、祭禮の時座席の争を生じたるにより、



村平石井神社

佐藤五郎左衛門なる人石清尾八幡に參詣し社頭の松一本を伐りて歸り、此處の平石の上に砂を盛りその松を立て、神慮をトせしに、その松石上に根を生じて生長せり。官之を檢して遂に勸請を許せり。

依つて平石八幡と唱へしが、松樹の下常に潤をふくめるを以て祝ひて平石井八幡宮と奉稱す。國主生駒氏社領を寄進

し、松平氏亦二石六斗六升三合を寄進す。大正十二年
中殿、拜殿、寶藏等の改築あり、同年九月神饌幣帛料供進神
社に指定せらる。(三代物語 全讚史 古名勝圖繪)

例祭日 九月二十八日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿 寶藏 社務所
寶物 扇額一點

境内坪數 千〇六十四坪

氏子區域及戸數 大字今里 七十四戸

(三〇) 天満神社 太田村大字今里字東脇

祭神 菅原道真公

由緒 太田村社平石井神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 六十坪

(三一) 浪指神社 太田村大字福岡上字辨財天

祭神 市寸島比賣命

由緒 高松市縣社石清尾八幡神社境外末社。傳ふる所に
よれば、壽永年間平家の軍勢源義經に逐はれ香川郡笹原庄

東部の海邊に來り假睡せし節神夢ありて、當地は白砂青松
海また遠淺なり、風光嚴島に劣らじ、汝等奉齋する所の平
家の守護神を鎮め奉れと。こゝに於て同地一本松に奉齋せ
り。今より百六七十年前現今の地に遷し浪指神社と改稱す
と云ふ。(讃州府志 名勝圖會)

祭日 十月一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所

境内坪數 二百八十六坪 崇敬者人員 約千人

境内神社 神明神社(天照大神) 八幡神社(品陀和氣命)

地神社(大地主命)

(三二) 荒神社 太田村大字福岡上字深田

祭神 稚産靈神

由緒 高松市縣社石清尾八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十三坪 崇敬者人員 十一人

四 鷺田村

(三三) 郷社 鶴尾神社 鷺田村大字坂田字北山浦

祭神

應神天皇

菟道稚郎

子命 氣

長足姫命

由緒 古來

坂田一郷の

氏神なり。

大同年間の

創祀にして

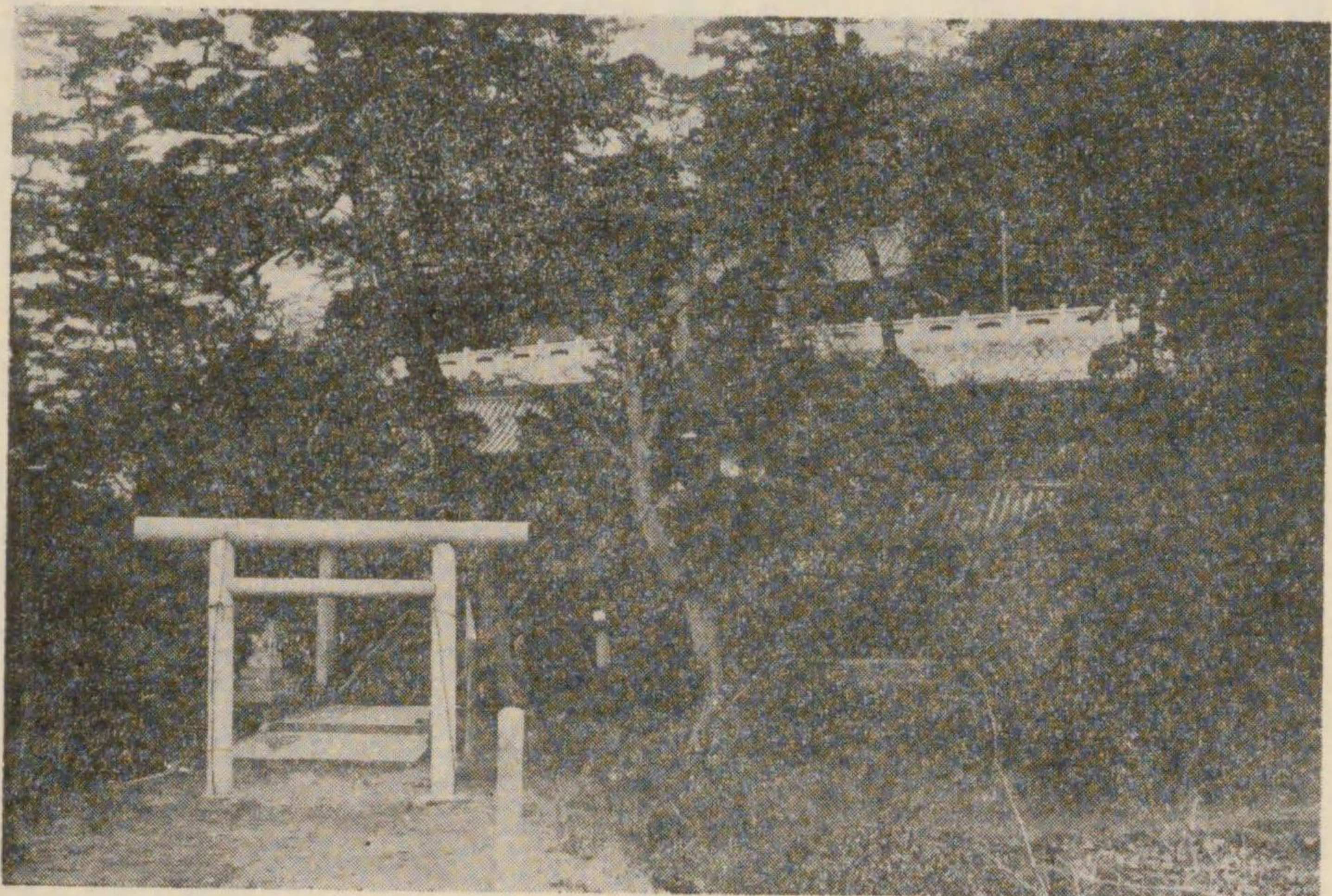
元慶三年靈

鶴の奇瑞あ

りしを以て

鶴尾八幡宮

と奉稱すと



郷社 鶴尾神社

云へり。或は云ふ。姓氏錄左京皇別に「坂田宿禰息長真人同
祖應神皇子稚渟毛二派王之後也天淳中原瀛真人天皇御世出
家入道法名信正娶近江國槻本公轉戸女生男石村附母
氏姓曰槻本公 男外從五位下老男從五位上奈且磨次從五
位下豊成次豊人等皇統彌照天皇延曆二十二年賜宿禰姓
於是追陳父志取祖父生長之地名改槻本賜坂田宿
禰今上弘仁四年同奈且磨等改賜朝臣姓也」とあり、而し
て當地古くは坂田郷と稱せられしより觀れば、郷名坂田は
右坂田氏の移住によりて起りしものにして當社は往古より
坂田郷の氏神なれば、坂田郷在住のこれ等の氏族が其の祖
なる應神天皇を祀りしにあらずやと。尙高松市藤塚町に槻
本神社ありて國史現在社なり。これ亦槻本公關係の神社な
るべしといへり。

仁和年中菅原道真當社を坂田村土居原(現在鎮座地の東南七八丁)に奉遷
し、新に社殿を營築す。依て土居の宮と稱せられたり。全
讚史に「蓋片山玄蕃俊武城之鬼門鎮守也今爲一村社俗
曰土井之宮」と見ゆ。元祿四年社殿の造營ありて、舊地
即ち現に遷座奉齋し鶴尾八幡宮と復稱す。其の後社殿大破
に及びしを明治二十八年造營す。明治六年郷社に列せら
れ、同四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せら

る。(三代物語 玉藻集 全讀史 古名勝圖繪 香川縣史)

例祭日 十月二日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 釣殿 奏樂殿 御饌殿

神輿庫 隨神門 社務所

寶物 縁起書 猿田彦古面 劔包定 外五點

境内坪數 三千四百六十八坪

氏子區域及戸數 鷺田村 千二百〇四戸

境内神社 牛願神社(大己貴命 少彦名命)

御先神社(天鈿女命 猿田彦命 武内宿禰命)

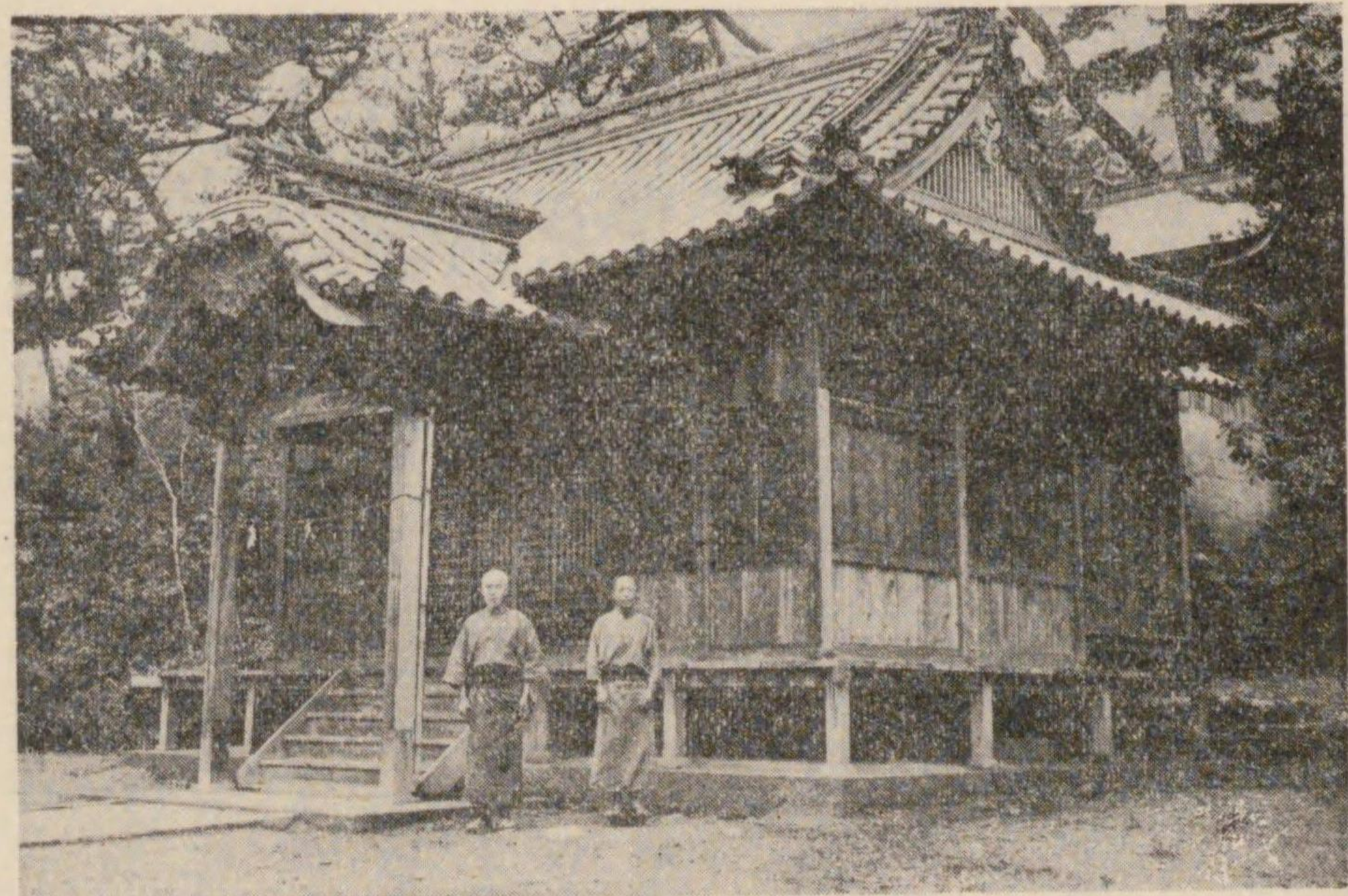
(三四) 山浦神社 鷺田村大字坂田字北山浦

祭神 應神天皇 足仲彦天皇 氣長足姫命

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。大字坂田字橋詰居

住片山氏の祖先の祀りしものにして、初めは同家の鎮守神なりしといふ。寛文年間藩主の命により本社鶴尾神社へ寄宮となりしも其の後再興し、山浦、橋詰、小山部落の崇敬社として現今に至れりといふ。

祭日 九月二十三日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿



山浦神社

境内坪數

千九百四

十七坪

崇敬者人員

約三百五

十人

境内神社

春日神社

(天兒屋

根命)

(三五) 荒神社 鷺田村大字坂田字橋詰

祭神 素盞鳴命

(三八) 荒神社 鷺田村大字坂田字北山浦

祭神 素盞鳴命

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社

祭日 九月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十二坪 崇敬者人員 約百四十人

(三九) 龍神社 鷺田村大字坂田字北山浦

祭神 高竈神

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社

祭日 八月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 約百四十人

(四〇) 東土居神社 鷺田村大字坂田字土居

祭神 火産靈神

合祀祭神 素盞鳴命 高木神 (二に曰 素盞鳴命 高木

神 太郎命)

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。明治四十三年字土居

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社

祭日 十月九日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 約百八十人

(三六) 龍神社 鷺田村大字坂田字南山浦

祭神 高竈神

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社

祭日 六月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 約九十人

(三七) 高皇産靈神社 鷺田村大字坂田字北山浦

祭神 高皇産靈神

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社

祭日 五月十二日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約百四十人

西土居神社・高木神社・太郎神社を合祀す。

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十二坪 崇敬者人員 約二百八十人

(四一) 熊野神社 鷺田村大字坂田字室

祭神 伊邪那岐命 伊邪那美命 天照大御神 須佐之男命
早玉男命 事解男命

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。初め社號を白山明神と奉稱す。享祿年間河野伊豫守彈正少弼、越智通義、豫州より當國に來り萬藏村に居住し、白山明神を迎へて自家の鎮守となすといふ。其の後室部落の崇敬社となり熊野神社と稱へらる。

祭日 十月八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 七十三坪 崇敬者人員 約五百七十人

(四二) 佐枳彌多摩神社 鷺田村大字勅使字中北

祭神 素盞鳴尊 彌都波能賣命 御井神 鳴雷神
由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。境内老樹多く頗る

(四三) 東小山神社 鷺田村大字勅使字山王

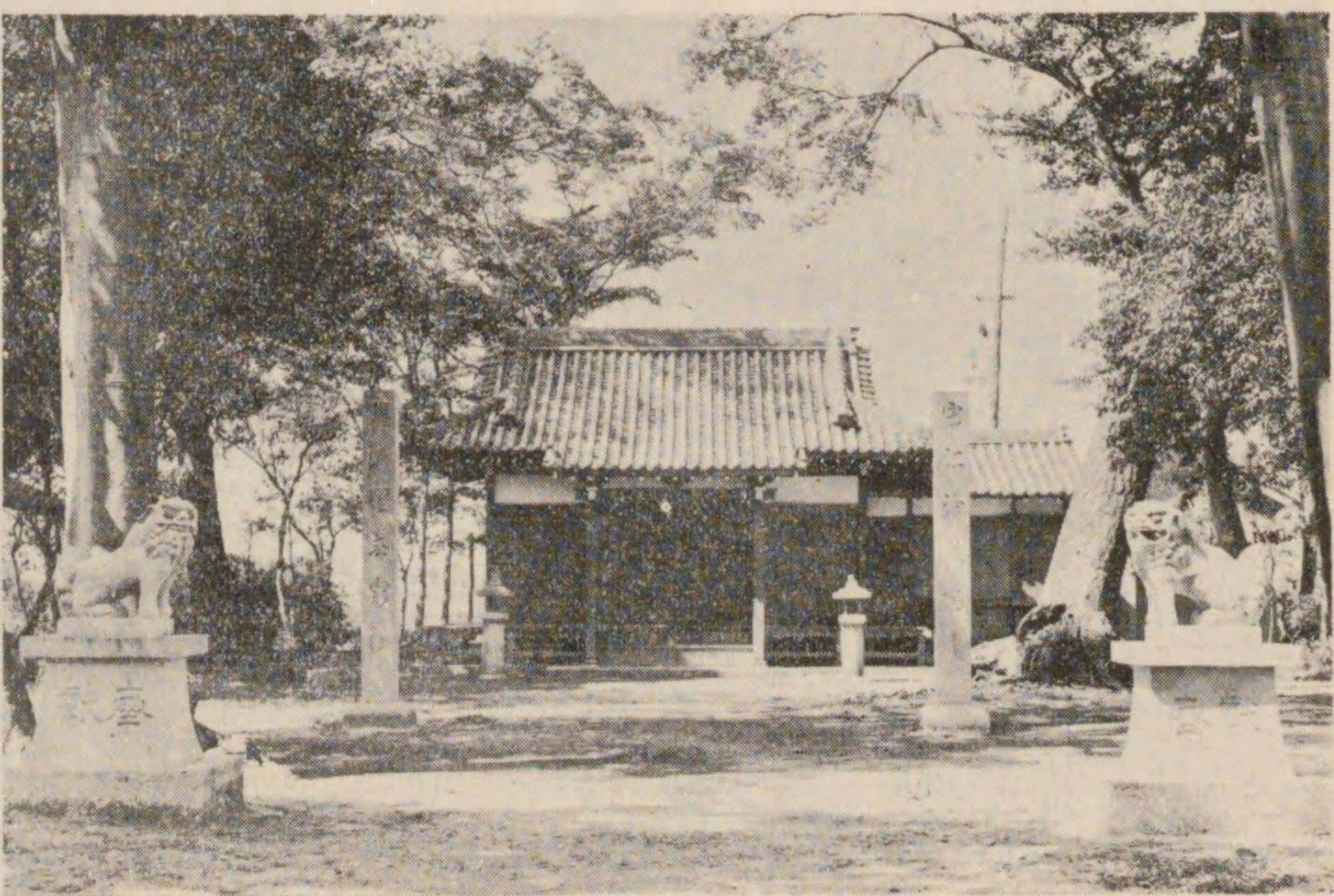
祭神 大山祇神
由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社
祭日 九月二十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百六十四坪 崇敬者人員 約七十人

(四四) 龍神社 鷺田村大字勅使字小山

祭神 高竈神
由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社
祭日 十月五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約七百八十人

(四五) 小山神社 鷺田村大字勅使字小山

祭神 素盞鳴尊
由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社
祭日 九月二十六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百三十二坪 崇敬者人員 約二百五十人



佐枳彌多摩神社

森嚴なり。祭神御井神は元、井元大明神と稱せられ、昔此の附近に泉ありて其の處に奉齋せしを後此の泉を埋めて田地となせしにより當社に合祀せりといふ
祭日 十月四日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 二百七十七坪 崇敬者人員 約四百人

(四六) 廣瀬神社 鷺田村大字馬場字馬場

祭神 若宇加能賣命
由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社
祭日 九月十八日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四坪 崇敬者人員 約百八十人
境内神社 龍田神社(級長津彦命 級長戸邊命)

(四七) 田村神社 鷺田村大字馬場字馬場

祭神 倭迹々日百襲姫命 猿田彦命
由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。舊く一宮大明神と稱せらる。傳ふる所によれば百襲姫命(或は稚屋姫命)當地に御來臨あり、石に腰を掛け憩ひ給ふ。當社はその舊跡なりといふ。全讚史一宮大明神の條に『古老云定水大明神者水主明神之妹王也名倭迹稚屋姫命有罪流于讚岐着岸於香西求居東南行至馬場一踏石而休其石今猶存後人栽松於其側今爲大木而枝葉扶疎立祠於其下曰一宮大明神更南行至今社地』と見ゆ。

祭日 九月八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百〇九坪 崇數者人員 約三百五十人

(四八) 中川神社 鷺田村大字馬場字中川原

祭神 菅原道真公

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。菅公當國に在任の
御當地に別館ありて屢々來遊せられ、又産土神鶴尾八幡宮
を再興し給ふ等當地との縁由淺からず。依て後ち里人祠を
建て之を祀れりといふ。社地は公に事へし秦久利の宅跡と
云ひ、秦氏の裔今猶存す。

祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
寶物 上棟の槌慶安四年 境内坪數 百〇九坪

崇敬者人員 約百五十人

(四九) 淤岐神社 鷺田村大字沖字源太也

祭神 菅原道真公

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。齋藤實房なる人創

祀せりといふ。沖村天満宮之記に「相傳之蘇(元和か)中里
正齋藤庄兵衛實房者家竈壞矣將改之作之有竈中石彫神影
者焉問之修驗者長傳對曰此乃菅神像也遂立小祠而奉
之每歲八月廿五日祀之至其子庄兵衛實時亦如之實時
無嗣而家絶矣自此之後里人祀之如初其祠今尙存焉所謂
沖天神是也實房於余外曾祖也...明和九丙戌重九日 同
郷馬場邑 片山九郎左衛門藤原俊英識」とあり。

祭日 九月二十四日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 七十一坪 崇數者人員 約三百六十人

(五〇) 和魂神社 鷺田村大字万藏字万藏

祭神 素盞鳴命

合祀祭神 天照大御神 八幡大神 大物主命

由緒 鷺田村郷社鶴尾神社境外末社。境内老樹ありて古
社たるを知るに足る。明治四十四年字萬堀池神社を合祀
す。

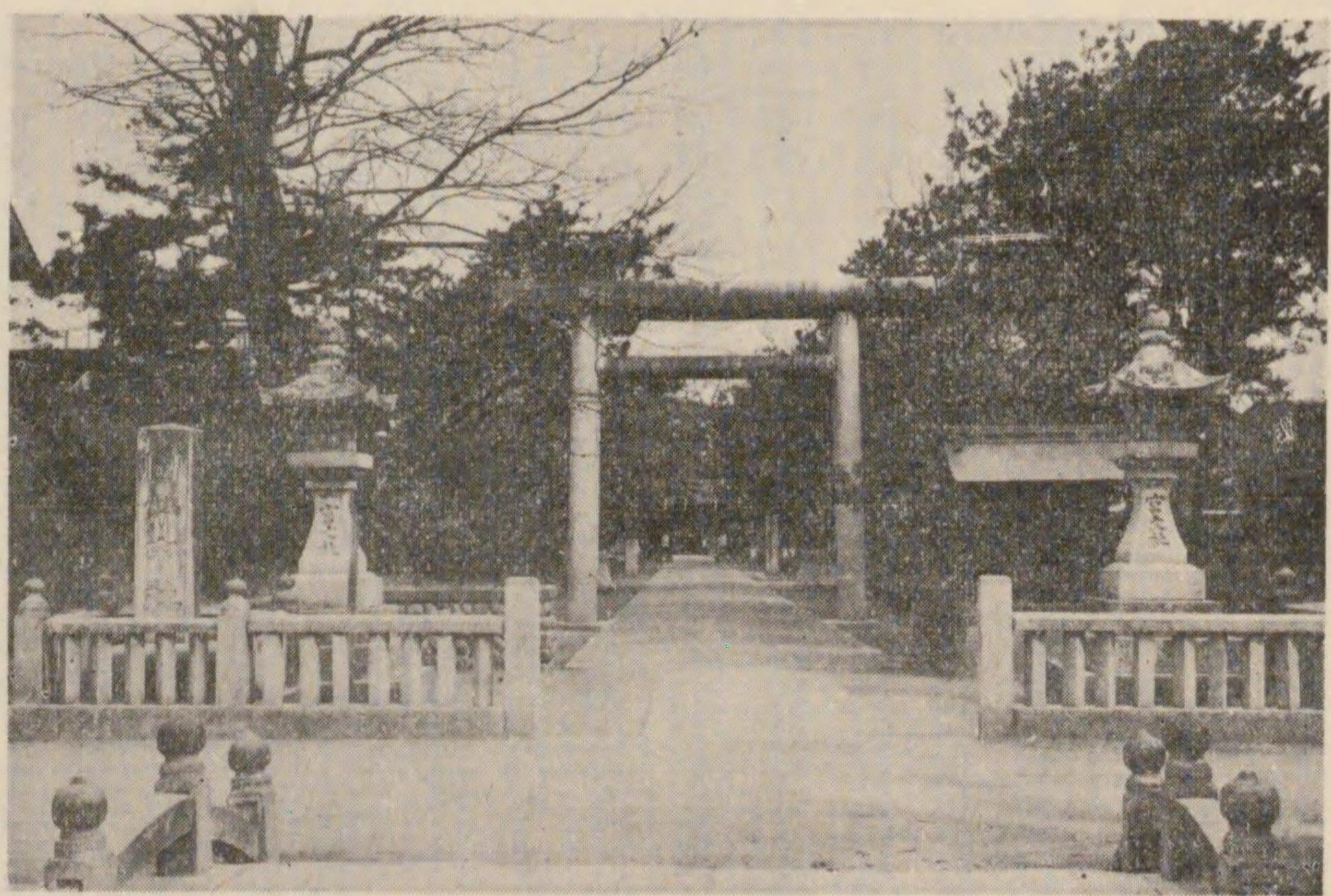
祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百十七坪 崇數者人員 約千〇三十人

五一 宮村

(五一) 國幣 田村神社 一宮村大字一宮字宮東

祭神 倭迹々日百襲姫命 五十狹芹彦命 猿田彦命 天隱
山命 天五田根命

由緒 當社の國史に見えたるは續日本後紀に「嘉祥二年二
月丙戌朔癸丑奉授讚岐國田村神從五位下」とあるを以て
初とす。次で三代實錄に「貞觀三年二月十三日丁巳讚岐國
從五位上田村神列於官社」同七年冬十月九日丁巳讚岐國
從五位上田村神授正五位下 同九年冬十月五日庚午授
讚岐國正五位下田村神從四位下 同十七年五月廿七日戊
申授讚岐國從四位下田村神從四位上 元慶元年四月四日
乙巳授讚岐國正四位下田村神正四位上」とあり。かくて
建仁元年には極位正一位に昇り給へり。延喜式神名帳に
「讚岐國香川郡一座大田村神社名神」とありて、延喜式内名
神大社にして又讚岐國一宮たり。朝野群載に「神祇官謹奏
...坐讚岐國田村神云々」と見え、伯家部類永萬元年の
奥書あり
に「神祇官御年貢進社事南海道讚岐國一宮」とあり。其の



國幣 中村神社

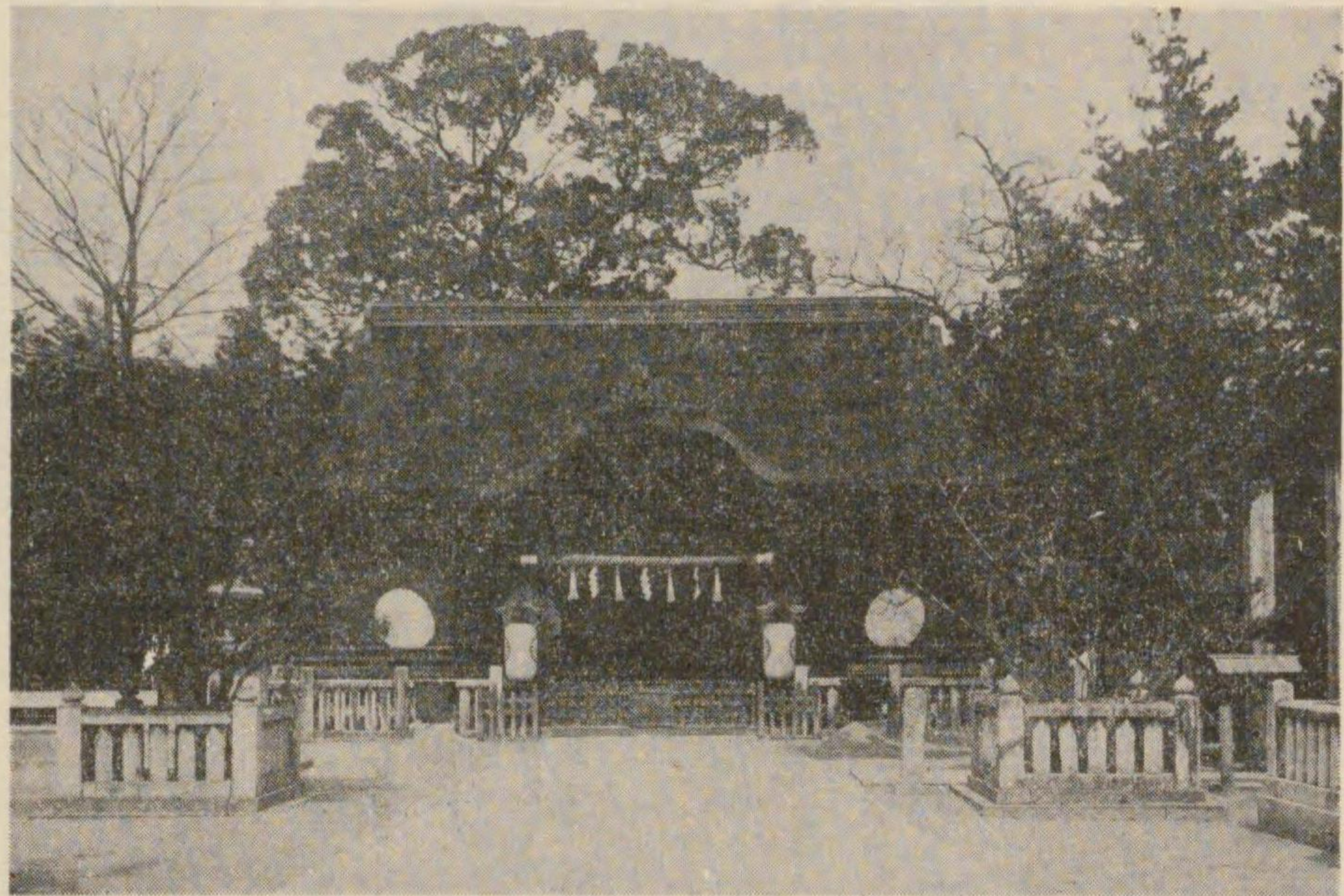
他清瀧宮神名帳、藥師堂神名帳、千手堂神名帳、大日本國
一宮記、諸國一宮神名帳等に田村大社、田村大明神等見
ゆ。當社所
藏の後宇多
天皇の勅額
に正一位田
村大明神と
あり、裏に
弘安七年歲
次甲申七月
日とありて
古くより朝
野の尊崇篤
き神社なり
當社の起源
は詳ならず
れども、舊
事大成經神

社本紀に「狹貫國田村神社高丘宮天皇時天隱山大神與兒天
五田根大神至此國一栖此祠爲治國業今令天五田根

大神以有三分國之功、鎮座於此祠、而歸元仙宮」と見え、大同類聚方幅壹部に「鏡樂讚岐國香川郡田村神社傳方元者猿田彦神劑□□國人讚岐臣網持傘木山に詣神現傳受賜壹治に用神妙也……民多加良保止豆良水煎服之」とあり。讚岐國大日記に「元明帝和銅二年於讚岐國香東郡大野郷始建正一位田村定水一宮大明神之社也典祀傳云此神者孝靈天皇皇女倭迹々日百襲姫也雖神殿之下有深淵今古人無見焉社邊黑色蛇多其長四尺離散邑中俗謂神龍矣」三代物語に「一宮田村定水大明神元明帝和銅二年創之……造神殿於深淵上古今無視其淵者」南海通記に「讚州一宮神社其由來舊矣……此地往古川淵也水神在テ邑里ノ不淨ヲ咎メ其ノ崇リアル事酷シ、故ニ其淵ヲ清淨ニシテ水中ニ筏ヲ浮ヘ其浮橋ニ社ヲ造リ供物ヲ饌テ祭祀ヲ拜奠ス。是其始也ト云リ」と見え、當社々記亦和銅二年（紀元一三六九）の創建と傳ふ。社號は古くより田村と稱へしが、中古定水大明神とも稱へられ、讚岐國一宮と定まるに及び一宮大明神、一宮神社等奉稱せられたり。田村は蓋し地名より起れるものにして、三代物語に「一宮村舊名田村」とあり。一宮村は當社が讚岐一宮たるに依て起れるものなり。上代に於ける武門の崇敬は文献の徴するものなしと雖も當社は夙

に讚岐國一宮なれば、國司領主の尊崇せしこと明かなり。社記によれば細川氏の崇敬厚く、貞治二年三月細川右馬頭頼之社域を擴張して一切經を奉納し（天正年間兵火に燼す）長祿四年細川勝元社殿を造營して千句田、彼岸田、油田、化粧田等七百貫の社領を増して二十六箇條よりなる神官供僧等奉仕の制文を寄せたり。世に之を壁書と稱し今猶傳へて寶物たり。此の壁書の末文に「右守條々之旨不可有緩怠之儀去嘉吉三年安富安藝入道此次第等雖中沙汰猶以加條數者也」とあり。天正十四年八月仙石權兵衛尉秀久社領百石を寄進し、天正十五年十一月國主生駒雅樂頭近規社領五十石を獻じ、生駒一正更に荒地高十二石を加増す。高松藩主松平頼重亦先規により社領を寄進し明暦元年三月社殿を造營せり。延寶七年兩部習合を廢して唯一となし、田村隼人をして大宮司たらしめ社領五十石の内五石五斗を割きて社坊たりし大寶院に附與せり。此の時當社の佛體を法然寺に遷す。來迎堂二十五菩薩是なり。爾來代々社領を寄進して明治維新に至る。現今の奥殿及び本殿は寶永七年藩主松平氏の造營する所なり。明治四年五月十四日國幣中社に列格仰出され、爾來皇室國家事ある毎に勅使を御差遣あらせらる。

當社は本殿の奥に猶社殿ありて之を奥殿と稱し奉り、御神座は此の殿内にあり。其の床下に深淵ありて常に厚板を以て之を蔽ひ、古より神秘を傳へて敢て窺ふ者なし。社殿構造上の一異例とす。又神社の東三町に休石と云ふあり。境内東方に袂井、西側に花泉ありて、社記には共に百襲姫命の御舊蹟と傳ふ。



社神村田社中幣國

（大水主大明神和讚 讚岐國大日記 南海通記 玉藻集

三代物語 生駒記 全讚史 讚岐二十四社考 讚州府志
古名勝圖繪 官社考證 伽藍開基記 榮屋筆記 高松
藩珍事錄 特選神名牒 以呂波字類抄 和爾雅 大日本
神祇志 神祇志料)

例祭日 十月八日

特殊神事 五月八日 十月八日を以て行はる。明治以前は陰

曆四月八日と、例祭日たりし八月八日とに行ひ、之を兩度の大祭として神輿の渡御あり。現今は五月八日の祭典を初夏祭と稱し、御神輿還御の後御神座に御蚊帳を奉る。之を御蚊帳垂神事と云ひ、又十月八日例祭の日神輿還御の後御神座の御蚊帳を撤す。之を御蚊帳揚神事といふ。此の地に於て蚊帳を用うるは此の神事に従ひ、若し御蚊帳垂神事前に蚊帳を釣る時は必ずその一隅をばづし置くを例とす。

市立祭 陰曆三月十五日、貞治二年三月細川頼之の一切經を奉納せしより、毎年三月十五日を以て一切經會行はれ、農工商の者遠近より集りて市を開きたるに起因す。現今の市場と稱する地は即ちその舊跡なり。

主なる建造物 奥殿 本殿 幣殿 拜殿 神饌殿 神庫 繪馬殿 手水舎 神門 社務所 旅所納屋
寶物 古代矛十一點 扁額 後宇多天 壁書 細川勝元奉納 神領寄進

狀十一點 仙石秀久・生駒近規・松 扁額弘法大師筆 具足讚岐
作 松平 具足讚岐明珍作 松平 具足明珍
頼聰寄附 具足松平頼繼寄附 具足頼胤着領のもの 太刀銘
網 太刀銘波平 短刀銘順慶 外三十五點

境内坪數 六千八百五十一坪

氏子區域及戸數 一宮村(大字成合を除く) 大野村大字寺井
六百五十二戸

境内神社 宇都伎社(大地主神 倉稻魂神 一に曰 大己

貴神 倉稻魂神) 創記詳ならざれども社記によれば、上古百
本社に御遷座して更に大己貴神、倉稻魂神を祀りたるものなり
と。依て今も古宮と云ふ。明細帳に大地主神とあるも、社記に
は見えず、明治維新以前は
高松藩主社殿を修造せり。

素婆俱羅社(少彦名神 相塞神 大水上神 大年神 菅相

公) 創記詳ならず。古來疾病の治癒を祈らば必ず靈
驗あるを以て聞え、遠近より参拜する者多し。

嚴島社(市杵島姫命) 創記詳ならざれども古社にして古く

りしを明治四年池の北方に遷座し、更に池の中島
に遷座す。陰曆六月十六日には参拜者頗る多し。

(五二) 天満神社 一宮村大字一宮字作島

祭神 菅原道真公

由緒 國幣中社田村神社境外末社

祭日 八月二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百〇一坪 崇敬者人員 約百十人

(五三) 寒川神社 一宮村大字一宮字新開

祭神 大年神(一に曰 不詳)

由緒 國幣中社田村神社境外末社

祭日 九月十四日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十九坪 崇敬者人員 約十人

(五四) 農護賣神社 一宮村大字一宮字荒

祭神 保食神

由緒 國幣中社田村神社境外末社

祭日 九月三十日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百〇五坪 崇敬者人員 約四百人

(五五) 三名神社 一宮村大字三名字西川

祭神 大年神 御年神 若年神

由緒 國幣中社田村神社境外末社。 安永二年の正遷宮及
び寛政九年の棟札を存す。

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

寶物 棟札二點 境内坪數 三十七坪

崇敬者人員 約三百五十人

(五六) 田寄神社 一宮村大字鹿角字城ノ内

祭神 御年神 若年神 大年神

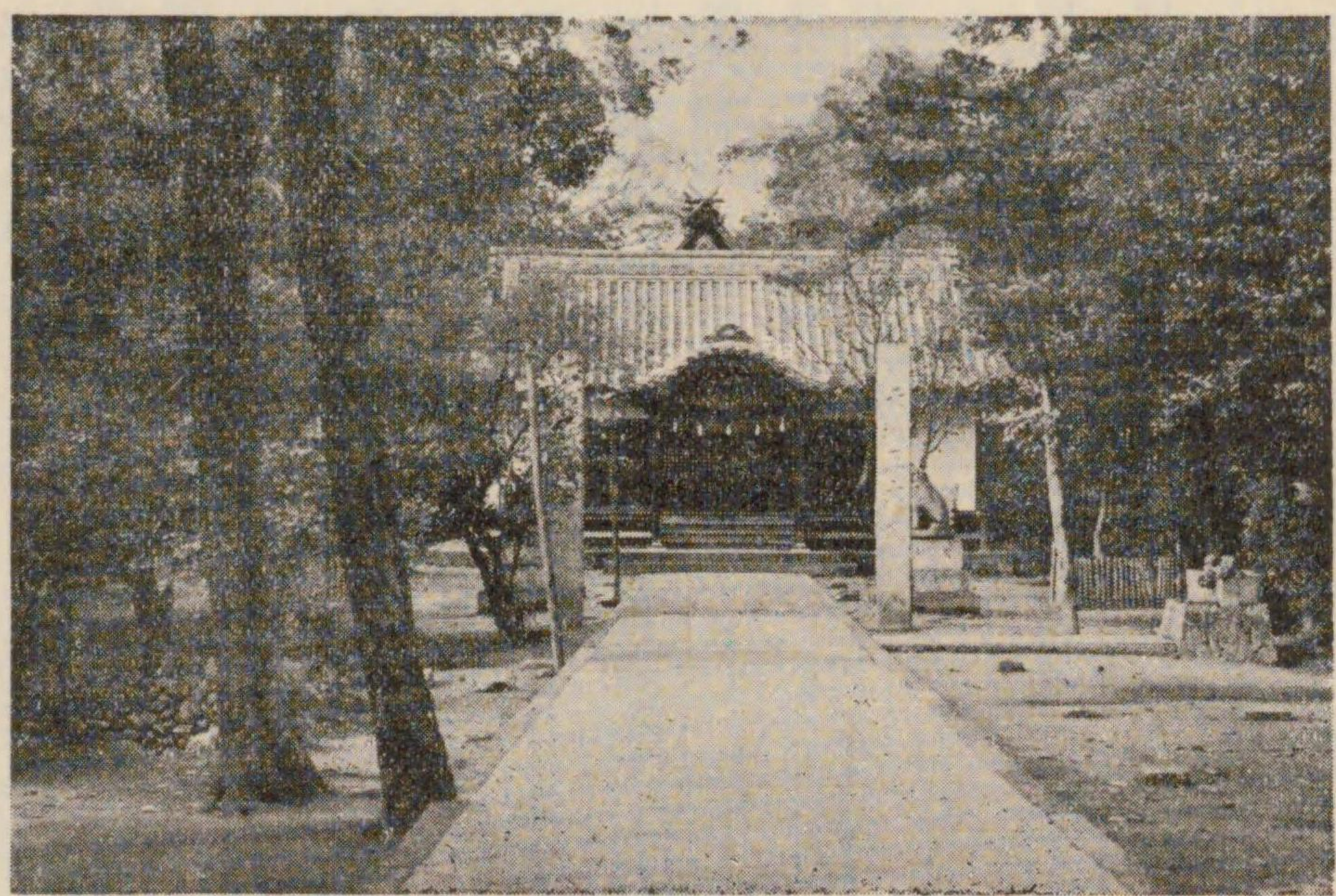
由緒 國幣中社田村神社境外末社

祭日 陰曆九月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百〇七坪 崇敬者人員 約五百五十人

(五七) 社成合神社 一宮村大字成合字上所

祭神 天五田根命 天隱山命 猿田彦命

由緒 當國一の宮田村神社の別宮なる由傳へられ、祠官亦
代々田村を以て氏とす。古名勝圖繪に『一宮大明神成合村
にあり社人田村甚太夫……當村氏宮』とありて往古より
成合村の産土神たり。養老年中飯沼氏の創建と云ひ、或は



村成合神社 例祭日 九月二十八日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
寶物 棟札 慶長十三年 書
卷物 一宮大明神岩
會具 外一
選筆 點

境内坪數 千三百八十七坪
氏子區域及戸數 大字成合 百五十四戸

(五八) 天満神社 一宮村大字成合字上所

祭神 菅原道真公

由緒 一宮村村社成合神社境外攝社。慶長十三年及び元

祿四年再建の棟札あり。(古名勝圖繪)

祭日 十月六日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

寶物 書卷物 扁額 棟札 境内坪數 八百〇七坪

崇敬者人員 約七百七十人

境内神社 地神社(天照皇大神 大己貴命 少彥名命)

壇安姫命 倉稻魂命)

(五九) 八方荒神社 (一宮村大字成合字上所)

祭神 澳津彦命 澳津姫命

由緒 一宮村村社成合神社境外末社

祭日 十月四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八十四坪 崇敬者人員 約百三十人

(六〇) 祈雨神社 一宮村大字成合字上所

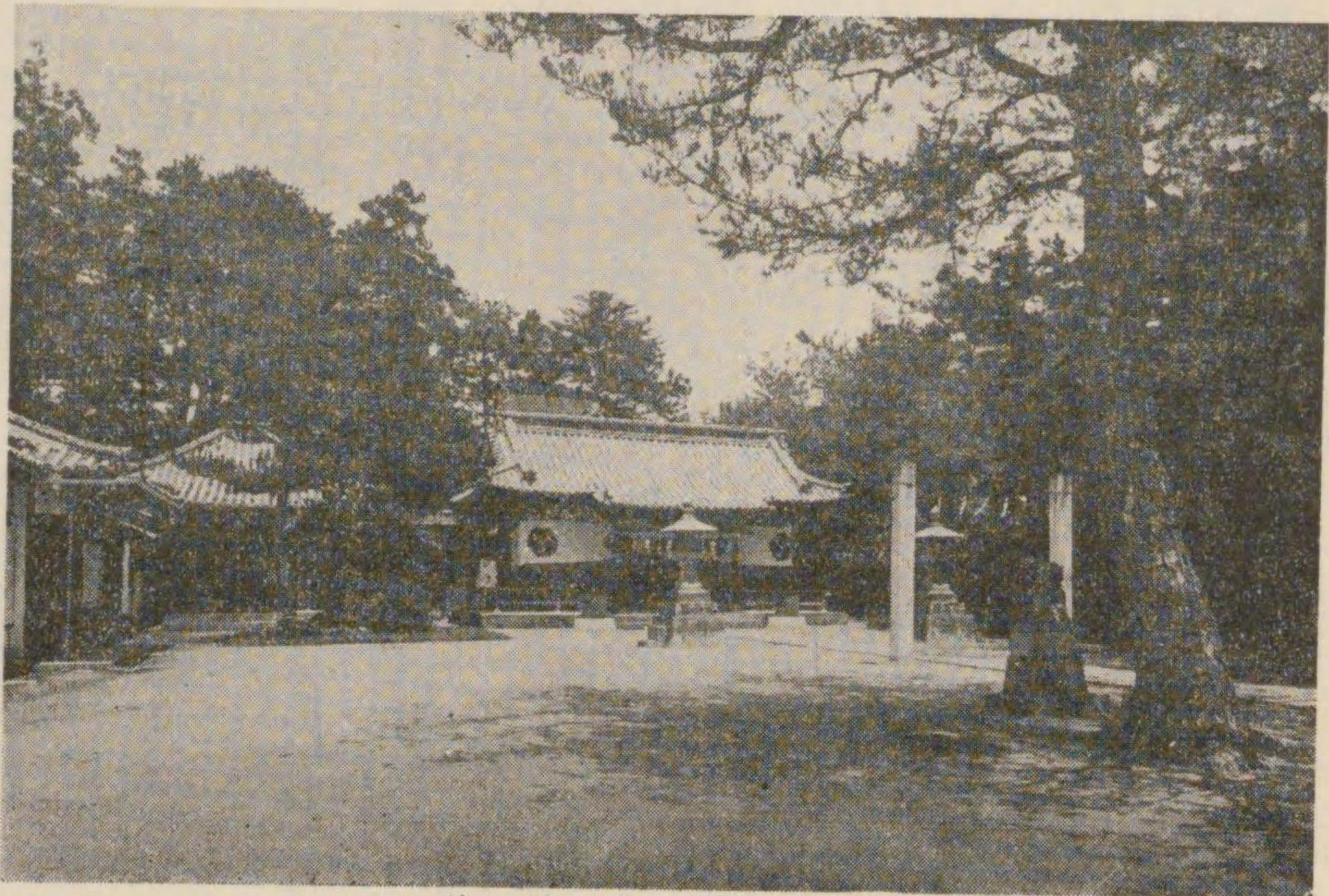
祭神 罔象女神 竈神

八幡と稱せられ多肥一郷の産土神として近郷の崇敬厚く、三代物語に『多肥八幡宮 郷社 別當西蓮寺』と見ゆ。天文

二年沙門長慶、乃生土佐守義照と謀りて社殿を修造す。

長慶は資速の後裔なり現在の社殿は天保年間の改築といひ、社務所は西蓮寺の寺厨にして寶庫は同寺の護摩堂たり。明治九

年隨神門を建造す。明治の初め櫻木神社と改稱、同五年九月郷社に列せられ、昭和十一年九月八日神饌幣帛料供進神



郷社櫻木神社

由緒 一宮村村社成合神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 三十七坪

崇敬者人員 百十七人

(六一) 月讀神社 一宮村大字成合字原又

祭神 天月夜見尊(一に曰 澳津彦命 澳津姫命)

由緒 一宮村村社成合神社境外末社

祭日 陰曆八月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 五十二坪 崇敬者人員 約百七十人

六多肥村

(六二) 郷社櫻木神社 多肥村大字上多肥字宮本

祭神 應神天皇 神功皇后 玉依姫命

由緒 古名勝圖繪によれば、仁和年中別當西蓮寺創立と共に櫻井權督資速の創勅にして櫻井氏が氏神として奉祀せし

なるべしといふ。官社考證追録には櫻井神社とあり。多肥

社に指定せらる。

別當西蓮寺は維新の際廢せられその本地佛三體は太田村光臨寺に移さる。今同寺に於て舊八幡と稱せらる、佛像は即ちこれなりといふ。(玉藻集 古名勝圖繪 香川縣史)

例祭日 十月三日

主なる建造物 本殿 廊殿 幣殿 拜殿 隨神門 寶庫 社務所

境内坪數 千四百二十九坪

氏子區域及戸數 大字上多肥 大字下多肥 三百四十戸

境内神社 照和神社(祭神未詳) 昭和十一年四月字宮尻日向

三寶神社を合祀して社號を照和神社と稱し、境内に移轉す。合祀神社日向神社は昔屋島合戦の際平氏の落人を祀れりとの口碑あり。

(六三) 天満神社 多肥村大字上多肥字前邸

祭神 菅原道真公

由緒 多肥村郷社櫻木神社境外末社。佐藤家系圖によれば、天正の始頃山田郡三谷村王佐山城主三谷兵庫頭景久の

臣に佐藤光豊なる者あり、景久長曾我部元親と戦ひて利あらず一族離散す。光豊亦當村に遁れ來る、其の嫡子佐藤庄

次良光、寛文九年二月二十五日當社を創祀すといへり。

祭日 陰曆八月二十五日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪數 三百〇一坪
崇敬者人員 約二百人

(六四) 船頭神社 多肥村大字上多肥字松ノ内

祭神 寒神

由緒 多肥村郷社櫻木神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 六坪
崇敬者人員 約百人

(六五) 中所神社 多肥村大字上多肥字松ノ内

祭神 御年神

由緒 多肥村郷社櫻木神社境外末社
祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約二百人

(六八) 豊稔神社 多肥村大字下多肥字本村

祭神 保食大神 大年神 御年神 若年神 級津二柱神
雷龍二柱神水 分二柱神 水波賣神

由緒 多肥村郷社櫻木神社境外末社。明治以前は毘沙門
天像を御靈代として祀りたりしが、神佛分離の際此の像を
同所の毘沙門庵(現在の説教場)に遷し、新なる御靈代を
鎮祀して社號を豊稔神社と改稱せり。

祭日 陰曆九月二日 主なる建造物 本殿
境内坪數 二百二十一坪 崇敬者人員 約五百十人

(六九) 村熊野神社 多肥村大字出作字前原

祭神 伊弉册命 事解男命 速玉男命

由緒 往古紀伊國熊野權現の分靈を迎へ出作村の鎮護神と
して崇敬すといふ。古くは出作權現と稱せられしが、明治
初年現社號に改め村社に列せらる。明治四十四年神樂殿及
び離宮を新築す。(玉藻集 古名勝圖繪)

例祭日 十月二十一日

(六六) 雙石神社 多肥村大字上多肥字小田

祭神 八衢比古神 八衢毘賣神

由緒 多肥村郷社櫻木神社境外末社。住蓮寺池の堤防に
鎮座し、一對の大なる石を御靈代として奉齋すといふ。口
碑に依れば往昔住蓮寺池構築の際同形同大の一對の靈石出
でたるに里人神意を感じこれを御靈代として祀れるものに
して、今に此の附近の免場を妙同石(夫婦石の意)と稱す
るは此の雙石に由来するものなりと傳ふ。

祭日 陰曆八月十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 四十九坪 崇敬者人員 約六十人

(六七) 野郷神社 多肥村大字上多肥字野郷

祭神 不詳

由緒 多肥村郷社櫻木神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 二十三坪
崇敬者人員 約六十人

主なる建造物 本殿 廊殿 幣殿 拜殿 神樂殿
境内坪數 九百八十七坪

氏子區域及
戸數 多肥
村大字出
作 佛生

山町大字
出作 百
二十戸

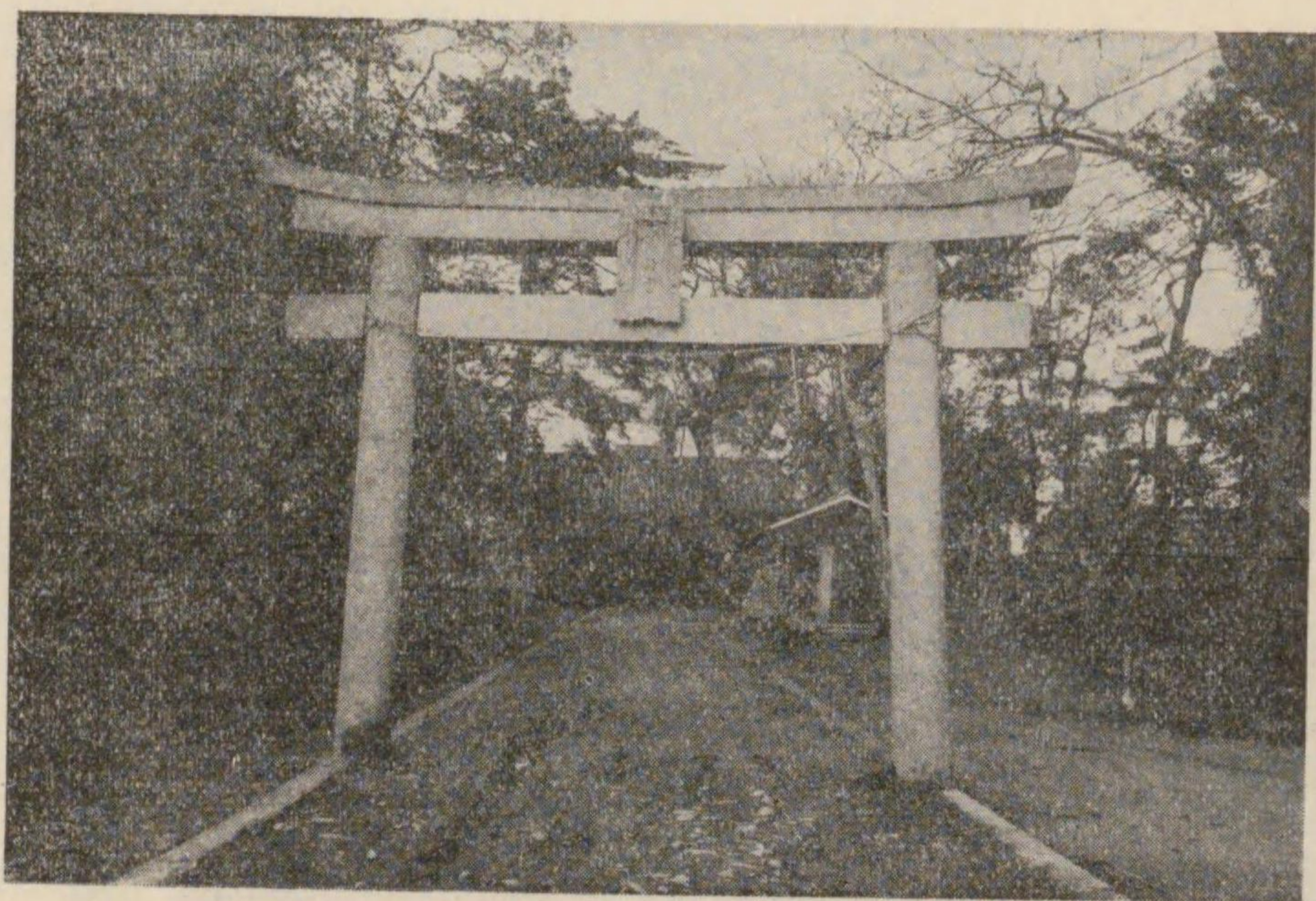
境内神社

東原神社

(祭神
不詳)

大正七
年宇東
原より
境内に
移轉す

愛敬神社(天宇豆彦命
合大物主命)
祀大正八年宇東原より
遷座して境内神社と
なり、同時に宇東原金
刀比羅神社を合祀す。



村熊野神社

(七〇) 赤塔神社 多肥村大字出作字西久保

祭神 不詳

由緒 多肥村村社熊野神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 八十三坪

崇敬者人員 約三十人

(七一) 小櫻神社 多肥村大字出作字東原

祭神 廣瀬大神 龍田大神

由緒 多肥村村社熊野神社境外末社

祭日 陰曆八月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二百七十四坪 崇敬者人員 約百十人

(七二) 御年神社 多肥村大字出作字松ノ上

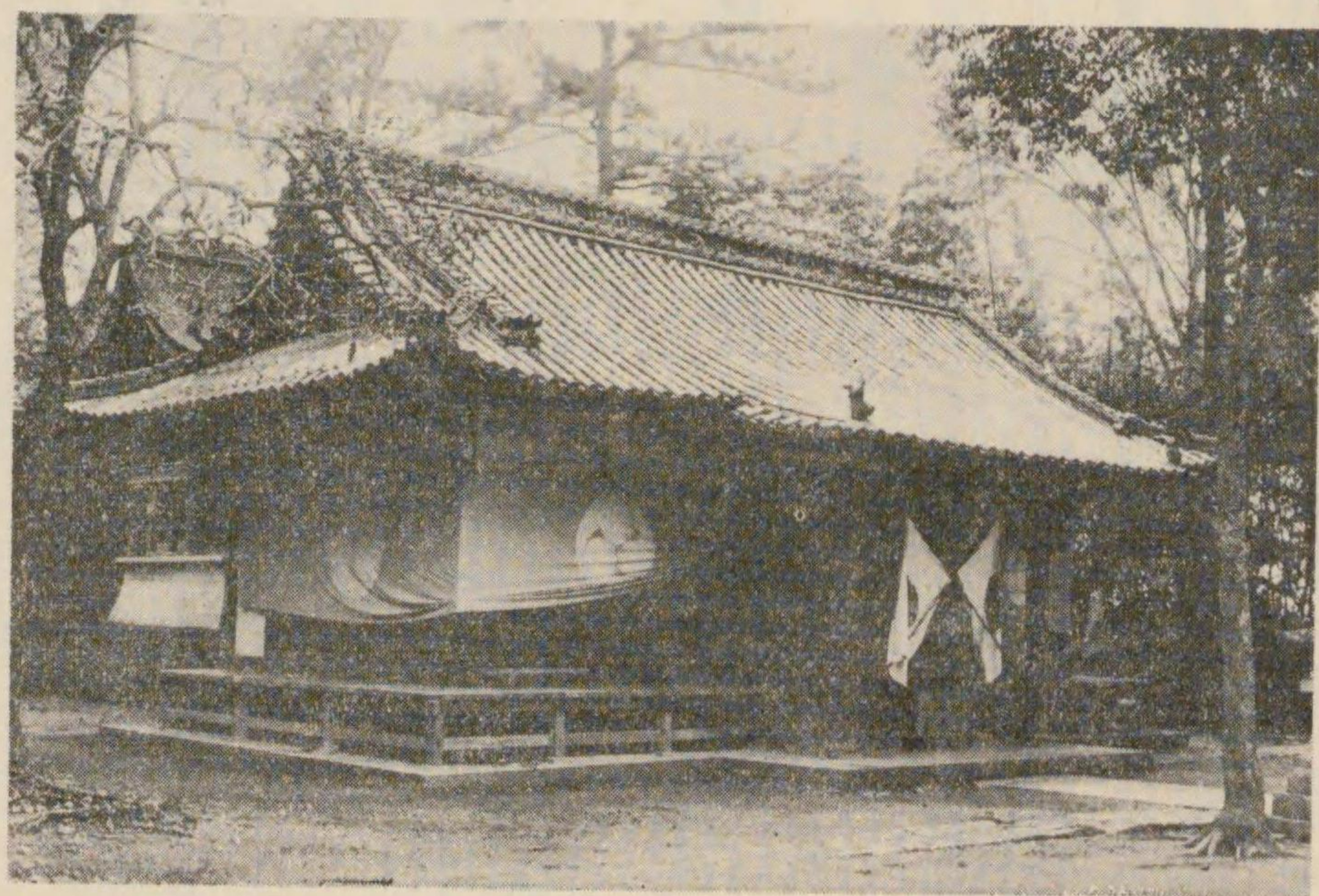
祭神 御年神

由緒 多肥村村社熊野神社境外末社

祭日 春秋社日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十四坪 崇敬者人員 約二百人

宮・淺野・寺井の各村之に屬し、香川郡の中樞地たりしことは實にこの郷の産土神にして、當社古棟札等に大野郷八幡宮とありて、細川詮春當邑南の城の女を嬖し、その姪を祈りて男子を産む。この報賽の爲に寒川郡鴨部邑に於て社領を寄進し、世々細川氏の崇敬厚く、細川頼之伊豫の河野氏



村社石清水八幡神社

七大野村

(七三) 村社石清水八幡神社 大野村大字大野字宮中



村社石清水八幡神社

祭神

應神天皇

由緒 大

野一郷の

社として

古くより

崇敬せら

る。大野

郷は倭名

鈔に大野

(於保乃)

とありて

大野・鹿

ノ角・三

名・一ノ

を討つに際し當社に詣で戰勝を祈り、神囿の竹を伐りて旌旗の竿となし、頼之自ら理白竹と名付けたり。戰勝ちて歸るや直に報賽し、岡隼人正をして社殿を造營せしめたりと。天正十三年長曾我部元親が南の城松倉氏を攻むるに方り、當社々殿兵火に罹り、(其の時燼餘となれる隨神像二軀今猶存す。)慶長十九年大野孫太夫再興すと云へり。大野氏は中御門中納言家成の裔綾章隆の孫大野新太夫有高の子孫にして讃岐綾氏の一黨なり。全讚史に『大野正八幡宮在三大野村一村之社也其所由來遠矣』とあり。

明治三十九年十二月社殿改築。明治四十五年四月神饗幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 全讚史 古名勝圖繪 讚州府志)

例祭日 十月一日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 拜殿 隨身門 神庫

境内坪數 千百九十三坪

氏子區域及戸數 大字大野 三百戸

境内神社 稻荷神社(倉稻魂神) 伊弉諾尊 伊弉册尊

金山彦神(一に曰埴山彦神)

阿波島神社(少彦名命 一に曰 猿田彦命) 明治二年の創祀。

(七四) 天降神社 大野村大字大野字龜井

祭神 瓊々杵尊(一に曰 天隱山命)

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社。 當社境内は往古田村神社の御旅所にして、當社は田村神社と深き關係ありたるものゝ如し。

祭日 十月十日

主なる建造物 本殿 上幣殿 下幣殿 拜殿 神門

境内坪數 百三十九坪 崇敬者人員 約二百人

(七五) 城神社 大野村大字大野字城

祭神 天照大神

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社。 一に鎮守社ともいふ。 大野鑑によれば、往昔石清水八幡神社を廻りて、極樂寺、眞樂寺、仲樂寺の三寺ありしが、天正十三年長曾我部氏の兵火に罹りて皆灰燼せり。 當社は眞樂寺の鎮守神たりしものにして、今は此の古祠のみ残るといふ。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六坪 崇敬者人員 約十五人

(七六) 春日神社 大野村大字大野字春日野

祭神 天兒屋根命

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社。 大野鑑によれば、當社は往古の仲樂寺の鎮守にして、仲樂寺は天正年間長曾我部氏の兵燹に罹りて廢寺となり、此の社のみ残りといふ。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十四坪 崇敬者人員 約百六十人

(七七) 天満神社 大野村大字大野字西ノ村

祭神 菅原道真公

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社。 大野鑑によれば、當社は昔時極樂寺の鎮守神たりしが、極樂寺は天正年間兵火に罹り後遂に他の地に移轉し、この社のみ残るといふ。

祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十坪 崇敬者人員 約二百三十人

(七八) 河上神社 大野村大字大野字日井

祭神 瀬織津姫命

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社。 大野鑑によれば、天文年間川東村と大野村との間に水論を生じ、遂に鬭争となりて死者一人を出せり、後兩村共に社を建て、此の犠牲者を祀り、川東村にては井の神と稱し、大野村にては川の神と稱すといふ俗傳あり。

祭日 十一月二十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 六坪

(七九) 靄神社 大野村大字大野字春日野

祭神 豊玉姫命(一に曰 暗靄神 高靄神)

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社。 大野鑑には『有元の龍王神は、昔弘法大師京都神泉苑にて雨を祈り給ひし時、八大龍王の像を作り給ひけり。是即ち其の龍王の別れなりとぞ。是によりて靈驗殊に著しく』云々とあり。

祭日 七月二十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十九坪 崇敬者人員 約七百五十人

(八〇) 中津神社 大野村大字大野字中津

祭神 天照大神(一に曰 日本武尊)

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 十月八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十坪 崇敬者人員 約四十人

(八一) 王子神社 大野村大字大野字王子

祭神 須佐之男命

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 十月三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 九坪 崇敬者人員 約百七十人

(八二) 荒神社 大野村大字大野字中ノ坪

祭神 須佐之男尊

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社。 大野鑑に、中ノ坪城主は河南肥前守とも、山田藏人正時とも傳へらるとありて、當社はその城趾に遺れる神社なれば、此の城又

は城主に深き關係を有せるものゝ如し。

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十坪 崇敬者人員 約百三十人

(八三) 三王神社 大野村大字大野字三軒家

祭神 天照大神

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 十月五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十坪 崇敬者人員 約六十人

(八四) 臼井神社 大野村大字大野字臼井

祭神 須佐之男命

由緒 大野村村社石清水八幡神社境外末社

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十七坪 崇敬者人員 約百七十人

(八五) 瑞穂神社 大野村大字寺井字坊ノ内

祭神 若宇迦乃賣命

由緒 初め當村字横岡に鎮座ありて一郷の大社なりき。細川頼之當社を以て岡館の鎮護とす。天正年間長曾我部氏の兵火に



郷社八幡神社

罹り、社殿寶物等悉く焼失の厄に遭ふ。寛文年間再興せられ、天和年中再建あり寛政年間までは祭禮なほ嚴重に行はれ來りしが其の後衰微して僅かに横岡の氏子のみの奉齋する所となり、當時字宮裡の地に鎮座せる八王子神社を以て淺野村の氏神とな

由緒 國幣中社田村神社境外末社

祭日 陰曆九月二十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 四十坪 崇敬者人員 約二百七十人

(八六) 大所神社 大野村大字寺井字西大所

祭神 大地主神

由緒 國幣中社田村神社境外末社

祭日 十月七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二百〇九坪 崇敬者人員 約百十人

八 淺野村

(八七) 郷八幡神社 淺野村字宮裡

祭神 應神天皇

合殿 攝社八王子神社 (祭神 熊野久須毘命 正哉吾勝々速日天忍穗耳尊 市杵島毘賣命)

し以て明治に至れり。

明治四年八月神社取調べに際し當社を以て郷社と定められしが、社殿狹隘の故を以て横岡より字宮裡八王子神社に遷座合祀して淺野村の産土神とし、八王子神社を以て攝社とせり。今も祭典には神輿二體を出す。(玉藻集 香川縣史) 攝社八王子神社は天正八年二月十日の創立と云ひ、或は天正年間火災に罹り再建せりと云ふ。全讃史には寛永末年三野氏の創祀と云へり。寛永二十年、元祿十三年社殿再建ありて、元祿以降里人の崇敬厚く淺野村の産土神となりしが、明治四年郷社八幡神社を當社殿に遷座しその攝社となる。(全讃史 今名勝圖繪)

明治三十二年八月暴風の爲め本殿倒壊せしを以て假殿に遷御、大正三年舊社殿の北方高地に新殿を造營、同七年渡殿を新築し、同十二年拜殿を改築す。

例祭日 十月二十三日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 渡殿

境内坪數 三千五百九十四坪

氏子區域及戸數 淺野村(舟岡、岡ノ上、池ノ側、下久保、實相寺を除く) 三百五十一戸

境内神社 屋船神社(久久能智命 一に曰 久々能智命

草野比賣命)

菅原神社(菅原道真公) 豊受神社(豊宇氣毘賣神)
琴平神社(大物主神) 素波俱羅神社(少彦名命)

(八八) 岡前神社 浅野村字上浅野

祭神 應神天皇

由緒 浅野村郷社八幡神社境外末社。 萬治年間の創祀といふ。

祭日 陰曆八月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十一坪 崇敬者人員 三十二人

(八九) 池宮神社 浅野村字横岡

祭神 水波能賣命

由緒 浅野村郷社八幡神社境外末社。 文祿年間の創祀といふ。

祭日 九月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十坪 崇敬者人員 二十人

(九〇) 金刀比羅神社 浅野村字山田

祭神 大物主神

由緒 浅野村郷社八幡神社境外末社。 文政七年(紀元二四八四)創祀。

祭日 十月一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約三百人

(九一) 赤坂神社 浅野村字赤坂

祭神 宇賀能御魂神

由緒 浅野村郷社八幡神社境外末社

祭日 陰曆九月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十五坪 崇敬者人員 約二百五十人

(九二) 新池神社 浅野村字高塚

祭神 水波能賣神

由緒 浅野村郷社八幡神社境外末社。 文政七年(紀元二四八四)の創祀。是より前寛永四年生駒讃岐守の臣郡奉行

境内坪數 三十七坪 崇敬者人員 七十八人

(九四) 麓神社 浅野村字實相寺

祭神 龍田大神

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。 正徳元年(紀元二三七二)の創祀なりとも云ひ、又寶曆年間なりとも云ふ。 實相寺山の麓に鎮座あるを以て麓神社と稱す。

祭日 九月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七十八坪 崇敬者人員 百六十人

(九五) 栗島神社 浅野村字西舟岡

祭神 少彦名命

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。 傳ふる所に依れば、初め當村字池ノ側に鎮座ありしを、文久二年今の地に奉遷すといふ。

祭日 八月十八日 主なる建造物 本殿

境内坪數 十坪 崇敬者人員 二百三十人

(九三) 岡上神社 浅野村字東舟岡

祭神 龍田大神

由緒 佛生山町村社藤神社境外末社。 當社地は現佛生山町鎮座村社藤神社の古址にして、俗に古宮と稱せらる。往昔藤宮は當村平池中島に鎮座ありしが、治承年間故ありて當地に遷座、後更に東の山佛生山に奉移するに及び、其の遺跡に奉祀せしもの即ち當社なり。(香川縣史)

祭日 八月二十日 主なる建造物 本殿

九川東村

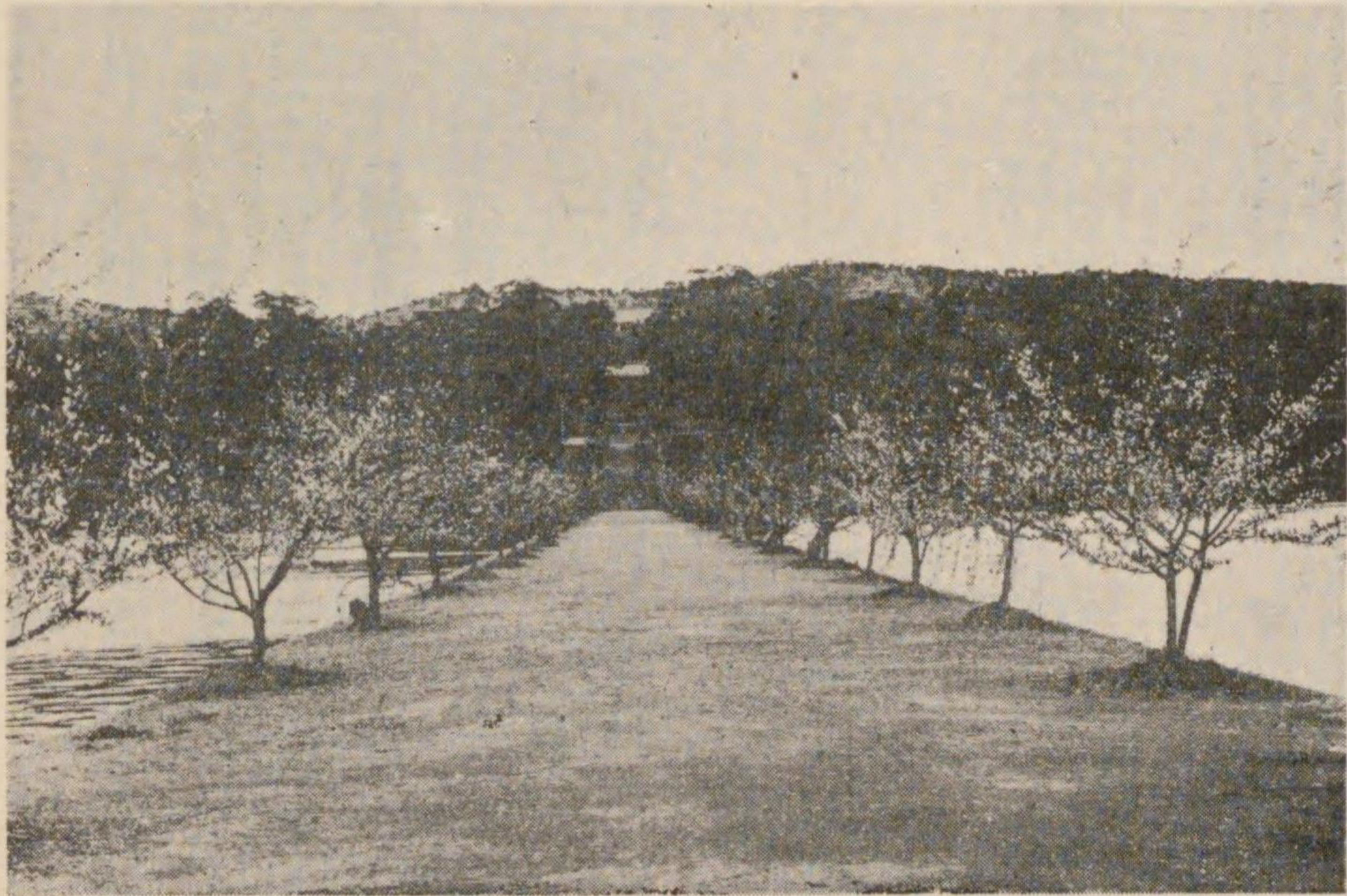
(九六) 郷八幡神社 川東村大字川東下字清谷

祭神

應神天皇
仲哀天皇
神功皇后

由緒

社正八幡
宮、川東
神社等と
奉稱せら
れたり。
古老の傳
ふる所は
當社往昔
淺野村横
岡の地に



郷八幡神社

鎮座ありて、仁和中國守菅原道眞の男山八幡宮より勸請せる所なり。康安元年（或は二年）細川頼之川東村油山の地に遷座し、天正年中兵火に罹り焼失せしを、慶長二年川東上下兩村の氏子之を再營し、現今の地に遷座せりと云へり。當社細川頼之が居城岡館に近きを以て、頼之居城の鎮守とし、石清尾、冠纓の兩社と當社とを以て三社正八幡宮と稱せしなりと。三代物語に「八幡宮河東下村里中鎮守」とあり。又全讃史には「三社正八幡宮在川東村一村之社也、古老曰此祠舊在淺野横岡寛永時淺野村以八王寺爲社因以移川東清谷八百城主其祭」と載せたり。安永四年社殿改築の工を起し、同六年閏十月二十四日正遷座を奉仕す。大正二年一月炎上、同四年再建成りて十月二十九日京都男山八幡宮より更に御靈代を迎へて新殿に奉遷せり。大正十年二月十九日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

例祭日 十月四日五日

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

寶物 鏡、劍、鈴等四點

境内坪數 六千〇一坪五合一勺

氏子區域及戸數 川東村（川内原を除く）五百〇五戸

境内神社 金刀比羅神社（大物主神）

地神社（天照大神 大己貴神 少彦名神 埴安姫神 保

食神）

五社神社（菅原道眞公 岡象女神 級長津彦神 級長津姫

命 市杵島姫命）

四方神社（匂々迺智命 柯遇突智命 金山彦命 岡象女命）

(九七) 天満神社 川東村大字川東下字山脇

祭神 菅原道眞公

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 三百十二坪

(九八) 祈雨神社 川東村大字川東下字山脇

祭神 豊玉姫命

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社。傳ふ所によれば、細川頼之岡館に居り、その四隅に神社を建て、館の鎮護とせり。四方權現と稱せらる。當社はその一にして岡館の良位に當ると云ふ。

主なる建造物 本殿

境内坪數 七十八坪 崇敬者人員 九十人

(九九) 住吉神社 川東村大字川東下字鴨島

祭神 表筒男神 中筒男神 底筒男神

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社。永正元年（紀元二

一六四）三月の創祀と云ふ。一説に延文年間攝津の人森次

郎左衛門が細川頼之に従ひ來りて此の地に住し、攝津住吉

の神を迎へて祀れるなりと云ふ。（全讃史 玉藻集 三代

物語）

主なる建造物 本殿 境内坪數 百五十三坪

崇敬者人員 二十五人

境内神社 荒神社（速須佐之男尊）

(100) 山神 社 川東村大字川東下字山脇

祭神 大山津見神

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 一坪

崇敬者人員 十三人

(101) 大倉神社 川東村大字川東下字山脇

祭神 保食神

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 四坪

崇敬者人員 十三人

境内神社 荒神社(速須佐之男尊)

(1011) 荒神社 川東村大字川東下字利兼

祭神 速須佐之男尊

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 二坪

境内神社 松尾神社(天兒屋根命)

(10111) 荒神社 川東村大字川東下字中村

祭神 須佐之男命

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 四坪

(101111) 荒神社 川東村大字川東下字中村

祭神 須佐之男尊

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 十五坪

(1011111) 金刀比羅神社 川東村大字川東上字川上

祭神 大國主神

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 三十五坪

崇敬者人員 十一人

(10111111) 馬神社 川東村大字川東上字川上

祭神 保食神

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 六坪

崇敬者人員 二十三人

(101111111) 丸山神社 川東村大字川東上字丸山

祭神 大國主命

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 八十七坪

崇敬者人員 八十四人

(1011111111) 山神社 川東村大字川東上字下芦脇

祭神 大山祇命

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社。創祀詳ならざるも

細川頼之の創祀にして、其の館の鎮守なりしと傳へられ、所謂四方権現の一にして當社は岡館の巽位に當れりと。

(香川縣史)

主なる建造物 本殿 境内坪數 四十坪

崇敬者人員 四十三人

(10111111111) 川上神社 川東村大字川東上字高見

祭神 軻遇突智命

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社。大野鑑によれば、

天文年間川東村と大野村との間に水論を生じ、双方遂に闘

争して死者一人を出すに至る。依て兩村ともに祠を立て、

此の犠牲者を祀り、川東村にては井ノ神と稱し、大野村に

ては川ノ神と稱す、といふ俗傳あり。當社はその川東村に

祀られしものに當るといふ。

主なる建造物 本殿 境内坪數 四十坪

崇敬者人員 約百五十人

(101111111111) 漆原荒神社 川東村大字川東上字漆原

祭神 速須佐之男尊

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社。三代物語川東村の

條に『漆原荒神』と見ゆ。

主なる建造物 本殿 境内坪數 十五坪

崇敬者人員 六人

(1011111111111) 中條荒神社 川東村大字川東上字廣田

祭神 軻遇突智命

由緒 川東村郷社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 二十九坪
崇敬者人員 二十一人

(二三) 天満神社 川東村大字川東上字馬ノ脊

祭神 菅原道真公
由緒 川東村郷社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 三十四坪
崇敬者人員 十七人

(二三) 天尾神社 川東村大字川内原字鬼ヶ城

祭神 天太玉命
合祀祭神 大山祇命 豊玉彦命 澳津彦命 澳津姫命 素盞鳴命 大己貴命 倉稻魂命 天照大神 埴安姫命 少彦名命 大山咋命 (一)に曰 大山祇命 倉稻魂命 天照皇大御神 埴安姫命 水分命 罔象女命
由緒 天正八年(紀元二二四〇)岡徳右衛門なる者の創祀にして天野大権現と稱せられしが、明治四年天尾神社と改稱

由緒 川東村社天尾神社境外末社。嘉永元年一月十日

の創祀。

祭日 十月十一日 主なる建造物 本殿 上拜殿 下拜殿
境内坪數 九坪 崇敬者人員 約百四十人

一〇 安原村

(二五) 郷社 西谷八幡神社 安原村大字安原下字西谷

祭神 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后
合祀祭神 闇竈神 大山祇命 大己貴神 猿田彦命 天兒屋根命 素盞鳴命 天照皇大神 高竈神 天御中主神 手力雄命 日本武尊 大國主命 少彦名命 埴安姫命 倉稻魂命 奥津彦命 奥津姫命 大地主命 軻遇突馳命 (一)に曰 相殿神三十九柱)

由緒 文曆二年(紀元一八九五)西谷次郎保行の創建と云ふ。保行は藤原鎌足十八代の裔といひ、當地の豪家上原氏の祖なり。上原氏家譜によれば、鎌足十五代の裔從四位下美濃守保成、崇徳天皇に従ひて讃岐に來る。其の孫保春加

し村社に列せらる。川内原は舊安原郷に屬し、東谷村平尾神社の氏子たりしが距離遠隔の爲め明治以降當社を以て産土神となす。大正九年幣殿、拜殿を改築し、同年十月七日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 讃州府志)
大正二年^{字廣}武用地神社、^{字中}廣田神社を合祀。大正三年^{字中}東尾神社、^{字西}徳善神社、^{字東}笠山笠山神社を合祀。大正四年^{字雲}雲宮神社、^{字南}川添神社を合祀。大正七年^{字東}尾荒神社を合祀す。

例祭日 十月十日

特殊神事 牛馬祭 五月十日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿

境内坪數 五百六十九坪

氏子區域及戸數 大字川内原 百八十戸

境内神社 楠神社(楠木正成公)

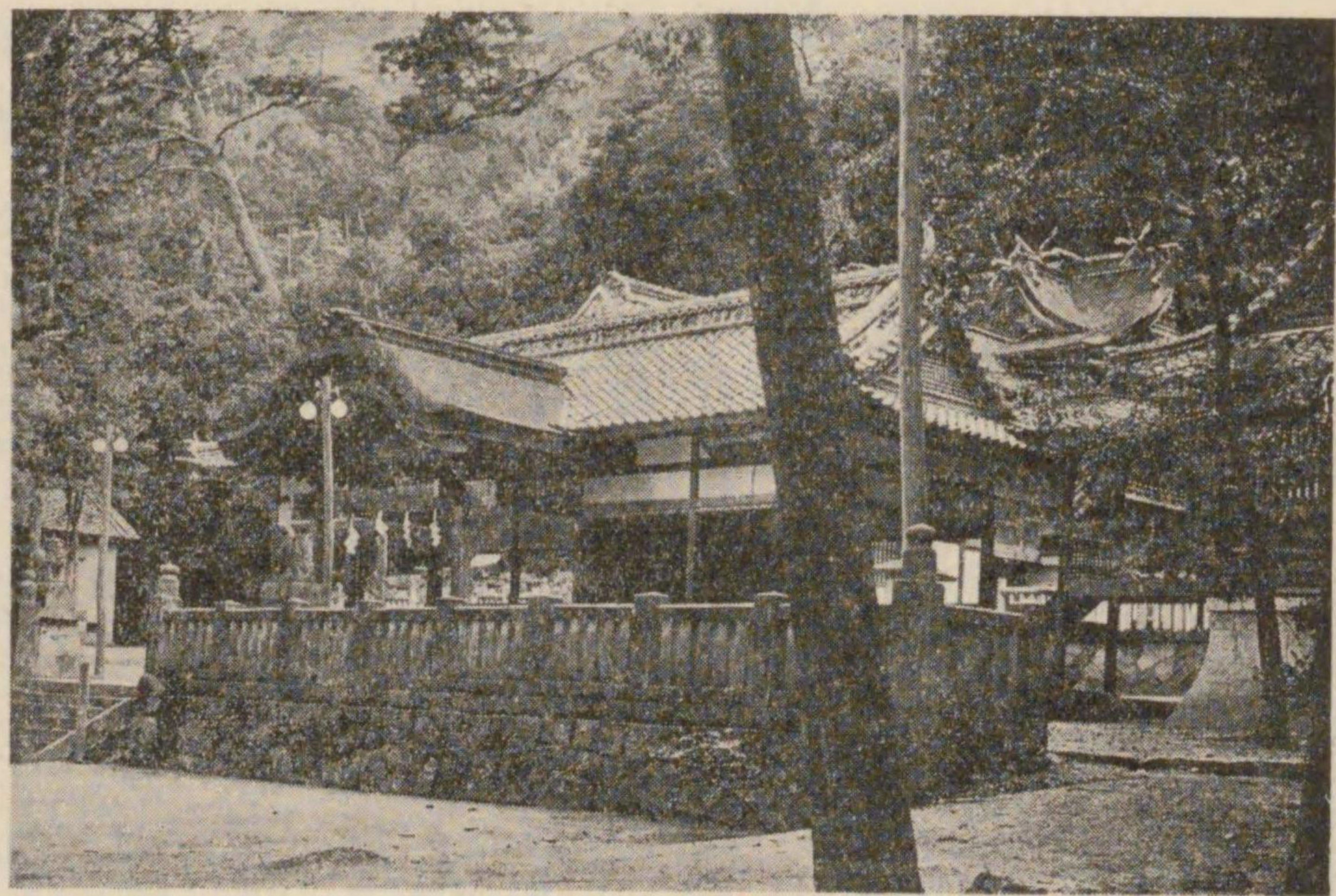
天満神社(菅原道真公 一に曰 菅原道真公 罔象女命)

金刀比羅神社(大物主命 一に曰 大物主命 手力男命)

(二四) 大西神社 川東村大字川内原字西砂古

祭神 素盞鳴尊(一に曰 久那戸神)

茂村を食邑し加茂太郎と稱す。保行は保春の子なり。四條天皇文曆二年香川郡安原山に來り西谷に居る。故に西谷を以て氏とす。



郷社 西谷八幡神社
「蓋土家上原氏先祠之乎」
と見ゆ。天正
年中長曾我部
氏の兵火に罹
り社殿炎上、

川田太左衛門、橋本與惣左衛門、上原四郎右衛門氏子と俱に再建す。明治四十三年より大正三年に亘り境内模様替を

行ひ、社殿を改築、大正四年五月遷座祭を執行せり。翌五年神饌殿を、同六年社務所齋館等を新築す。大正四年十月十三日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 全讃史)

大正元年^{字下}龍神社・大仙神社、^{字合}合具神社・玉峯神社・古山神社・八岐神社・新山神社・春日神社、^{字北}北小藪神社、^{字東}東浦神社を合祀。大正四年^字關尾神社、^{字野}野龍神社、^{字奥}奥大山祇神社・奥野神社、^{字黒}黒廣贈神社・大峯神社、^{字浦}浦長峰神社、^{字黒}黒戸隱神社、^{字北}北東神社・八幡神社・庚申神社、^{字西}西白鳥神社、^{字黒}黒鳴瀧神社・八幡神社、^{字安}安五柱神社、^{字來}來栖神社、^{字野}野尾前神社・野神社、^{字西}西椋本神社、^{字栗}栗青野金山神社、^{字音}音愛宕神社を合祀。大正六年^{字浦}浦梅谷神社を合祀。翌七年^{字二}二北畑^{北畑}北畑神社を合祀す。

例祭日 十月十四日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 上拜殿 神饌殿 齋館

神庫 社務所

境内坪數 四千五百三十九坪

氏子區域及戸數 大字安原下字關より南部字戸石に至る十四

字 三百戸

境内神社 來栖神社(天御中主神)

大正四年字來栖より移轉して境内神社となす。

又平賀八幡と稱せり。社記、香西雜記等によれば、天正年間仙石權兵衛秀久當國に封を受け引田より宇多津に移居す。時に當



平賀八幡神社

村の百姓等亂を起し秀久の命に服せざりしかば亂民百餘名刎せられたり。里人恐怖して安住せず離散する者頗る多し。其の時當社の神體を奉じて葛西郷に至りし者葛西郷に小祠を營む。これ今の香西町の平賀神社の地なりと云ふ。全讃史、香西平賀八幡の條に『父老曰昔從ニ香東郡平

小山神社(大己貴命 合素盞鳴命)大正四年字上中徳より移同年字下中徳笹山神社を合祀す。

(二六) 山王神社 安原村大字安原下字戸石

祭神 大山祇命

由 緒 安原村郷社西谷八幡神社境外末社。社傳によれば弘仁年間僧空海木田郡西植田村の神内池を築造の際、同地の住人等戸石の地に來住し當社を創建せりといふ。明治三十九年幣殿、拜殿を改築。

祭日 五月十二日 陰曆六月十二日 陰曆九月十二日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四百六十四坪 崇敬者人員 約二百人

(二七) 八幡神社 安原村大字安原下字平賀

祭神 應神天皇

合祀祭神 大山祇命 大己貴命 市杵島姫命 素盞鳴命

由 緒 大國主命 少彥名命(一に曰 相殿神九柱) 安原村郷社西谷八幡神社境外末社。世俗ダケ八幡

賀山^一迎^レ之^以是^于今^祭日^平賀^人修^驗大^曉院^山主^權右^衛門^主而^與祭^儀若^此二^人子^孫不^至則^祭儀^不成^云と見ゆ。而して其の後亂治まりて再び海濱より神軀を奉じて歸り平賀山上に奉祀せり。長曾我部元親當國に來侵の際高山の神なりとて大いに畏敬し兵火至らざりしといふ。(全讃史 名勝圖會)

大正八年本殿及び拜殿を改築、幣殿を新築す。

大正五年^{字安}安^字大山^字祇^字安^字平^字嚴^字島^字大^字山^字祇^字浦^字谷^字的^字場^字神^字社、^{字平}賀^字鳳^字木^字神^字社、^{字北}二^字柱^字神^字社、^{字北}山^字神^字社を合祀す。

祭日 陰曆六月十一日 同八月十一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二百十坪 崇敬者人員 約二百人

(二八) 熊野神社 安原村大字安原下字音川

祭神 伊邪那伎命 伊邪那美命 須佐之男命

由 緒 安原村郷社西谷八幡神社境外末社。傳ふる所によれば大寶元年僧行基當地に來り伽藍を建立し福壽山如意輪寺と號し、同寺の鎮守神として當社を奉祀せしが、後ち僧

空海神託によりて社殿を淨域に遷座せりといふ。嘉永年間更に今の地に奉遷す。

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
境内坪數 七十五坪 崇敬者人員 約三百五十人

(二九) 村天野神社

安原村大字安原下字鮎瀧下

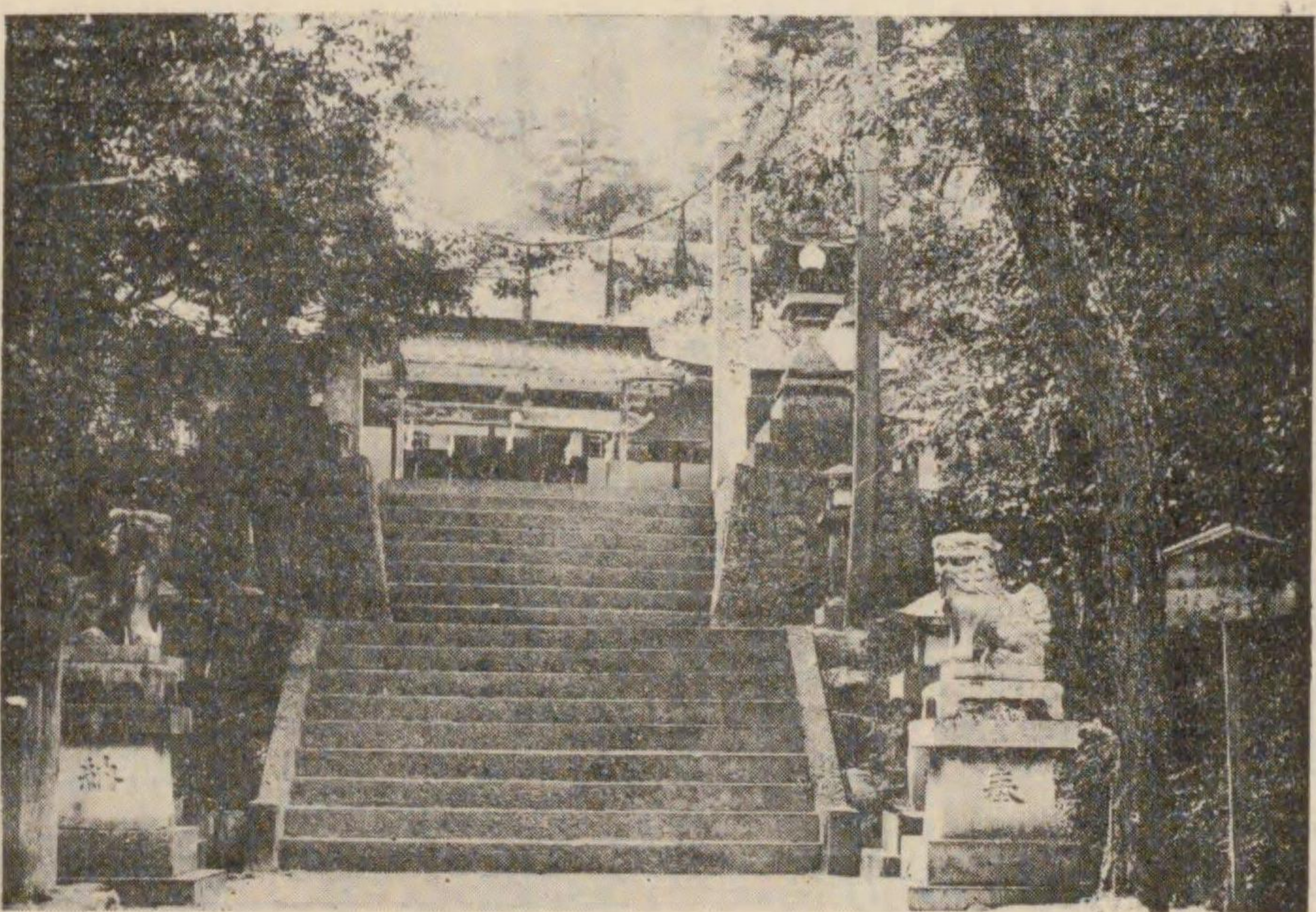
祭神 天兒屋根命 天照皇大御神 天太玉命

合祀祭神 國常立命 大山祇命 岐神 大國主神 素盞鳴命 仁德天皇 猿田彦命 天御中主命 菅原道真公

(二)に曰 相殿神二十一柱

由緒 社記に依れば、仁壽三年(紀元一五三)九月九日の朝楯原山に鶴聲あり、村井民部なる人此の聲を不思議に思ひ楯尾山に登りしに、神の枝に鏡一面懸れるを發見、乃ち神鏡なりとし、同地に一祠を建て一郷の氏神となせりといふ。延享五年六月再建あり、明治四十一年境内模様替を行ひ、本殿、幣殿、上拜殿等を改築、大正九年十月神饌殿を新築せり。明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集 全叢史 今名勝圖繪)
大正元年^{字神}神羽神社、^{字栗}栗木谷神社・山神社、^{字橋}泉神

社・道祖神社・杵築神社、^{字鮎瀧}下童洞神社・船戸神社・大山祇神社・大上神社・高津神社、^{字鮎瀧}上寺内神社・鼻高神社



村天野神社

野神社、^{字金}姥池神光社、^{字橋}泉丸神社、^{字猪}猪鼻神社、岐神社を合祀、同四年^{字鮎瀧}上天満宮を合祀す。
例祭日 十月九日
主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 拜殿 神饌殿

境内坪數 千三百六十七坪

氏子區域及戸數 ^{字鮎瀧}橋谷 栗木谷 神羽 百〇五戸

(一〇) 春日神社

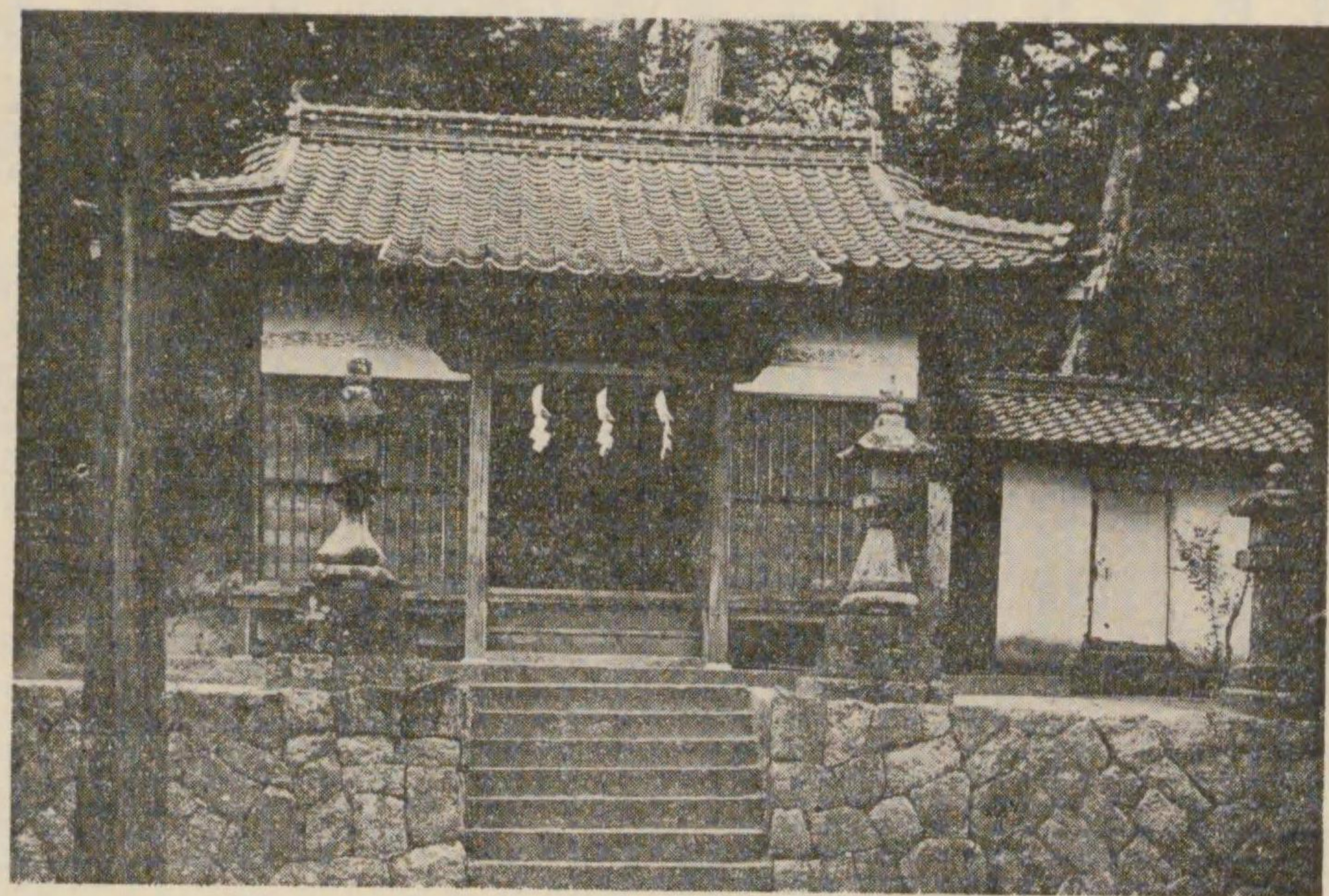
安原村大字安原下字橋谷

祭神 天兒屋根命 (一)に曰 天兒屋根命 相殿神三柱

由緒 安原

村社天野神社境外末社。傳ふる所によれば、建仁元年(紀元一八六一)明

神山の中腹西向に祠を建て春日大明神と奉稱す。文祿年間に至りて青井忠太夫里人と謀り



春日神社

て社殿を改築せりといふ。天明二年石垣を築造、大正六年

十月境内模様替を行ひ、本殿を現在地に移轉、翌七年幣殿拜殿を改築す。
祭日 五月六日 十月六日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 上拜殿
境内坪數 八百〇五坪 崇敬者人員 約七十人

(一一) 童洞神社

安原村大字安原下字鮎瀧下

祭神 豊玉比賣命 (一)に曰 豊玉姫神 八柱大神

由緒 安原村村社天野神社境外末社。香東川童洞潭(一

に百々淵、或は滔々潭に作る)の潭底岩窟内に鎮座ありて社殿なし。往古より祈雨所としてその名高く、舊藩時代は當郡の請雨所なりき。全叢史・天野大明神の條下に『鮎瀧河中有淵曰百々潭。水聲觸石滔々焉滔々百々國音同也。土人云此潭有神龍。故國中旱祈此潭。無不_レ得矣。岡村天福寺得_レ公命_レ祈_レ之_レ從_レ古爲_レ然』と。又同書高松侯世家の條に『八年(寛文)夏大旱祈_レ雨於百々潭。三日而雨。此時郡監篠原四兵衛使_レ里正河田太左衛門探_レ潭底。曰所_レ有者唯材木耳。』是歲(寶曆九年)香東郡鮎瀧百々潭上始建_レ龍王祠』とも見ゆ。鎮座地は當郡隨一の勝域にして古來此の淵に關

する傳説甚だ多し。慶應年中此の淵に童女の頭屢顯れたりといひ爾來童洞と稱す。明治の初め淵名に因みて社號を童洞神社と改む。(全讃史 高松藩記 讃州府志 香川縣史)

祭日 土用入 主なる建造物 無
境内坪數 三百坪 崇敬者人員 約六百人

(三三) 八幡神社 安原村大字安原下字下倉下

祭神 應神天皇

合祀祭神 闇竈命 素盞鳴命 大國主命 大山祇命 倉稻魂命 大己貴命 奥津比古命(一に曰 相殿神十三柱)

由緒 傳ふる所によれば岡道重なる者阿波國より讃岐南條郡粉所村猿洞の地に來り小城を築き居住せしが、更に當地に移り兜を御靈代として八幡大神の祠を建て、奉祀せし所と云ふ。道重は天正年間三好存保に従ひて阿州重清城に戦ひ、敗れて此の地に還るといふ。其の後正徳元年森東十郎之を再建せりと。明治二十五年本殿改築、同二十九年下拜殿改築。大正五年境内の模様替を行ひ、同七年幣殿及び上拜殿を改築せり。
大正五年 倉下龍神社・窪田神社・北山神社、
倉上原神社・

(三二) 八幡神社 安原村大字安原下字河北

祭神 應神天皇

合祀祭神 豊玉比賣命 大山祇神 大己貴命 市杵島姫命 伊邪那岐命 猿田彦命 闇淤加美神 天照皇大神 安徳天皇

由緒 大正六年本殿を移轉し、幣殿、拜殿を改築せり。
明治四十三年 北字河 大山祇神社・大山祇神社、
字西 大山祇神社、
字中 龍神社・大己貴神社・大山祇神社・大山祇神社・
大山祇神社を合祀。翌四十四年 字西 桐ヶ佐古神社、
字土 大山祇神社・大山祇神社・龍神社・土佐神社、
字中 大己貴神社・大山祇神社を合祀。大正七年 字中 劍山神社を合祀す。

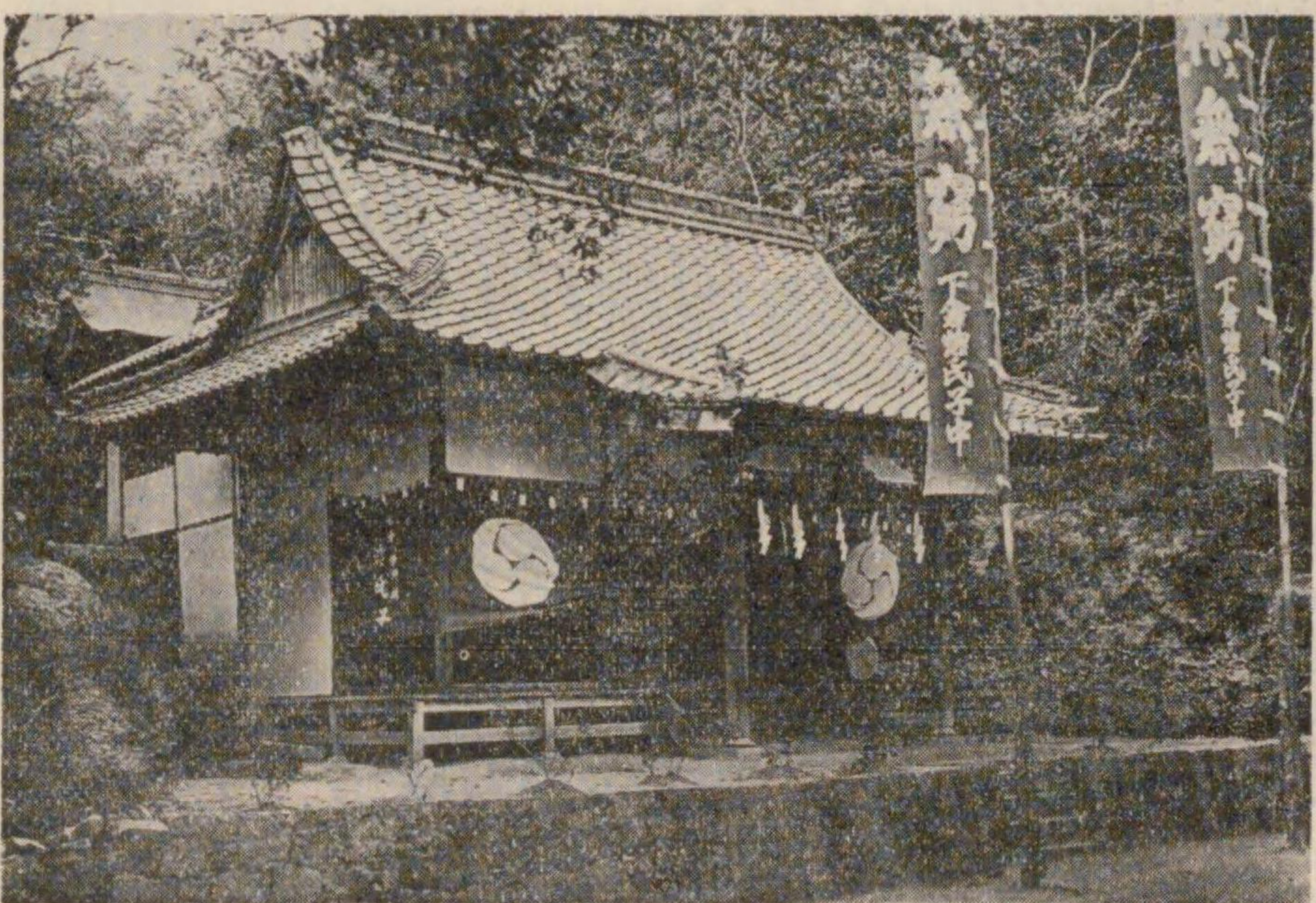
祭日 十月一日
主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 拜殿
境内坪數 七百六十七坪 崇敬者人員 約四百人

(三四) 村平尾神社 安原村大字東谷 字森窪(平尾山)

祭神 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后

合祀祭神 素盞鳴尊 天兒屋根命 八千戈神 倉稻魂神 大山咋神 大山祇神 安徳天皇 崇徳天皇 菅原道

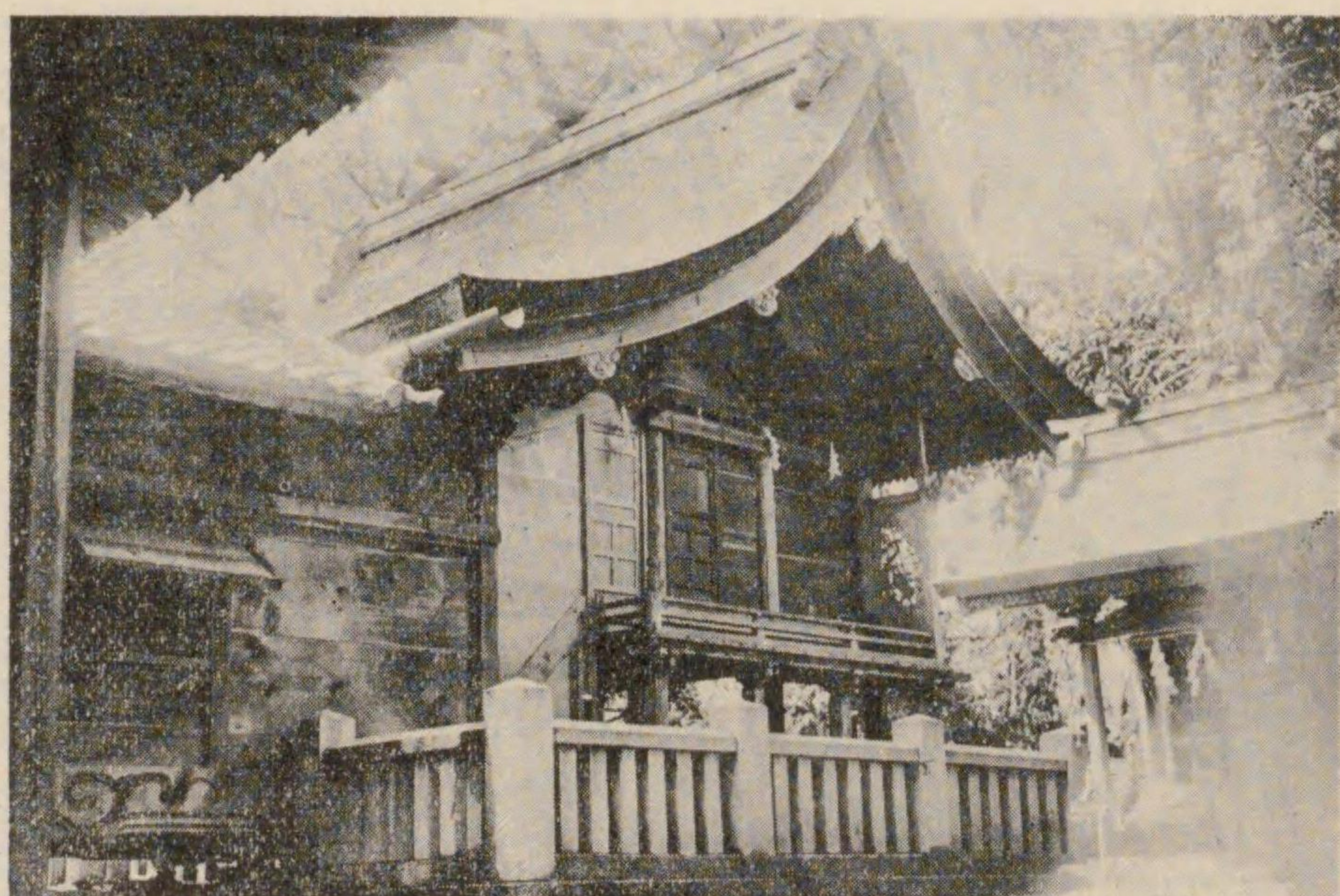
上ノ宮神社、字金 奥内神社・八幡神社・大山祇神社を合祀す。
祭日 五月一日 十月一日



八幡神社

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿
境内坪數 三百〇六坪 崇敬者人員 約四百二十人

由緒 眞公 船戸神 奥津彦神 奥津姫神 高竈神 黒雷神 天養元年(紀元一八〇四)三月十五日吉廣兵庫頭の



村平尾神社 眞八代の子 當國香川郡西庄村に來住し 瀧井左門と云ふ。其の子憲 豊明あり、其の弟吉廣兵部の裔兵庫頭に

至り吉廣城に居り當社を奉祀す。又豊明の子孫は代々西庄村にありしが、其の八代の裔左京に至り天養元年東谷村に

大正二年^{字青}大山神社・白鳥神社・若宮神社、^{字下}大山神社・荒神社・天皇神社・劍神社、^{字辰}猿田彦神社・大山祇神社・若宮神社・御服神社・猿田彦神社、^{字岩}天神神社・地鎮神社・大山神社、^{字東}荒神社・尼御前神社、^{字藏}龍社・山神社・龍王神社を合祀。更に大正六年^{字除}落合神社、^{字鹽}江大山神社を合祀す。

例祭日 九月二十四日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿 隨神門
寶物 鏡 外一點

境内坪數 六千五百四十八坪

氏子區域及戸數 鹽江村 安原上西村 安原村の一部 九百九十八戸

(二六) 景安社 鹽江村大字安原上字岩部

祭神 景安靈神

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社。享保十年八月、川田助三郎景久の創始する所にして、川田權兵衛尉景安命を祭る。景安は文明十三年川田八幡を岩部八幡に合祀してこれが祭祀に關與し、社運隆盛の基を開きし人なり。即ちそ

の功績を稱ふると共に川田氏祖神としてその裔川田景久之を岩部八幡宮舊境内地へ奉祀せしなりと。

主なる建造物 本殿

境内坪數 一坪 崇敬者人員 十人

(二七) 愛宕神社 鹽江村大字安原上字川西

祭神 火産靈神

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社。元祿五年八月松平頼重之を再營すと傳ふ。

主なる建造物 本殿

境内坪數 二十坪 崇敬者人員 九十五人

(二八) 金刀比羅神社 鹽江村大字安原上字岩部

祭神 大物主命 崇徳天皇

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿
境内坪數 二坪 崇敬者人員 三百五十人

(二九) 熊野神社 鹽江村大字安原上字川地

祭神 伊弉諾尊 伊弉册尊

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社。元祿四年九月、上原四郎左衛門之を創始すといふ。
祭日 陰曆九月七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二十坪 崇敬者人員 約七十人

(三〇) 恵比須神社 鹽江村大字安原上字小田

祭神 事代主命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 十五坪
崇敬者人員 三十人

(三一) 荒神社 鹽江村大字安原上字生山

祭神 澳津彦命 澳津姫命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 二十四坪

崇敬者人員 四十人

(三一) 天満神社 鹽江村大字安原上東字籬谷

祭神 菅原道真公

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 四十二坪
崇敬者人員 三百四十人

(三二) 熊野神社 鹽江村大字安原上東字北井

祭神 伊弉那・伊弉尊 伊弉那美尊

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
祭日 陰曆九月八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百六十五坪 崇敬者人員 約六百人

(三四) 大山神社 鹽江村大字安原上東字八丁

祭神 大山祇命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 四坪
崇敬者人員 二十五人

(二三) 大山神社 鹽江村大字安原上東字梓野

祭神 大山祇命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 三十坪

崇敬者人員 八十人

(二六) 柞野神社 鹽江村大字安原上東字南地

祭神 國常立尊

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 百三十二坪

崇敬者人員 三百六十人

(二七) 古森神社 鹽江村大字安原上東字南地

祭神 諏訪神

山神社の八社を合祀す。

祭日 九月九日

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 拜殿 神饌殿

境内坪數 二百五十二坪 崇敬者人員 約四百七十人

(二九) 劍神社 鹽江村大字安原上東字八丁

祭神 安徳天皇

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 十五坪

崇敬者人員 三百八十人

一一二 安原上西村

(一四) 社龍神社 安原上西村字松尾(西山)

祭神 高雷龍神

合祀祭神 大山祇命 水波能賣神 天兒屋根命 少彦名命

伊邪那岐命 伊邪那美命 大雀命 應神天皇

香川郡

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社。初め妙見と稱し鬼
子母神を祀るといはれしが、後ち改祭の上古森神社と改稱
せらるといふ。

主なる建造物 本殿 境内坪數 十坪

崇敬者人員 百二十四人

(二八) 白人神社 鹽江村大字安原上東字田中
(榊川)

祭神 級長津比古命 級長津比賣命

合祀祭神 事代主命 崇徳天皇 菅原道眞公 嵯峨天皇

大山祇命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社。天正年間尾形八兵

衛の肇祀と傳へらる。全讃史に『白人大明神在榊河里里

社也土人云天正時有尾形八兵衛者從阿來榊河開土

田以住官命爲里長始立祠爲社甚有靈威矣或云鎮西

八郎之靈也今按蓋尾形氏先出近江迎白鬚大明神祠

之然土人訛云白人一身近江國地神有白鬚大明神此神嘗

見湖水七變葦原』とあり。(讃州府志 香川縣史)

明治四十五年^{字田}中 金刀比羅神社・天滿神社、^{字嵯}山神社、

所^{字下}大山神社・大山神社、^{字北}大山神社、^地大山神社、^内大山神社・大

由緒 もと本村字細井に鎮座ありしを大正四年十一月現在

地に遷座す。

大正四年^{字堀}山神社・山神社、^{字松}水上神社・山神社・

山神社・松尾神社、^{字細}大權現神社・若宮神社・山神社・

八幡神社を合祀す。

例祭日 十月五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 社務所

境内坪數 千五百坪

氏子區域及戸數 字堀山 細井 松尾 八十戸

(三四) 天滿神社 安原上西村字内場

祭神 菅原道眞公

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 六十坪

崇敬者人員 五百二十人

(三五) 大山神社 安原上西村字檜

祭神 大山祇命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 六坪
崇敬者人員 八十人

(一四) 金刀比羅神社 安原上西村字燒堂

祭神 大物主命 崇徳天皇
由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 九十坪
崇敬者人員 四十人

(一五) 熊野神社 安原上西村字下貝ノ股

祭神 伊邪那伎命 伊邪那美命
由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 六百五十坪
崇敬者人員 百二十人

(一六) 大山神社 安原上西村字物井川

祭神 大山祇命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 十六坪
崇敬者人員 三十八人

(一七) 山神 社 安原上西村字別子

祭神 大山祇命
由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 十三坪
崇敬者人員 三十三人

(一八) 山神 社 安原上西村字別子

祭神 大山祇命
由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 十五坪
崇敬者人員 四十三人

(一九) 春日神社 安原上西村字眞那屋敷

祭神 天兒屋根命

由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 二十九坪
崇敬者人員 百二十人

(二〇) 舟戸神社 安原上西村字二ツ門

祭神 舟戸祇命
由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 三十五坪
崇敬者人員 八十五人

(二一) 劔山神社 安原上西村字物井川

祭神 安徳天皇
由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 三十坪
崇敬者人員 八十三人

(二二) 山神 社 安原上西村字小出川

祭神 大山祇命

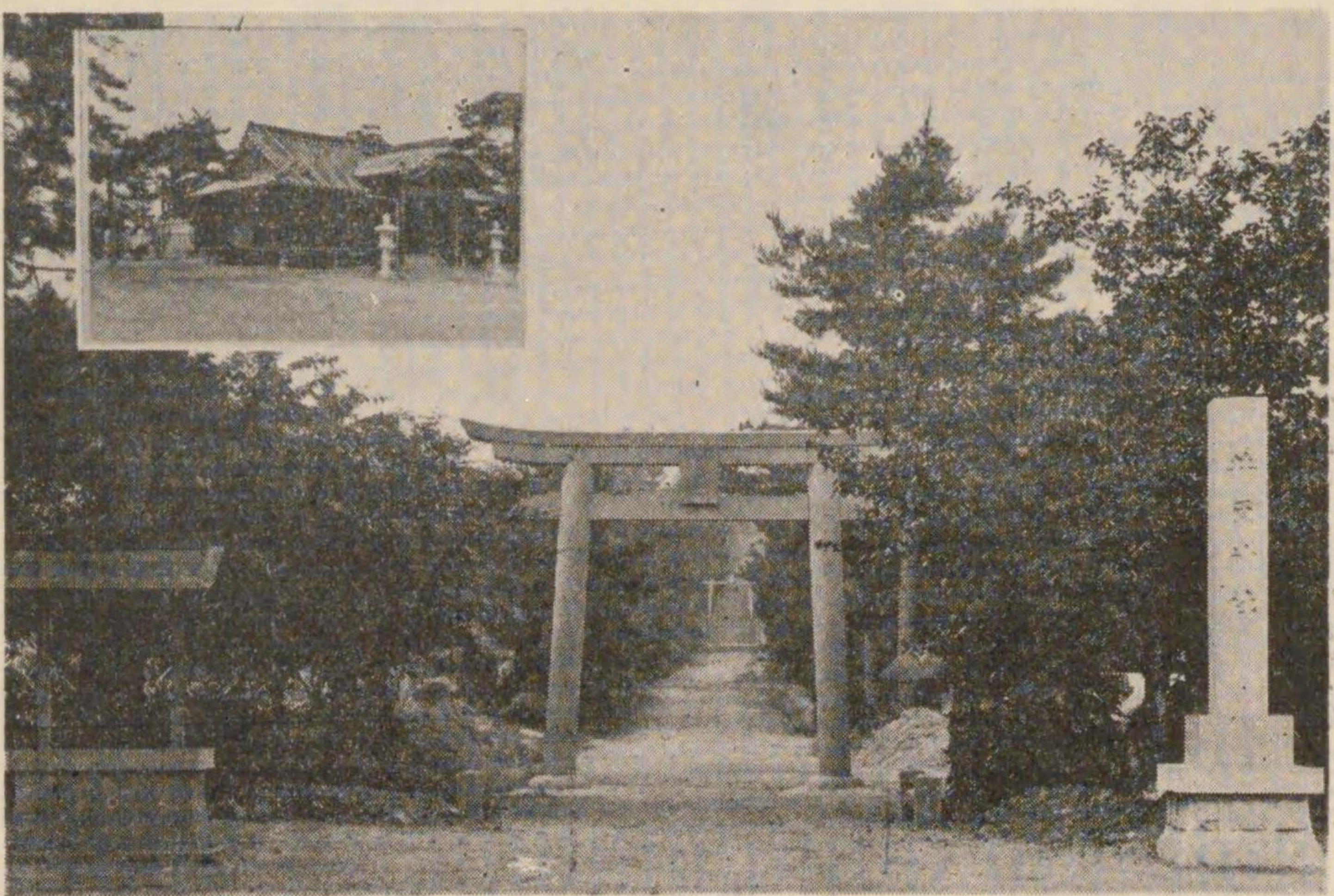
由緒 鹽江村村社八幡神社境外末社。明治四十三年社殿
全部改築。
祭日 陰曆九月十九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 六百八十八坪 崇敬者人員 約百十人

一三 池西村

(二三) 村井原神社 池西村大字西庄字宮前

祭神 國常立尊
由緒 慶長十八年(紀元二二七三)の創祀にして、古くは
妙見宮と奉稱し、井原郷(倭名鈔井乃波良)の産土神たりと
云ふ。天正年間當地に松本助之進茂頼なる者あり。十河存
保の麾下に屬せしが、常に妙見像を以て守神とし、出陣に
際しては必ず之を兜の頂に安置せり。長曾我部元親の阿波
國重清城を圍むや、茂頼十河存保に従ひ勇戦して之に死
す。家人その像を持ち歸りしを、茂頼の子助太夫茂久、慶長
十八年祠を建て、之を祀り妙見宮と稱せり。これより前こ
の地に植田妙光なる者あり。一寺を當社現在地に建て明光

寺（妙光寺とも）と云ふ。植田氏は神櫛王の後裔なるを以て、王及び王妃の像を作り寺内に安置せしが、天正年間兵火に罹りて其の所在を失せり。元祿十六年平藏なる者ありて明光寺山に家を作る。その處に塚五ヶ處ありしを藤四郎なる者發掘して前の二像を得當社に合せ祀れり。明治二年に至り三昧の神體を廢して改祭、明治三年七月社號をも舊郷名に因み井原神社と改稱す。延寶四年社殿再建、享和元年拜



村社井原神社

殿改築あり。明治三十二年八月暴風の爲め社殿倒壊せしを以て、同三十四年再建、大正六年本殿、幣殿再建、上拜殿、神饌殿新築。大正七年二月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。（全讃史 松本家譜 植田家譜 大西家譜）

例祭日 十月八日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 上拜殿 神饌殿 祭具庫 寶物 神鏡一點

境内坪數 千六百二十六坪

氏子區域及戸數 大字西庄 二百一十一戸

境内神社 佐伎神社（大己貴命 祀合天兒屋神 大山祇神）

素盞鳴神 高皇產靈神 神皇產靈神（大正四年宇天神岡西谷字櫻本本土居神社、宇在所八太神社、宇下田井道祖神社を佐伎神社に合祀す。右西谷神社はもと幣無坂と稱する地の南にありて、安原村東谷の佐藤家々譜に、同家の祖先天長年間當地に住し本村の神職たり。西谷神社は當時佐藤家の祖先が奉祀せしものなるべく、又八太神社は古老之を古宮と云ひ井原神社創立以前の木村産土神なりしが如し。）

(一五) 五十猛神社 池西村大字池内字北原

祭神 五十猛命

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社。細川頼之の創祀にして、岡館四方權現の一なり。頼之岡館に居りて四國を治

む。其の四隅に鎮守祠を立つ、相距ること各一里、當社は岡館の乾に當る。良は川東村祈雨神社、坤は由佐村池谷神社、巽は川東村山神社なりといふ。

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 四百六十六坪 崇敬者人員 七百〇七人

境内神社 白鳥神社（日本武尊）

(一四) 金刀比羅社 池西村大字池内字小鶴生原

祭神 大物主神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿

境内坪數 百〇七坪 崇敬者人員 二百人

(一三) 國津神社 池西村大字横井字尾崎

祭神 級長津彦命

合祀祭神 大物主命

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社。

金刀比羅神社を合祀す。

明治四十二年 字御所原

主なる建造物 本殿 境内坪數 二百十三坪 崇敬者人員 百十三人

一四 由佐村

(一二) 縣冠纓神社 由佐村大字由佐字三ノ原

祭神 仲哀天皇 應神天皇 神功皇后

由緒 貞觀三年（紀元一五二二）僧圓珍（智證大師）國中を巡歴して井原郷に至る。時に月見原の松林に毎夜光輝を發するものあり。圓珍行て之を見るに白鬚の老翁ありて、我は鳩峰大自在王菩薩なり。此の地に鎮座して井原郷民を護らむと云ふ。こゝに於て圓珍里民に募りて祠を建て法樂を營みしに、一條の白氣東方より飛來して其の祠に入れり。乃ち一字を營み弟子眞蓮をしてその祠を司らしむ。これ即ち寶藏寺なりと全讃史に見えたり。三代物語には『元祿以來使寶藏寺爲別當』とあり。延文二年に至りて細川頼之、岡藏人行業の館に寄寓し岡館を營み當社を尊崇すること甚だ厚く、石清水八幡の冠纓を乞ひて之を納む。爾來冠

纓八幡宮の稱あり。頼之の四國平定に當り、出陣の度に必ず奉幣して戦勝を祈れり。貞治二年の春頼之、將軍義詮の命により伊豫の河野氏を討つや、發するに臨み戦勝を祈願し戦大に勝てり。因て神廟を造營し黍を奉りて報賽の祭を行ひ、又四月三日は頼之が誕生日なるを以て毎歲祭祀を行ひ、農具市を開けり。世に之を右馬頭市といふ。蓋し頼之の官右馬頭なるを以てなり。三代物語に「頼之母祈八幡宮。以三四月三日一生頼之頼之在岡村館最崇信……四月三日以三其生日特祭之」とあり。當時に於て社殿の壯麗なること國中第一と云へり。天文八年十月細川晴元伊豫に河野氏を討つに方り、頼之が先例に依りて戦勝を祈り、凱旋の後社殿を再興し、同二十年奉加帳を納めたりしが今猶之を神庫に藏す。古くは祭祀を主どる者を總願司と云へり。細川氏衰へてよりは由佐氏其の後を承け、天正年中由佐秀武その食邑を失ふに至るまで厚く之を崇敬せり。當社の祭事は悉く由佐氏の制によるといふ。生駒近規封を讃岐に受け社領を寄進し、松平氏亦之に倣ふ。其の高三七斗四升なり。元祿年間寶藏寺別當として祭祀に關與し來りしが、後高松石清尾の祠官上野刑部の子孫祭祀を主れり。今の友安氏はその後裔なり。明治初年郷社に列せられ、明治三十四

年本殿以下改築、明治四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せられ、更に大正七年十一月二十六日縣社に昇格、翌八年一月改めて神饌幣帛料供進の指定ありたり。
 (玉藻集 三代物語 全讚史 古名勝圖繪)
 例祭日 十月十八日
 主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿 神輿庫 遊衣館 社務所二棟 奏樂殿 神饌殿 神門
 寶物 奉加帳細川晴元奉納 金幣細川勝元奉納 外一點
 境内坪數 六千二百二十七坪
 氏子區域及戸數 由佐村 池西村大字横井 池内 八百戸
 境内神社 龍王神社(豊玉姬命)
 嚴島神社(市杵島姬命) 白鳥神社(日本武尊)
 地神社(天照大神 大己貴命 少彦名命 埴安姬命 倉稻魂命)
地神社は明治四十三年地神社境内を冠纓神社境内に編入の爲め境内神社となる。
 祭神 菅原道眞公
 由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
 主なる建造物 本殿 拜殿

(一五) 天満神社 由佐村大字由佐字楠

境内坪數 四十五坪 崇敬者人員 百七十六人

(一六) 片山荒神社 由佐村大字由佐字宮下

祭神 速須佐之男尊
 由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
 主なる建造物 本殿 境内坪數 十二坪
 崇敬者人員 二十八人

(一七) 株木荒神社 由佐村大字由佐字南門

祭神 中筒男命
 由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
 主なる建造物 本殿 境内坪數 二十一坪
 崇敬者人員 十六人
 境内神社 木里神社(倉稻魂命)

(一八) 池谷神社 由佐村大字由佐字香原

祭神 句々迺馳命 軻遇突智命 金山彦命 罔象女神
 由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社。口碑の傳ふる所によれば、當村渡邊力藏なる人の祖先が寛政元年に創立せし所と云ふ。香川縣史に『相傳フ細川頼之神社ヲ岡ノ館ノ四隅ニ建テ以テ鎮守トス相距ルコト各一里俗ニ四方權現と稱ス……由佐村ニ池谷神社アリ之レ其坤位ニ當レリ』とあり。
 主なる建造物 本殿 中殿 拜殿
 境内坪數 五百〇二坪 崇敬者人員 七十五人

(一九) 藤本荒神社 由佐村大字由佐字楠

祭神 保食命
 由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
 主なる建造物 本殿 境内坪數 五十五坪
 崇敬者人員 百三十二人

(二〇) 高須荒神社 由佐村大字吉光字高須

祭神 軻遇突智神
 由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
 主なる建造物 本殿 境内坪數 二十四坪

崇敬者人員 百六十人

(一三三) 佐賀神社 由佐村大字吉光字川原

祭神 天目一神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社。刀工吉光の創祀と傳ふ。吉光は備前の人なり。永祿年間來りて此の地に住し、刀劍を製してその名四方に聞えたり。依てこの地を吉光と云ふに至れり。吉光當社を創立して氏神となす。世俗稱して明神と云へりと。(全讃史 讃州府志)

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八十一坪 崇敬者人員 百六十人

(一三四) 咲屋荒神社 由佐村大字吉光字小原

祭神 木花咲屋姫神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿

境内坪數 四十四坪 崇敬者人員 百六十人

境内坪數 二十三坪 崇敬者人員 二百三十人

(一三六) 山神社 由佐村大字岡字高根

祭神 大山祇命

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 百七十七坪

崇敬者人員 十一人

(一三九) 高野神社 由佐村大字岡字井手上

祭神 高皇產靈神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿 境内坪數 二十七坪

崇敬者人員 十二人

(一七〇) 春日神社 由佐村大字岡字清水

祭神 天兒屋根命

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

(一三五) 壹本荒神社 由佐村大字吉光字大股

祭神 須美之男尊

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿

境内坪數 十二坪 崇敬者人員 百六十人

(一三六) 地神社 由佐村大字吉光字下櫛

祭神 天照皇大神 大己貴命 少彦名命 龍田大神 埴安

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十坪 崇敬者人員 七百人

(一三七) 若宮神社 由佐村大字吉光字下櫛

祭神 若宮賣神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿

主なる建造物 本殿 境内坪數 百三十六坪

崇敬者人員 七人

(一三七) 祈雨神社 由佐村大字岡字高根

祭神 高靈神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 千〇六十八坪

崇敬者人員 六百三十人

(一三三) 山神社 由佐村大字岡字坊ヶ奥

祭神 大山咋神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 三百五十坪

崇敬者人員 十三人

(一七三) 住吉神社 由佐村大字岡字本村

祭神 中筒男神

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百〇五坪
崇敬者人員 九十人

(一七) 金刀比羅神社 由佐村大字岡字清水

祭神 大物主命
由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 七百五十坪
崇敬者人員 四十五人

(一七) 奥谷神社 由佐村大字岡字坊ヶ奥

祭神 水波之女命
由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 千二百四十五坪
崇敬者人員 四百三十人

(一六) 國津神社 由佐村大字岡字本村

祭神 罔象女命

蓋天元元龜開始祠之」と見ゆ。又同書の圓座八幡宮の條に『天正之時圓座有與次右衛門者盜河邊八幡金幣而歸立祠奉之』とあり。玉藻集に『麓八幡宮 開基大治年中治承年中松王兒傳父左馬允再興其後松王兒傳末葉小野權頭修覆天正年中土州長曾我部當國亂入之節八幡宮一字寺共再興』云々と云ひ、香川縣史亦同じけれども『天正年中兵火ニ罹り後又修造ス』とあり。三代物語には『諏訪寺在河邊寶昌山大治三年建立其後松王小兒之父仁明左馬允修造山上有諏訪明神山下有八幡宮此地沃土富家衆』と載せたり。

明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。大正十五年本殿を改築す。

例祭日 十月一日

主なる建造物 本殿 中殿 幣殿 拜殿 渡殿 廊下 正門
祭具庫

境内坪數 九百七十六坪

氏子區域及戸數 大字川部 三百八十六戸

境内神社 金刀比羅神社(大物主命)

嚴島神社(市杵島比賣命) 天満神社(菅原道真公)

八坂神社(建速須佐之男尊) 善覺神社(少彦名命)

由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 七十七坪
崇敬者人員 六十人

(一七) 金刀比羅神社 由佐村大字岡字井手上

祭神 大物主神
由緒 由佐村縣社冠纓神社境外末社
主なる建造物 本殿 境内坪數 五坪
崇敬者人員 二十一人

一五 川岡村

(一六) 村八幡神社 川岡村大字川部字宮本

祭神 應神天皇(一に曰 相殿に神名不詳の一柱を配祀)
由緒 河邊八幡宮と奉稱され、又麓八幡宮とも唱へらる。口碑の傳ふる所は三野四右衛門、入谷内記兩人の創祀と云へり。全讃史に『河邊八幡宮一村之社也諏訪寺常光院主之

稻荷神社(宇賀御魂神)

(一五) 德神社 川岡村大字川部字池下所

祭神 大年神

由緒 川岡村村社八幡神社境外末社

祭日 九月二十二日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 四十四坪 崇敬者人員 約四百五十人

(一〇) 諏訪神社 川岡村大字川部字諏訪

祭神 建御名方命

由緒 川岡村村社八幡神社境外攝社。大治年中の創立と傳ふ。傳ふる所によれば一條天皇正曆五年南海に海賊蜂起し、諏訪五郎光秀なる者平惟時に從ひ賊を討ちて當地に留まる。其の後百餘年を経て大治年中光秀の裔に諏訪少目光親なる者あり。高野山の僧常光弘法大師の舊蹟を尋ねて當地に來り光親が家に泊す。光親常光に囑して信州諏訪神を迎へて之を創祀し、常光の爲に一字を立て、諏訪寺といひ社務を司らしむ、これ當社の權輿なり。治承年間再營せら

れ、建武年間細川氏神田を獻じて河邊一郷の社とせしが、後山下に八幡宮を建て産土神とするに及び當社遂に衰微するに至れりといふ。古今名勝圖繪に『諏訪大明神……社領六石四斗三升 御證文の寫 諏訪大明神の社領於香川郡川部村高六石四斗三升の事從古來寄附來此度改頼常公御寄附候間全可有受納者也仍如件 元祿十四年五月朔日 寺社奉行永田四郎右衛門 岡崎平六 常光院(宛)』と載せ、高松藩記所載の寺社領の部に『常光院六石四斗三升』とあり。尙社領六石四斗三升は誤にして正しくは五石一斗三升なりと云ふ。(全讃史 古今名勝圖繪 玉藻集)

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 千六百四十四坪 崇敬者人員 約千人

(一八二) 天満神社 川岡村大字川部字松

祭神 菅原道眞公
由緒 川岡村村社八幡神社境外末社
祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百七十四坪 崇敬者人員 約六百人

(一八三) 小田神社 川岡村大字川部字池上所

祭神 高靈神
由緒 川岡村村社八幡神社境外末社
祭日 九月二十三日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百十四坪 崇敬者人員 約二百三十人

(一八四) 稻荷神社 川岡村大字川部字池坊

祭神 倉稻魂命
由緒 川岡村村社八幡神社境外末社
祭日 十月五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百七十五坪 崇敬者人員 約二百人

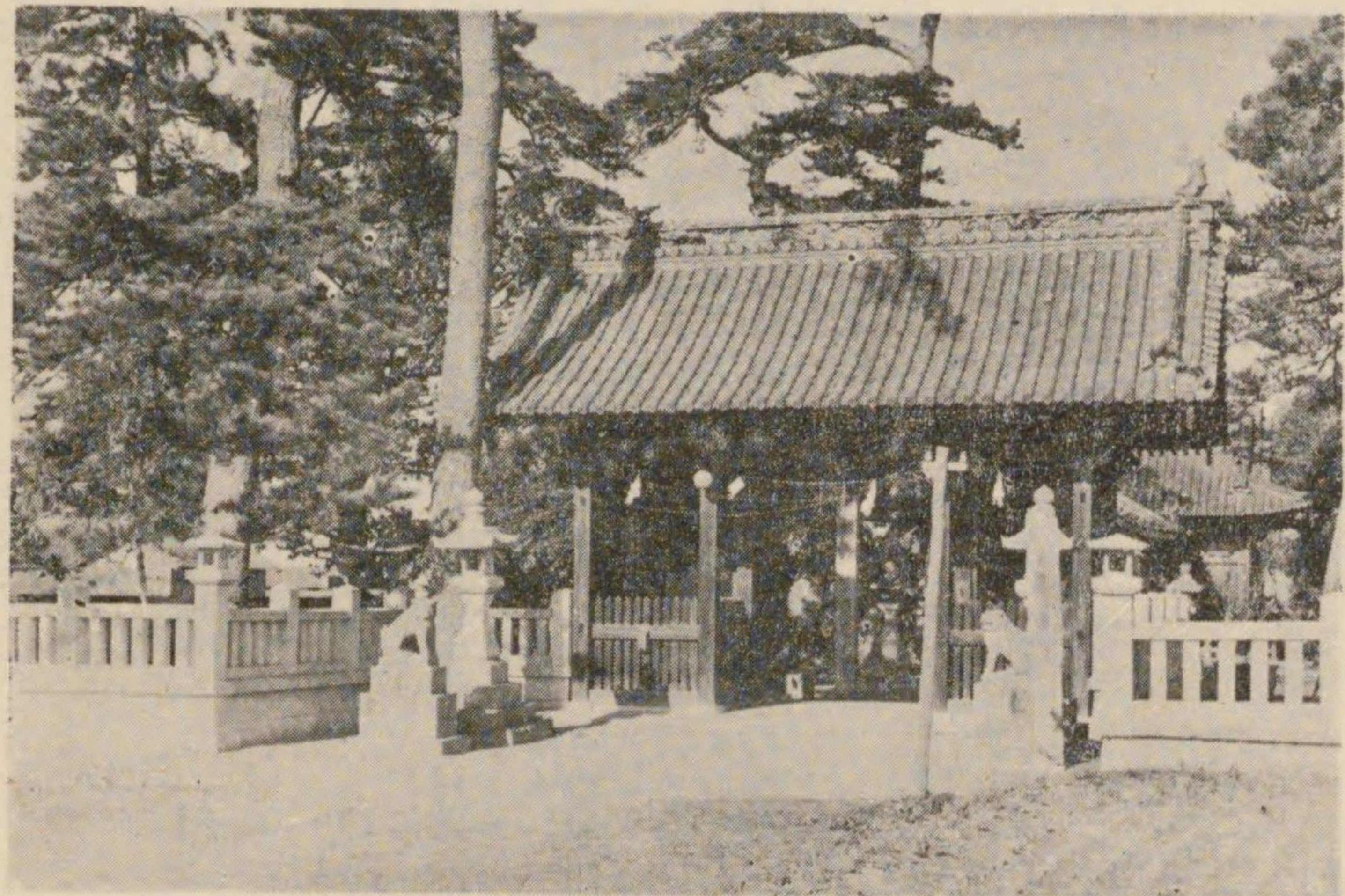
(一八五) 荒神社 川岡村大字川部字松

祭神 來名戸神
由緒 川岡村村社八幡神社境外末社
祭日 十月二十七日 主なる建造物 本殿
境内坪數 六十八坪 崇敬者人員 約三百人

一六 圓座村

(一八六) 郷社 廣旗神社 圓座村大字圓座字上本村

祭神 應神天皇
由緒 天喜元年
(紀元一七一三)
の創祀にして同年本殿造營、天治元年(紀元一七八四)拜殿を造營すと云ふ。一説に天治元年當村北原藤太夫の創建、元久五年四月再建せらるるとも云ふ。玉藻集に『治承年中中井右馬允再



郷社 廣旗神社
↑郷社廣旗神社神門

例祭日 十月五日
主なる建造物 本殿 釣殿 幣殿 上拜殿 下拜殿 神門

興』とあり。天正年間兵火に罹り、寛文年間再興ありて、元文年間修造せらる。明治十五年八月大暴風雨の爲め社殿大破せしを以て、翌十六年九月再建に着工し、同十九年八月竣成せり。大正十二年九月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(玉藻集三代物語 全讃史 名勝圖會)

寶庫 御幸所 札納所 遙拜所

境内坪數 千五百十坪

氏子區域及戸數 圓座村大字圓座 檀紙村大字檀紙の内 四百三十九戸

境内神社 和田積神社(豊玉比賣命)

文永年中廣旗神社氏子等の奉祀せし所にして、香川郡西の請雨祈願所たり。早魃毎に雨を祈り、大政所並に各村政所役人及び各村組頭は長百姓を惣代として日々參拜するを例とせり。當社に關する費用は總て郡費用として大政所より支辨せられり。元祿十二年六月大旱あり。同七月請雨祈禱の節著しき神驗ありて、藩主松平頼常大に感じ神像を城内に奉遷して崇敬せしが後護習院に遷座し、明治初年石清尾八幡宮に遷り、後又舊祠に復遷せらる。青龍宮と稱せられ、初め御神像は長福寺に安置せられたりしが生駒氏廣旗神社境内に祠を建て供米若干を附して雨請祈禱所とせり。

荒神社(久那斗神 一に曰 久那斗神 金刀比羅大神)

素波俱羅大神)

玉穗神社(天御中主神) 天滿神社(菅原道眞公)

(二六) 金刀比羅神社

圓座村大字圓座字横内

祭神 大物主命

由緒 圓座村郷社廣旗神社境外末社。慶應三年十二月二十二日字横内の人等相謀り之を創立す。

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 五坪 崇敬者人員 約三百人

(二七) 巖島神社 圓座村大字圓座字下本村

祭神 市杵島比賣命

由緒 圓座村郷社廣旗神社境外末社。紀氏の祖先創祀すと傳ふ。

祭日 六月十七日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七十二坪 崇敬者人員 百五十人

(二八) 吉野神社

圓座村大字圓座字長柄(下本村)

祭神 健角見命

由緒 圓座村郷社廣旗神社境外末社。久本氏の祖先創祀すと傳ふ。

祭日 九月三十日 主なる建造物 本殿

境内坪數 二十七坪 崇敬者人員 約百五十人

(二九) 長井戸神社 圓座村大字圓座字西長井

祭神 大歳神

由緒 圓座村郷社廣旗神社境外末社。紀氏の祖先創祀すと傳ふ。

祭日 八月二十八日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 三十三坪 崇敬者人員 約二百二十人

(三〇) 本村神社 圓座村大字圓座字上本村

祭神 若年神

由緒 圓座村郷社廣旗神社境外末社。一に王子宮とも稱せらる。往昔清右衛門なる人創祀せりと傳ふ。

祭日 九月二十九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 百五十九坪 崇敬者人員 約二千百五十人

(三一) 郷八幡神社 圓座村大字山崎字井手上

祭神 應神天皇(一に曰 主座應神天皇 相殿大國主命)

由緒 昔城州山崎より勸請せしものと傳へられ、依つて地名をも山崎と云ふ。往古は東面して鎮座ありしが、社前の道を乗馬にて過ぎるときは必ず落馬して身を損ふを以て、天和三年五月南面に改造せり。この棟札現存す。天明二年寶藏修補に際し、棟梁選定につき争論あり。時に中間村前

(二五) 長柄神社

圓座村大字圓座字長柄(東永井)

祭神 御年神

香川郡

境内坪數 十八坪 崇敬者人員 約百二十人

(二六) 有末神社

圓座村大字圓座字道下(佐古田)

祭神 大歳神

由緒 圓座村郷社廣旗神社境外末社

祭日 九月二十八日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 六十坪 崇敬者人員 約百七十人

(二七) 荒神社

圓座村大字圓座字西村(横内)

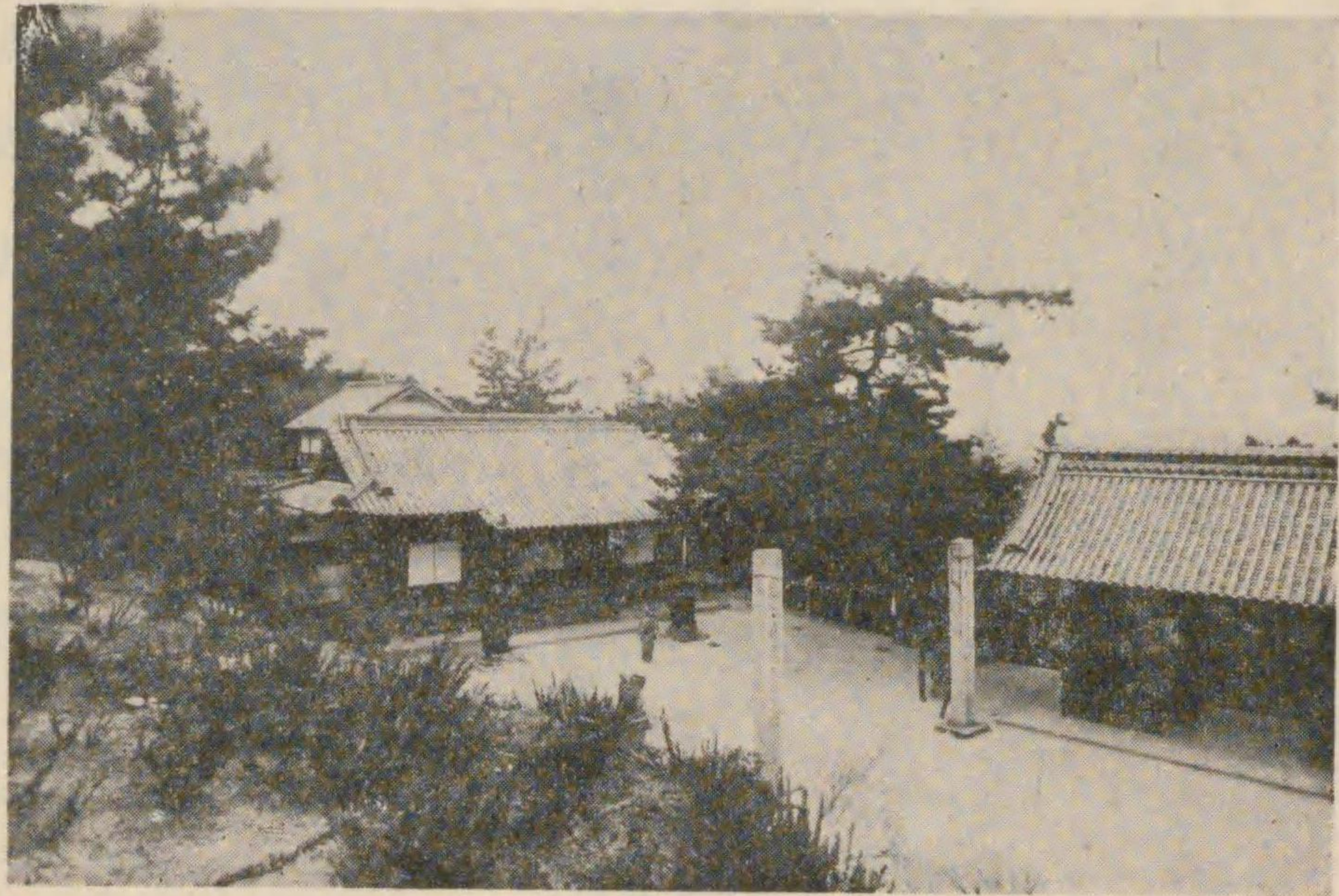
祭神 御年神

由緒 圓座村郷社廣旗神社境外末社

祭日 八月二十九日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十二坪 崇敬者人員 約七十人

政所役尾崎
甚兵衛敷武
に三夜に及
びて靈夢あ
り。衆人畏
敬して論争
直ちに止み
寶藏の修理
成就せり。
又寛政年間
八月の祭禮
につき氏子
座席を争ひ
て恒例の祭
日を延期し
けるに、社



郷社八幡神社

前の石鳥居風もなきに折れたれば、氏子ら神意に悖るを以て戒め給ふ所として直ちに祭禮を執行せり。
寛政(寛延ノ誤カ)三年九月七日藩主松平頼恭の息女長姫參拜神鏡一面を奉納す。寛延二年上拜殿、下拜殿改築、大正十

境内坪數 四千二百八十五坪

氏子區域及戸數 川岡村大字岡本 圓座村大字山崎 檀紙村

大字中間 同村大字檀紙 七百四十七戸

(一五) 村天満神社 圓座村大字山崎字井手上

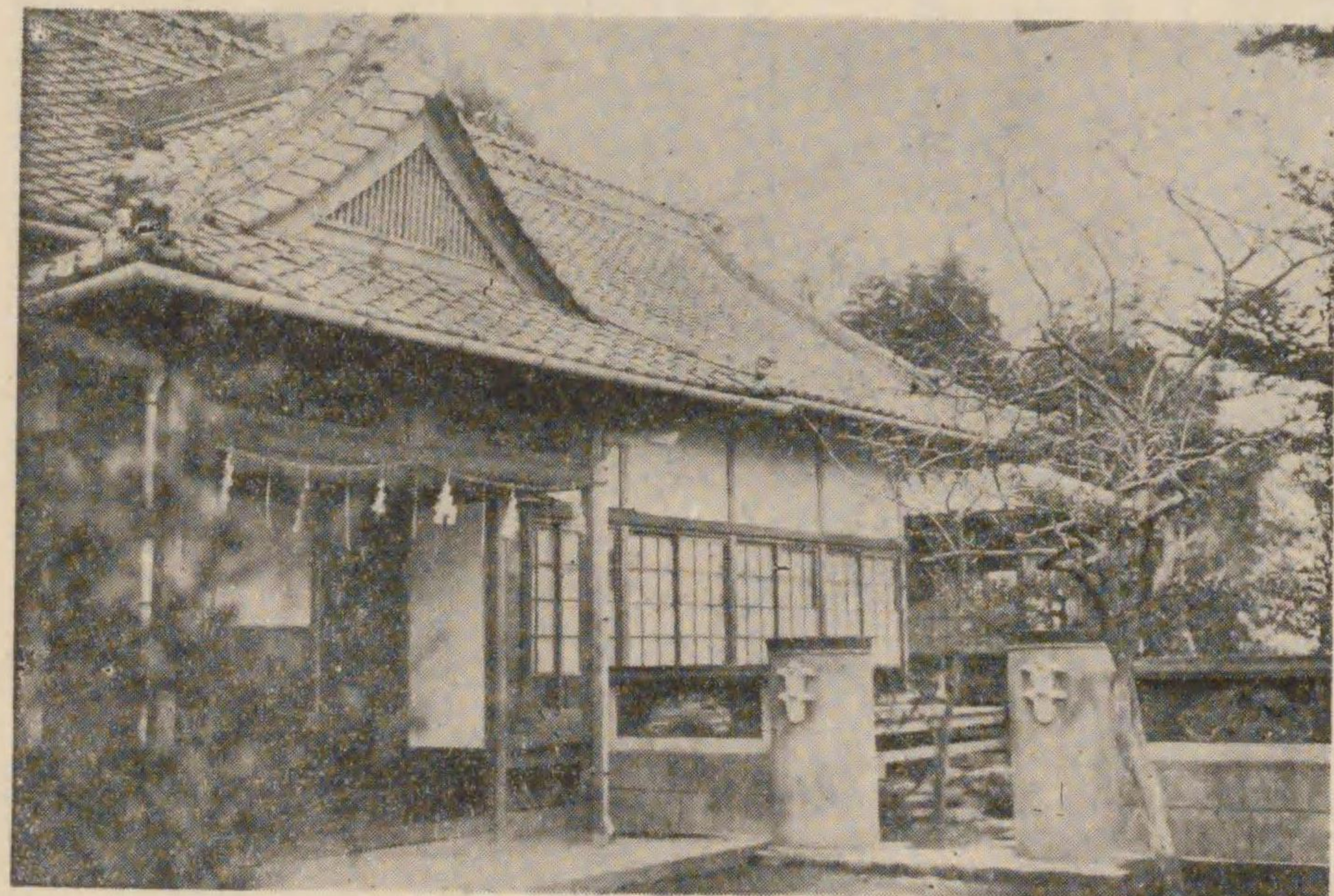
祭神 菅原道真公

由緒 中間天満宮と奉稱され頗る著名の神社なり。當社別當正花寺十世體鏝の記によれば、仁和二年正月、菅公讃岐守に任せられ、南條郡瀧宮の官舎に在り、時に中間郷北岡の城主押領使秦久利よく公に仕ふ。久利一女あり。公の族子を養ひて之に娶せ、嗣となし久利長門守と稱す。後菅公謫せらて筑紫にゆく。海上風波に遭ひて葛西郷變が鼻に泊せらる。長門守行て謁せり。其の翌年長門守ひそかに大宰府に赴きて公に謁す。公大に喜び「おもひきや心つくしのはてにきて昔の人に今逢んとは」と詠じ給ひ、又鏡に向ひて自らの姿を畫き、飛梅の核一顆を添へて長門守に賜へり。長門守歸りて其の梅の核を植ゑしに枝葉繁茂して五色の花咲けり。後長門守襄に賜ふ所の神像を奉じて祠を立つ。則ち今の宮所なり。久利氏の子孫代々奉仕す。天正年間兵火

一年本殿、幣殿改築、御饌殿、渡廊下新築。昭和八年社務所改築、齋館新築。明治四十年九月二十一日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(全讃史 古名勝圖繪 三代物語)
例祭日 十月十三日

主なる建造物

- 本殿 幣殿
- 上拜殿 下
- 拜殿 透塀
- 御饌殿 渡
- 廊下 隨神
- 門 祭具庫
- 寶庫 社務
- 所 齋館
- 手水舎 旅
- 所
- 寶物 神社
- 由來記 神
- 鏡松平長 姫奉納
- 棟札 外十
- 九點



郷社八幡神社々務所

にかゝり社殿炎上せしも、神影は事なきを得て小祠を再營し之を奉ぜり。國主生駒氏厚く尊崇せしが、松平頼重亦度々



參詣ありて、天和二年十一月、梅樹古木になりたれば、繼寄すべき様命ぜられ、元祿二年四月梅樹伐採すべからざる旨制札を建てられ、其の他種々梅樹保存の方法を講ぜられたり。松平頼常祈願の事ありて寶永元年境

八日遷宮ありて松平頼豊より御供物を供へられ藩臣等の出役あり。享保二年頼豊より中間本郷下所に於て神領十石の寄進あり。神領寄進は頼常の遺命によるといふ。同八年社殿修造に當りて領分中勸化を許可せられ米二百石を賜へり。同十四年の修造には萬燈村にて材木を賜ひ、梅樹の柵その他の費用をも寄進あり。享保二十年山崎村にて林二町七反壹畝の寄附ありて寛延二年の造營亦國中の勸化を許可せられ粳米の寄進あり。當社は古くより當國の總鎮守と云傳へしを以てかく國守藩主の崇敬厚く、松平頼恭、同頼起等亦屢參拜ありたる旨を記されたり。

享和二年菅公九百年祭に當り菅原長親より詩一軸の奉納あり。古名勝圖繪に『往古此地を中妻と云り河内國道明寺の里を上妻と云筑紫を下妻と云各管神社あり故に此地を中妻と云しが、其後今の文字中間と改り舊を失す』とあり。大正十四年二月二十日村社に列せられ、同年四月神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(三代物語 全讚史 玉藻集 今古名勝圖繪 高松藩記御家料役録)

例祭日 十月二十五日

主なる建造物 本殿 渡殿 幣殿 上拜殿 下拜殿
寶物 綱敷天神御影、大内天神御影、紀念札享保五年松平頼豊社殿修葺記念

る。

例祭日 十月十一日

主なる建造物 本殿 中殿 幣殿 拜殿 隨神門
寶物 短刀作州勝山、土裁則、鏡等二十點
境内坪數 二千九百三十五坪
氏子區域及戸數 大字御厩 三百二十戸

(一七) 池ノ内神社

檀紙村大字御厩字池ノ内

祭神 大土神

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社

祭日 十月十五日 主なる建造物 本殿

境内坪數 百七十二坪 崇敬者人員 三十二人

(一六) 半田神社

檀紙村大字御厩字半田

祭神 瀬織津姫命

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社

祭日 八月十一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十九坪 崇敬者人員 百二十人

棟札等十數點

境内坪數 二千七百〇三坪

氏子區域及戸數 大字山崎 二百九十四戸

一七 檀紙村

(一六) 村皇太神社

檀紙村大字御厩字西山

祭神 天照大神

由緒 傳ふる所によれば、當地もと大神宮の神領たり。依て天照大神を祀れりと云ふ。當社古くは長面寺山上に鎮座ありしが、天正の頃兵燹にかゝり、其の後現今の地に遷せしものにて、現今の字西山荒神社は當社の舊鎮座地なり。明治以前は正慶寺(山崎村)の支配にして、大神宮と奉稱し弦打村岩田神社の兼掌する所たり。明治六年皇太神社と改稱す。本殿は明治三十五年の改築、拜殿は嘉永二年八月の改築にして昭和五年修理、隨神門は明治八年二月の改築なり。

明治四十年十月二十四日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。

(一九) 荒神社

檀紙村大字御厩字西山

祭神 瀬織津比賣命

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社。一に西山神社と稱す。當社鎮座地は往古村社皇太神社の鎮座ありし所なりといふ。

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪數 三十七坪 崇敬者人員 八十八人

(一八) 津内神社

檀紙村大字御厩字津内

祭神 瀬織津姫命

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社

祭日 八月十一日 主なる建造物 本殿

境内坪數 五百二十坪 崇敬者人員 二百四十人

(一〇) 天満神社

檀紙村大字御厩字西山

祭神 菅原道真公

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社

祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 九十六坪 崇敬者人員 百六十人

(101) 荒神社 檀紙村大字御厩字大塚

祭神 素戔鳴命

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社

祭日 九月十三日 主なる建造物 本殿

境内坪数 十九坪 崇敬者人員 七十二人

(102) 山王神社 檀紙村大字御厩字池ノ内

祭神 大山祇神

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿

境内坪数 三十九坪 崇敬者人員 三十二人

(103) 山神社 檀紙村大字御厩字池ノ内

祭神 大山祇神

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社
祭日 九月二十五日 主なる建造物 本殿
境内坪数 十二坪 崇敬者人員 四十人

(105) 龍王神社 檀紙村大字御厩字万燈

祭神 瀬織津姫命

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社。もと西山神社と稱

されたりしが、明治三十五年龍王神社と改む。

祭日 八月十一日 主なる建造物 本殿

境内坪数 三十六坪 崇敬者人員 二百人

(106) 荒神社 檀紙村大字御厩字下所

祭神 澳津彦命

由緒 檀紙村村社皇太神社境外末社

祭日 八月十一日 主なる建造物 本殿

境内坪数 四坪 崇敬者人員 四十人

(107) 八幡神社 檀紙村大字檀紙字八幡

祭神 應神天皇

合祀祭神 天照皇大神 御年神 天兒屋根命 宇遲若郎子

命 事代主命 重仁親王

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。郷社岩田神社の寛

文八年九月各末社を合祀せし記録に、八幡庄八幡宮も岩田

宮に引取り勧進す云々とあり。口碑に、享和元年の創祀な

りと云ふも、そは岩田神社より還遷の年をいへるにて、前

記文書によるも寛文以前の鎮座なる事明かなれども年月詳

ならず。

大正二年大字檀紙^{字中}森中森神社・檀紙神社、^{字半}田若宮神

社・大將軍神社、圓座村大字山崎^{字藥}王寺神木神社・辨天神社・

藥王子神社を合祀す。右辨天神社は重仁親王の御廟なりと

傳へらる。

主なる建造物 本殿 中殿 拜殿 境内坪数 百十坪

崇敬者人員 三百三十五人

(108) 天満神社 檀紙村大字中間字南井手上

祭神 菅原道真公

合祀祭神 御年神 山雷龍神(一に曰 高龍神 闇龍神)

由緒 小天

神と稱せら

る。小天神

は古天神の

意にして中

間天満宮の

舊鎮座地な

りと云へり

此の中間天

満宮は、仁

和年中菅公

當國の守た

りし時、中

間郷の押領

使秦久利よ

く公に仕へ



天満神社

公の筑紫に薨じ給ふや祠を建て、嘗て賜ふ所の像を祀る。後これを山崎村(圓座村大字山崎)に遷座したるものなりと云ふ。當社は大正七年本殿を改築し幣殿、上拜殿を新築す。(玉藻集 三代物語 全讚史 古名勝圖繪 香川縣史 讃州府志 神社考)
明治四十五年^{字森}荒神社、^{字坪}荒神社、^{字山}龍神社、^{字尾}龍神社、^{字竹}龍神社を合祀す。

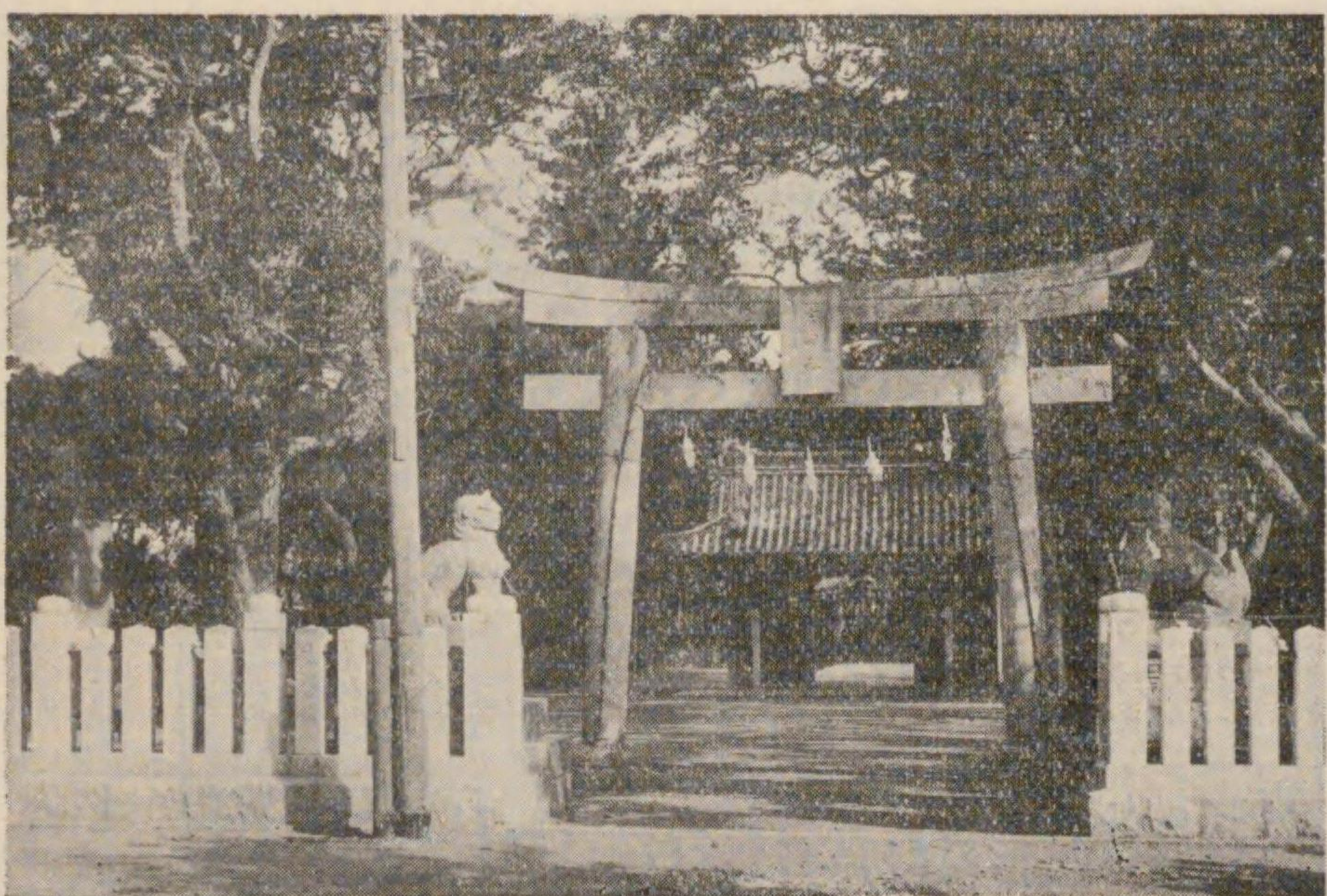
祭日 陰曆九月二十五日
主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 下拜殿 渡殿
境内坪數 八百坪 崇敬者人員 約千二百五十人

一八 弦打村

(103) 郷岩田神社 弦打村大字飯田字宮ノ窪

祭神 應神天皇 仲哀天皇 神功皇后
由緒 治承二年(紀元一八三八)八月の創祀。舊くは飯田郷(鶴市、郷東、飯田、檀紙)四ヶ村の産土神にして現今の檀紙村大字御厩も亦氏子たりしこと明なり。社領二石二

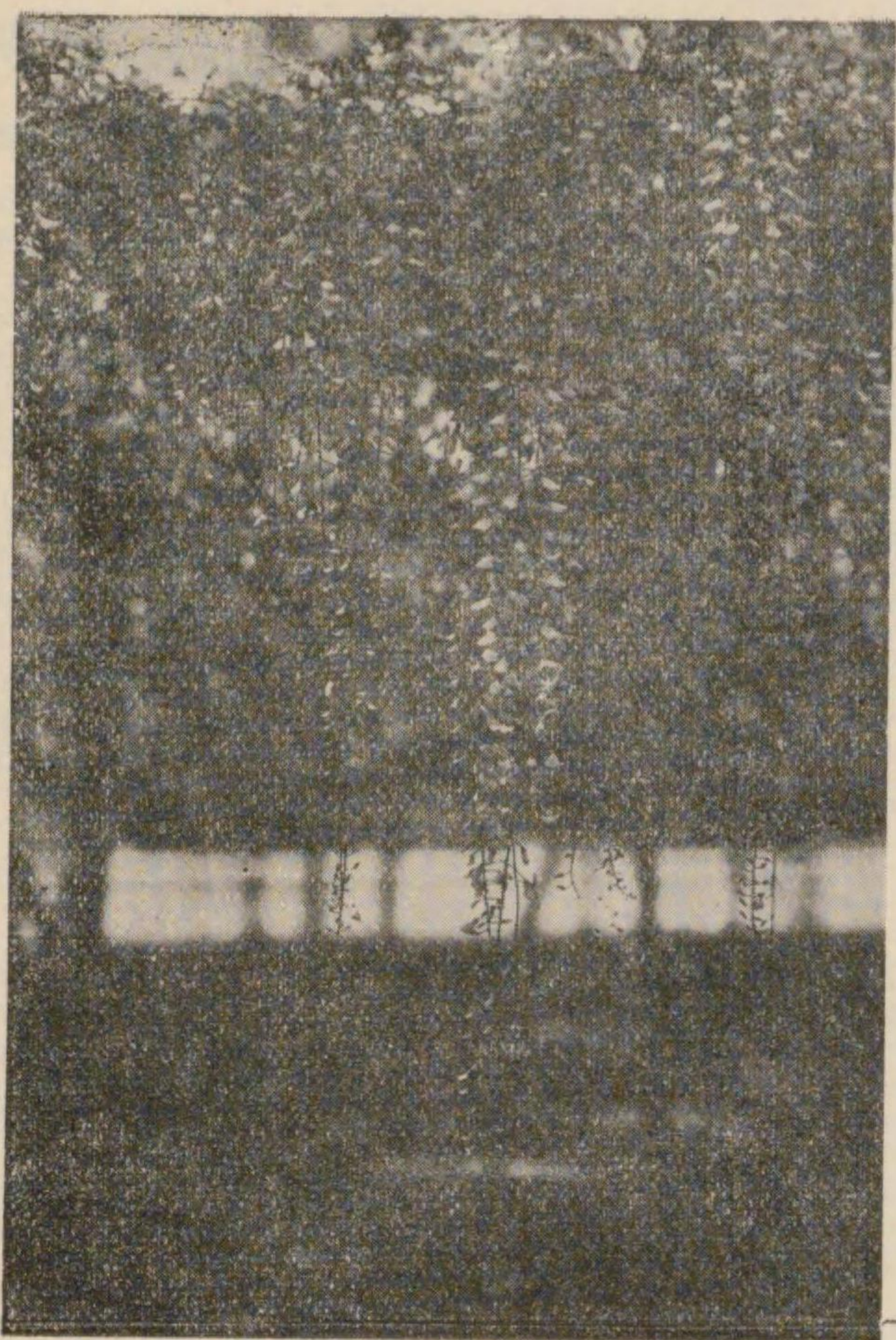
斗ありて國守松平氏の寄進する所とす。崇徳天皇當國綾松山に遷らせ給ひし時、唐渡左門雅基從ひて當國に來る。雅



郷岩田神社 齋康頼丹波宿禰の姓を賜ひ醫博士となり、子孫世々典藥頭たり。故を以て雅基崇徳天皇に從ひて讃岐に來る。天皇崩御の後、雅基の子助左衛門尉

信宗飯田郷に移住し當社を創立す。勸請導師は長尾郷寶藏院朝算なり。信宗が宅址今猶飯田にあり。建仁元年、寶治

二年、正應元年、正安二年、貞和五年社殿の修造あり。貞治二年三月五日細川頼之參拜して親しく奉幣せり。應永十年八月修造ありしが、應仁元年兵火に罹り、同二年再建す。天文十九年十一月二十日火災ありて本殿、拜殿等焼失せしが、祠前の大藤はその災を免る。この藤樹飯田の藤とて名あり。天文二十一年二月飯田領主飯田主水願主となりて再建し、同年九月西坊を建立して社僧となす。(西坊は寶永元年蓮香寺と改稱す) 天正十九年霜月飯田領主築城三郎左衛門尉領主となりて再營、(全讚史に築城三郎左衛門始祠之郷社岩田神社飯田孔雀藤



とあるは誤) 次で慶長十六年正月造營あり。寛永七年雪月築城氏の後裔上村半右衛門尉良信願主となりて再營す。正保四年願主唐戸與次右衛門等再建、寛文四年願主唐渡與五右衛門尉等修造、寛文八年九月命によつて各末社の合併あり。(享和元年頃各部落へ遷遷せり) 其の他享保十五年本殿再建、寶曆四年拜殿、神樂殿、隨神門、御旅所の再興、明和三年、天明二年の本社再建、天保十年本殿、拜殿の大修造ありて天正以降の棟札を存せり。弘化二年八月松平頼顯自筆の扁額及び永年神燈雪洞の奉獻あり。
明治五年一月郷社に列せられ、大正二年九月二十日神饌幣帛料供進神社に指定さる。昭和六年三月三日御鎮座七百五十年祭を執行せり。(三代物語 玉藻集 古名勝圖繪 全讚史)

例祭日 十月五日
主なる建造物 本殿 廊殿 幣殿 拜殿 神饌殿 神輿殿
隨神門 社務所
寶物 古順道帳^{元祿以前}、扁額、武器、樂器等二十八點
境内坪數 千〇九十六坪
氏子區域及戸數 弦打村 檀紙村大字檀紙の一部 八百二十戸

境内神社 琴平神社(大物主神) 文久四年二月再興

菅原神社(菅原道真公) 同上 久斯神社(少彦名命)

(補記 當社境外に樟樹あり周圍一丈二尺高二十一尺、大正十三年天然記念物に指定さる)

(三〇) 飯田神社 弦打村大字飯田字田中

祭神 應神天皇

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。古老の傳ふる所によれば、往古岩田神社此の所に鎮座ありき、依て古宮と稱すと。昭和三年十一月改築。

祭日 十月十一日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 五十一坪 崇敬者人員 約二百二十人

(三一) 定木神社 弦打村大字飯田字田中

祭神 大年神 御年神 若年神

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。此の地往古より古墳ありしが、天保三年四月二十四日向山八百藏なるもの隣地を耕作し、其の塚の石を以て溝の踏臺となし、忽ち病

にかゝり危篤に頻せしにより、氏神社僧に神トを乞ひし所、そは御年神を穢し奉りし咎めなりと、即ち其の石を檢せしに神像あり、村民驚き相謀りて一祠を建つといふ。

祭日 十月十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 八坪 崇敬者人員 約二百人

(三二) 青木神社 弦打村大字飯田字青木

祭神 天照皇大神 少彦名命 三年神(大年神・御年神・若年神の意なるべし) 豊受比賣神 波邇二柱神

(壇安彦神・壇安姫神の意なるべし) 大國主神

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。口碑によれば、此の地より北に當り西堂と稱する寺院の跡あり。或る尊き王その院に住み給ひ終に薨じ給ふ。即ち大暮神社(字大暮にあり)王墓の祭神なり。時に重藏坊なる者ありて能く王に奉仕せり。故に其の靈を祀ると。里人今猶重藏坊荒神と稱す。昭和十年五月崇敬者一同相謀り本殿、拜殿を再建す。

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 十八坪 崇敬者人員 約二百六十人

(三三) 塞神社 弦打村大字飯田字小坂

祭神 八衢比古神 八衢比賣神 岐神

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。一に幸神とも稱す。傳ふる所によれば寛文年間當所に唐戸與五右衛門尉友常なる者あり。田中免に居住せしにより田中與五右衛門とも稱す。飯田村全面の耕地整理を起し、水利灌漑を便にし、道路を縦横一町毎に貫通せしめ道路に沿ひて水溝を設け、中央に代官道と稱する車道を作り、友常池を築造する等村民の福利を計りしを以て、村民其の徳を追慕し、村の中央四ツ辻の路傍にその屍を葬りて地藏尊を立て、其の西側に村民の爲め幸福を計り給ふ靈として、幸の神と稱へ奉祀せしと云ふ。

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十五坪 崇敬者人員 約三十人

(三四) 清水神社 弦打村大字飯田字西青木

祭神 彌都波能賣神

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社

祭日 十月十日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十三坪 崇敬者人員 約二百六十人

(三五) 淤加美神社 弦打村大字飯田字東青木

祭神 天水分神 國水分神 高麗神 閻魔神

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社

祭日 十月十三日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三十二坪 崇敬者人員 約三十人

(三六) 大暮神社 弦打村大字飯田字大暮

祭神 大國主命 少彦名命 神櫛別命
由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。明治五年の創祀なり。古老の口碑によれば當地は往古より王墓、又は王墓と稱し丘陵の地形を爲し、神櫛王の後裔の古墳の由を傳ふ。字名大暮は王墓の轉訛にして、丘陵は王墓と稱せられ、四方水を廻らし車塚となりたるも、後池を埋めて耕地となせり。明治五年村民相謀り王墓の地に祠を建て、この三神を祭るとなり。(香川縣史)

祭日 十月二十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十坪 崇敬者人員 約百四十人

(三七) 水分神社 弦打村大字飯田字東山

祭神 天水分神 國水分神 高麗神 闇竈神
由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社

祭日 十月二十一日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三坪 崇敬者人員 約百四十人

(三八) 相作神社 弦打村大字鶴市字相作

祭神 天照大御神 少彦名神 豊受毘賣神 波邇二柱神
(埴安彦神・埴安姫神の意なるべし) 大國主神 年
三柱神(大年神・御年神・若年神の意なるべし)

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。昔此の地に圓光寺なる寺院ありて、その守護神として祭祀せられたる社二社あり、當社はその一にして大康森神社と稱す。(他の一社なる小康森神社は當社の北方にあり) 大正四年本殿、拜殿を再建す。

祭日 十月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十六坪 崇敬者人員 約百三十人

(三九) 御殿神社 弦打村大字鶴市字御殿

祭神 應神天皇(一に曰 天照皇大神 天兒屋根命 應神天皇)

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。古くより奥津彦神社と稱せらる。口碑によれば、當社の東方山頂に根子塚(猫塚とも)と稱する古墳あり。其の古墳より得たる古鏡を以て神體とし、三柱の神を奉祀せしものにして、奥津彦と稱するは奥城の訛なりと云へり。昭和九年本殿、幣殿、拜殿、廊殿を再建す。

祭日 十月九日
主なる建造物 本殿 廊殿 幣殿 拜殿
境内坪數 九百〇三坪 崇敬者人員 約千六百二十人

(四〇) 弦打神社 弦打村大字鶴市字妙見

祭神 天御中主神

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。一に明見神社と稱し、舊眞言宗弦張山徳榮寺の乾の方の守護神として奉祀せられしと傳ふ。當社は弦打山下にあり。飯尾宗祇の歌に「弦打の山より出でし月影は弓はりとこそ云ふべかりけれ」(扶木集)とありて、明月この里を照らすにより明見と云へり。大正十二年十月社殿を再建す。

祭日 十月六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 四十五坪 崇敬者人員 約百四十人

(四一) 中洲神社 弦打村大字鶴市字中津

祭神 天照大神 少彦名神 豊受毘賣神 波邇二柱神(埴安彦神・埴安姫神の意なるべし) 大國主神 年三柱神(大年神・御年神・若年神の意なるべし)

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。大正十二年社殿再建。
祭日 十月七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 七十二坪 崇敬者人員 約二百九十人

(四二) 香東神社 弦打村大字郷東字本村

祭神 火産靈神(一に曰 火産靈神 奥都彦神 奥都比賣神)

由緒 弦打村郷社岩田神社境外末社。一に杉森神社と云ふ。口碑によれば、往昔兵庫明石より當海濱に移住し製鹽業を始めし者の奉祀せし神社にして鹽竈神を祀れるなり。其の子孫明石を姓とし今猶下笠居村に住めりと云ふ。昭和八年二月社殿を再建す。

祭日 十月八日
主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 三百五十九坪 崇敬者人員 約六百四十人

(四三) 木里神社 弦打村大字郷東字石清尾山(千疊敷)

祭神 倉稻魂神 匂々迺馳神 草野比賣神
由緒 明治十一年九月二十五日の創祀なり。當村に楠鈔次なる人あり、備前國兒島郡下津井村に祭れる大神を尊信し、明治六年三月その御分靈を邸内に奉迎し、倉稻魂神を合せて祭祀せり。當時大旱す、里人此の神に祈りて神徳を

蒙りしかば参拜者群集するに至れり。同十一年八月公認神社となり此の所に遷座す。

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 九十三坪
崇敬者人員 百〇一人

一九上笠居村

(三四) 熊野神社 上笠居村字鬼無

祭神 伊邪那岐神 伊邪那美神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳説によれば、往昔此の郷に鬼住みて住民を害したりしを、熊野の神之を誅せり、依て相謀り祠を立て、熊野の神を祀れりと。又曰く孝靈天皇の皇子稚武彦命、吉備津彦命と共に三備地方を統一せられ吉備に居を定め給ふ。時に御姉倭迹々日百襲姫命讃岐に御寓居あらせられしを以て、稚武彦命屢海を越えて往來し給ふ。當時備讃の海に海賊あり、命乃ちこれを討ち給ひ、住民の難を救ひ給ひしにより、里民祠を建て命を祀れりとも云ふ。而して境内に桃太郎墓、標神石、縁組神(老

夫婦を祀る)、左堂神(犬猿雉を祀る)等今猶存せり。鬼無の地名は所謂鬼の患無くなりしにより起れりと。文化初年官命により社殿を修造すと云ふ。(全讃史 古名勝圖繪)

祭日 陰曆九月九日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 四百五十九坪 崇敬者人員 一千人

(三五) 神明神社 上笠居村字是竹

祭神 天照皇大神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。南海通記によれば、藤尾八幡宮造營の功終つて作法嚴重に行はれし時、伊勢大神宮の御師當地に來つて御祓を納め、八幡宮造營の願主香西資村に、八幡宮は武家の廟なれば御信仰有るべきこと勿論なり、然れども伊勢大神宮は日域の本主なり、何ぞ崇敬し給はざるやと告げしかば、資村信服して、御殿ヶ原といふ所に内宮天照大神宮を勧請し、岡村に外宮豊受大神宮を勧請し、毎月の祭祀怠らず云々とあり。香西資村が宇佐神社について當社を創立せしものならむ。其の後世々の兵亂に宮殿頽破し、昔時の十分の一にも及ばず、今は内宮

(三六) 大内神社 上笠居村字是竹

祭神 大内義興靈神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。南海通記によれば、永正十七年の秋大内義興、足利將軍義植を援けんとし、兵二萬餘人を率ゐて上洛の途、泉州境の浦に上陸し、翠廉屋と云ふ町家を本陣としてこゝに泊す。然るに館中盜ありて義興を害す。老臣等衷を秘して、義興防州にありて病に罹ると稱し兵船を整へて歸國す。然れども世上普く義興の卒去を知りて力を落す者多し。當時當國は細川政元卒去の後、大内氏に従ひて邦内安かりき。殊に將軍家より命ありて安富山城守、香西豊前守等海上警備の任に當り海權を掌握す。故に上京の要なく兵の煩勞なし、且つ伊豫の能島兵部大夫に屬して所謂倭寇に加はりしかば財足り民富みて兵力亦餘りあり、是咸義興の芳恩なりとして、香西豊前守其の産土神藤尾八幡宮の向ひの山に一字を建てて大内堂といひ義興の靈を祀れりと云ふ。大正十四年社殿を改築す。

(南海通記 讃州府志)

祭日 十月四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 十坪 崇敬者人員 二百四十人

勸請社のみ

残れりといふ。尙附近に伊勢池、山田等の地名残れり。

(讃州府志 南海通記)

祭日 十月十六日

主なる建造物

本殿 幣殿

拜殿

境内坪數 三

百九十一坪

九合

崇敬者人員 五百五十人



神明社

(三七) 澳津神社 上笠居村字是竹

祭神 澳津彦神 澳津姫神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社
祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 四十坪 崇敬者人員 三百二十人

(三八) 貴船神社 上笠居村字佐料

祭神 高靈神 閻魔神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳ふる所によれば、香西家資の妻を祀るといふ。當地傳説及び南海通記によれば、讃岐藤家の鼻祖中御門中納言の裔香西資村阿野・香川二郡を食邑となし當地佐料に城を築き香西氏と稱す。資村の裔に家資あり、觀應年中細川頼春に従ひ山城鳥羽繩手に戦死す。二子あり、五郎、六郎といふ。又家資の弟を七郎資邦といふ。資邦、五郎の母(家資の妻)と相續のことにつき隙あり、遂に家臣泉房右近太郎、藤井八郎と謀り、正平八年九月十三日菩提寺に於て觀月の宴を張り五郎を殺

す。第六郎は乳人加茂大夫これを抱き西讃なる詫間氏に投ず。大見六郎綾景利これなり。五郎の母大いに悲り、我女



貴船神社

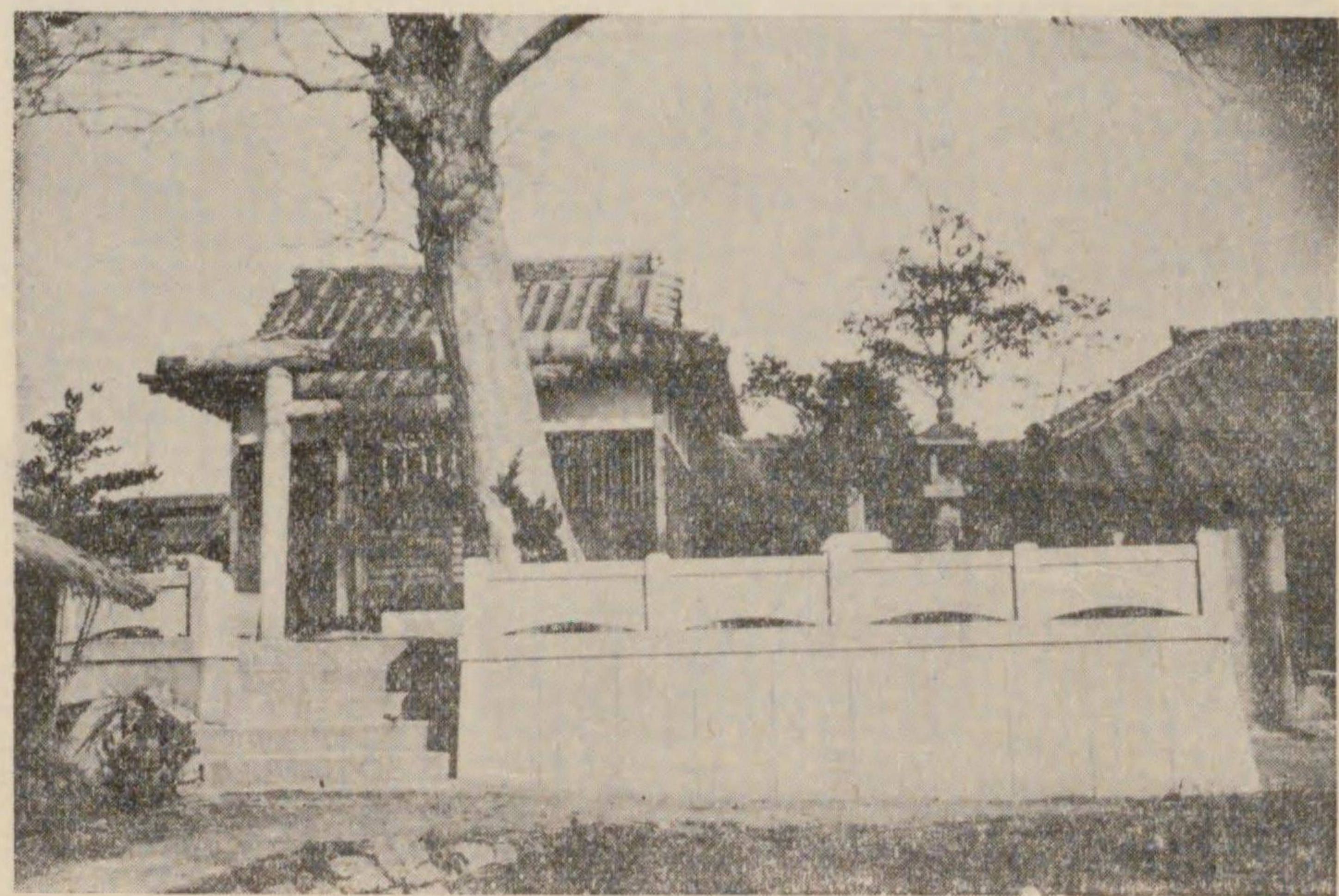
性の身なれば双をとりて怨を報ずることを得ず、魂となりて彼等を挫くべしとて同月十九日自殺す。爾後佐料邑は其

の靈崇をなし、曩に密謀に與りし泉房、藤井等狂死す。其の他次々に死する者多し。是に於て氏族家人等相謀り其の靈を祀り社壇を營み、貴富禰の神と稱し毎日の祭祀怠らざりしかば其の祟も亦なくなれりと。故に今に至るも自殺の日九月十九日を以て祭日となす。然して貴富禰の神と稱せしは五郎の母の名を貴富禰と云ひしによるといへり。神社考には『五郎の母の死靈崇をなせしはさる事なれども、貴船の神と祭るべき由有べからず。貴船社の山城國にある貴船刺遇突智命を祀りたる社なり。是を遷せしなるべし。假令香西氏の事實にさる事ありしならば本貴船社ありし地に其靈を祭りしなるべし』と云へり。(南海通記 讃州府志 神社考)

祭日 九月十九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪数 八坪 崇敬者人員 四百五十人

(三九) 澳津神社 上笠居村字佐料

祭神 澳津彦神 澳津姫神
香川郡



澳津神社

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社
祭日 九月十九日
主なる建造物 本殿
境内坪数 四坪
崇敬者人員 四百五十人

(四〇) 澳津神社 上笠居村字藤井

祭神 澳津彦神 澳津姫神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。
四二七

祭日 十月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十七坪 崇敬者人員 四百三十八人

(三二) 澳津神社 上笠居村字佐藤

祭神 澳津彦神 澳津姫神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社
祭日 十月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 六十四坪 崇敬者人員 四百五十人

(三三) 澳津神社 上笠居村字佐藤

祭神 澳津彦神 澳津姫神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社
祭日 十月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 四十四坪 崇敬者人員 四百五十人

(三四) 靄神社 上笠居村字佐藤

祭神 高靄神 闇靄神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社

(三五) 靄神社 上笠居村字山口

祭神 高靄神 闇靄神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社
祭日 陰曆七月十九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十八坪 崇敬者人員 五百十一人

(三六) 澳津神社 上笠居村字山口

祭神 澳津彦神 澳津姫神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳ふる所によれば香西資村宇佐八幡を藤尾ヶ原に勧請し、一年餘當社を假宮とせしことあり。依て八幡宮の古宮とも稱せらる。

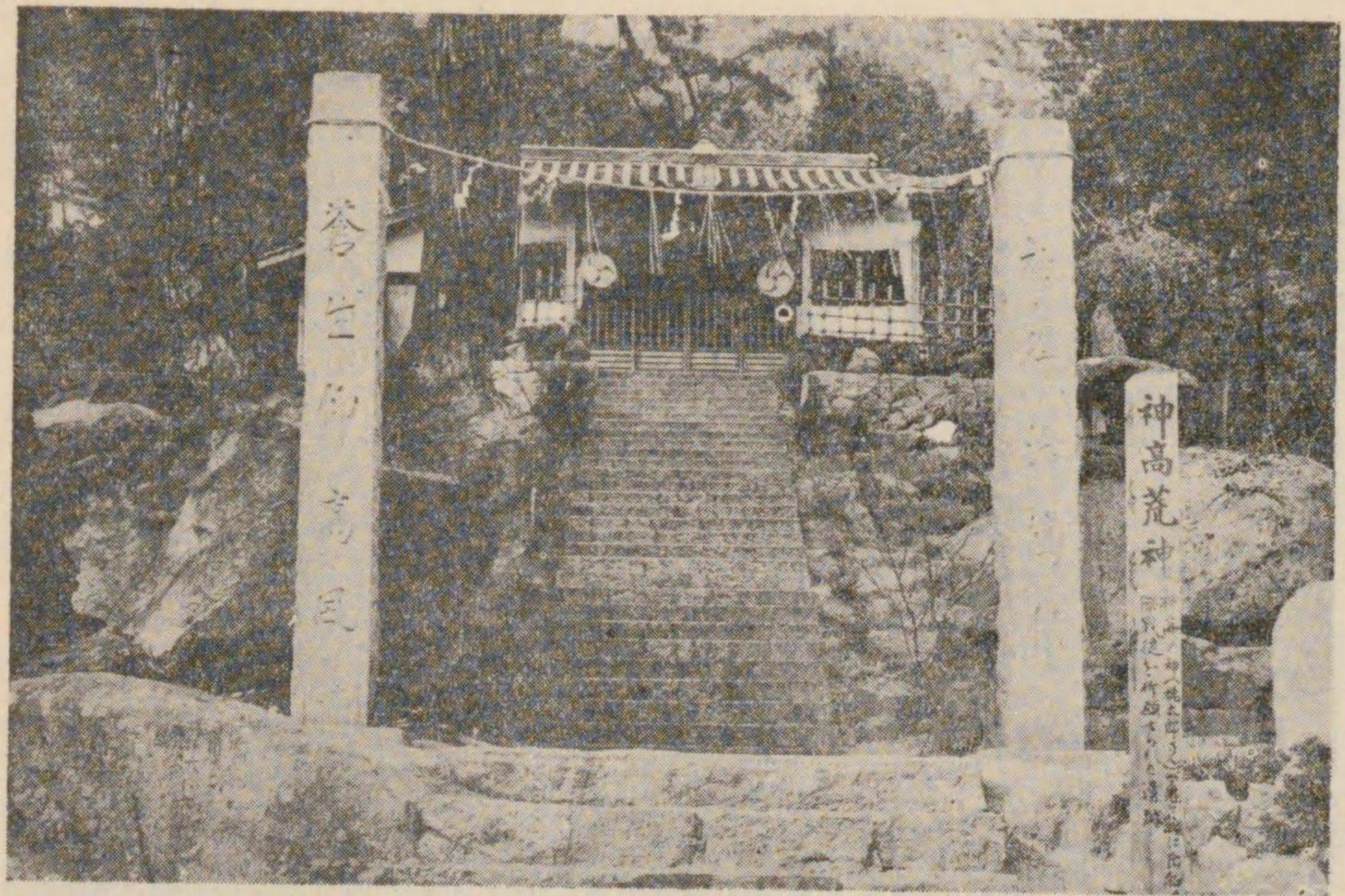
祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十九坪 崇敬者人員 五百十一人

(三七) 山王神社 上笠居村字山口

祭神 大山津見神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社

祭日 陰曆六月二十二日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三十五坪 崇敬者人員 八百八十八人

(三四) 澳津神社 上笠居村字山口



祭神 澳津彦神 澳津姫神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社
祭日 陰曆九月六日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 六坪 崇敬者人員 五百十一人

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十坪 崇敬者人員 五百十一人

(三八) 惠比須神社 上笠居村字是竹

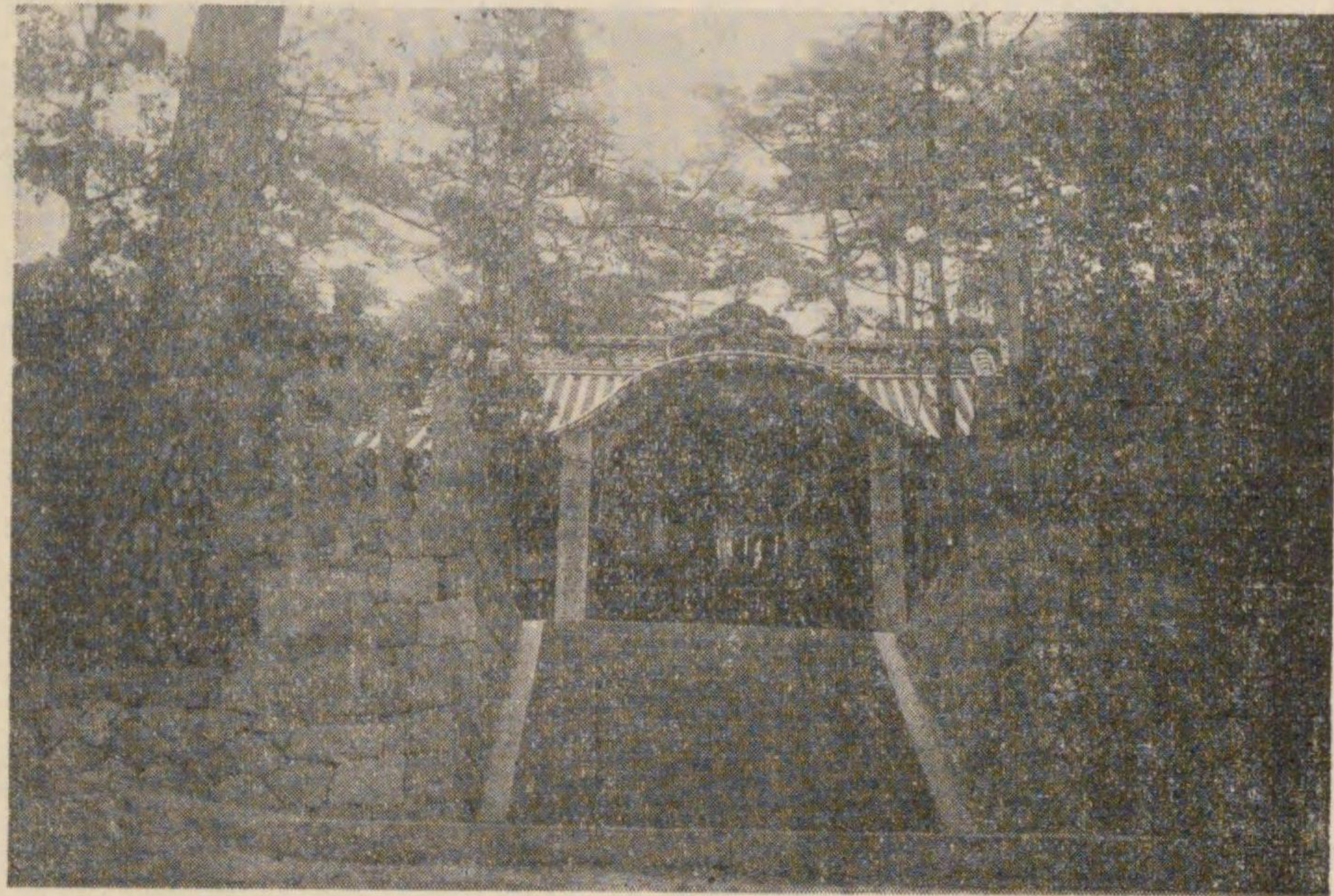
祭神 事代主神
由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社
祭日 十月二十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 三坪 崇敬者人員 三百二十人

二〇 下笠居村

(三九) 村加茂神社 下笠居村字龜水

祭神 別雷神
合祀祭神 伊邪那岐神 伊邪那美神 大山津見神 澳津彦神 澳津姫神 事代主神
由緒 建仁年中笠居郷福家城主新居藤太夫資幸の創祀にして社領田數段を寄進し、子孫相ついで修理擴張せり。邑民

亦厚く尊敬して氏神と仰ぎたりしが、細川頼之の細川清氏と兵を構ふるに際し、當地兵馬の巷となり、社殿大破、且つ火災に罹る等の事ありて衰頹せしが、大永七年九月邑民之を再興して現今の地に奉遷せり。舊社地は二町餘北の低地ありて現今池となり宮池と稱す。慶長六年當地の豪族植松



村社茂加社村

彦太夫、長吉次郎左衛門等相謀り之を修造し、別當神宮寺良運祭儀を奉仕せり。元和十年正月次郎左衛門又之を修理

(三四) 住吉神社

下笠居村字川窪

祭神 底筒男神 中筒男神 上筒男神 神功皇后
合祀祭神 聖神 澳津彦神 澳津姫神 大山津見神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外攝社。嘉祿年中香西左近將監資村の創祀と云ふ。南海通記に『北濱ニ住吉大明神ヲ勸請シ奉ル事、既ニ江西三浦ノ者共申テ曰、住吉大明神ハ海上擁護ノ御神也。柴山ニ勸請スベキ由ヲ申上ル、資村曰柴山ハ險要ノ地ニシテ三浦ノ寶也……住吉大明神勸請ノ志アラバ、深際ノ山可然也。神ハ敬シテ又遠ザクベントアレバ人家ニ近ク馴侮ベカラズト有テ、三浦ノ者共ニ課シテ造營ヲ結構シ、遷宮ノ形粧ヲ刷ヒ祭祀ヲ執行ス。伊勢八幡住吉何レモ劣ラズ修造シテ渴仰有ケレバ諸人歩ヲ運デ繁昌スル事限ナシ』とあり。明治十五年九月暴風の爲め本殿幣殿倒壊せしを以て同十六年改築す。(南海通記 今名勝圖繪 讃州府志)
明治四十三年^{字平}賀下聖神社、^{字川}窪澳津神社・山王神社を合祀す。

祭日 十月十七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 二百八十六坪 崇敬者人員 八百五十人

す。當社は鎌倉幕府の頃より本郷の豪族邑人の尊崇する所なり。

大正九年六月三日村社に列せられ、同十一年一月二十三日神饌幣帛料供進神社に指定せらる。(今名勝圖繪 讃州府志)

大正五年^{字龜}熊野神社・山王神社・澳津神社・惠比須神社を合祀す。

例祭日 陰曆九月九日

特殊神事 陰曆二月朔日社頭に於て神的と稱する射禮を行ふ。起因は井上重實が當地に來住し、深く當社を尊崇して神慮を慰め奉るべく射禮を行ひしに初まる。(重實は室町幕府が流浪して當地に來り龜水に居る。射を善くし百發空しからず。後筑前に移るに方り林三百町を當村に寄附す、村民今に其の徳を受く。明治三十三年社頭に遺徳碑を建つ。)

主なる建造物 本殿 幣殿 上拜殿 拜殿 神饌殿 神庫 寶物 棟札寫 外一點

境内坪數 六百五十二坪 崇敬者區域及人員 大字龜水 千五百人

(三四) 若宮神社

下笠居村字川窪(中山)

祭神 大雀命

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。當社に次の如き傳説あり。二條院讃岐は源三位頼政の女なるが、父頼政宇治平等院に平氏と戦ひ薨じて後、讃岐に流罪となりて當地神在海岸に着き生島に來る、里人貴人なるを察して、よくこれを慰藉して當地に居らしむ。然るに不良の徒あり、その金品を奪はむとして遂にこれを殺せり。里人深く憐みて、治承五年(紀元一八四一)九月七日その墓地にある塚穴に神として之を祀りたりしが、明治元年現在の地を選びて祠を建て若宮神社と稱して之を祀りたりと。

祭日 陰曆九月七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 二十四坪 崇敬者人員 三百八十人

(三四) 澳津神社

下笠居村字中山

祭神 澳津彦神 澳津姫神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳ふる所によれば、天正年間宇尾道山田部落の里民その地に神社なきを憂

へ、災難消除の神として奉祀せしに始るといふ。爾來當地には火難なしといへり。

祭日 陰曆九月十二日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 三十一坪 崇敬者人員 二百六十人

(三三) 霽神 社 下笠居村字中山

祭神 高靈神 闇靈神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。天文三年(紀元二一九四)六月二十五日の創建なりといひ傳ふ。

祭日 陰曆六月二十五日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十五坪 崇敬者人員 千四百七十六人

(三四) 澳津神社 下笠居村字中山

祭神 澳津彦神 澳津姫神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳ふる所によれば建武元年(紀元一九九四)九月八日の創立なりといふ。

祭日 陰曆九月八日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百十二坪 崇敬者人員 千四百七十六人

(三五) 市瀬神社 下笠居村字中山

祭神 猿田彦神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳説によれば天長九年(紀元一四九二)僧圓珍(智證大師)の創立する所なりと。圓珍根香寺開基の砌、青峯山麓に於て會々明神を感じし、根香寺草創の神助を受く、依て青峰山の香木を伐りて自ら神像を作り、當初明神の現れ給ひし地に祠を立て之を祀りて鎮守とせりと傳ふ。

祭日 陰曆九月十七日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 百二十六坪三合 崇敬者人員 千六百八十人

(三六) 霽神 社 下笠居村字生島

祭神 高靈神 闇靈神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳説によれば長祿三年(紀元二一九)六月十三日の創立といふ。

祭日 陰曆六月十三日 主なる建造物 本殿
境内坪數 十一坪 崇敬者人員 七百六十一人

(三七) 薄木神社 下笠居村字生島

祭神 大物主神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。明治十年舊八月二十四日創立。眼病治癒の神として崇敬厚し。大正十五年八月社殿を改築す。

祭日 陰曆八月二十四日 主なる建造物 本殿 拜殿
境内坪數 五坪 崇敬者人員 百七十一人

(三八) 船玉神社 下笠居村字生島

祭神 鳥船神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。口碑の傳ふる所によれば、嘉祿年中香西町宇佐神社創祀に際し、豊前宇佐八幡宮の神靈奉戴の神輿を奉ぜし船生嶋浦に安着せしが、生嶋は往古より良港にして當時航海も發達し、神靈奉迎の船人は皆生嶋浦の人なりき。海路御恙なく御神靈を迎へ得たるはひとへに海神の守護し給ふ所なりとし、生嶋の舟人等相謀り、寛喜元年(紀元一八八九)七月十七日、神船御着の時奉仕者が身を清めたりといふ宮池の邊に神社を創立

(三九) 澳津神社 下笠居村字生島

祭神 澳津彦神 澳津姫神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。傳ふる所によれば寛保元年(紀元二四〇一)九月九日の創立にして、天明七年炎上に付き新築、天保三年改築せりと。現今の社殿は明治三十三年四月の改築にかゝる。

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 百九十六坪 崇敬者人員 七百六十一人

(三五〇) 山王神社 下笠居村字生島

祭神 大山津見神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社

祭日 陰曆九月九日 主なる建造物 本殿

境内坪數 四坪 崇敬者人員 七百六十一人

(三五一) 小槌神社 下笠居村字龜水

祭神 高竈神 闇竈神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。 口碑の傳ふる所に

よれば、桓武天皇の頃とか、白杖といふ者大川郡志度寺の道場を修造して大法會を修せし時、現今の造田村上長行の地に兄弟二人の獵夫ありて兄を當願、弟を暮當といへり。當願は法會に參詣せしが、暮當は其の日の糊口に窮して山に入り狩獵を爲せり、然れども暮當は狩しつゝも法會に遇はざりしを心に悲みて居たり、當願は法會の席に在りつゝも弟暮當が山にて一人良き狩してゐむことを思ひ、連來らざりしを悔み且深くこれを嫉めり。法會終りて諸人四散せしが當願は身に異狀を生じて立つこと能はず。日没に及び

て歸らざりしかば、暮當奇しみて迎に來りこれを見るに、既に頸より以下蛇身となり居たり。當願弟を見ていへるは、吾れ今日邪念を起して生きながら畜生となる、汝兄弟の誼を以て我を幸傳池に入れよと頼みしかば、暮當不憫に思ひて、涙ながら兄を幸傳池に入る(今尚蛇淵あり)。暫くして大蛇となりて浮び出で云ひけるは、汝が恩に報ぜん爲に我一眼を抜て汝に授く、此の眼球を甕底に入れて酒を造り賣るべし、幾度酌むとも盡くることなく家必ず富まむと、かくて眼球を與へて水底に隠る。暮當兄の言に従ひ酒を造り家富めり。眼球は後宇佐神社に奉納せしといふ。當願は其後幸傳池を狭く感じて滿濃池に移り、後更に大槌小槌の間に移りたりとて、小槌島に水神として祭りしなりといふ。大正二年社殿炎上せしを以て新築す。

祭日 陰曆六月二十四日 主なる建造物 本殿 拜殿

境内坪數 三百十五坪 崇敬者人員 一萬人

(三五二) 塩竈神社 下笠居村字龜水

祭神 中筒男神 猿田比古神 中津少童神

合祀祭神 菅原道眞公 金山彦神 金山姫神

二一 雌雄島村

(三五三) 社八幡神社 雌雄島村大字女木島字宮ノ上

祭神 仲哀天皇 應神天皇 神功皇后

合祀祭神 仁徳天皇 齋火武主比神(火産靈神なるべし)

奥津比古神 奥津比賣神

由緒 女木島の産土神たり。傳ふる所によれば、神功皇后御征韓の御歸途女木島の西方に到り給ひし時、強風吹きたりしかば御船を此の島の東南なる灣に留め給ひ、茲に住吉大神を祭りて海路の御平安を祈らせられ、一夜御駐泊あらせらる。其の後島民等、皇后御上陸の地に祠を建て八幡大神を奉齋して産土神となし、又皇后の奉祀し給へる住吉大神を祭りて海上守護の神となすといへり。後幾星霜を経て灣は埋れて砂濱となり海濱には樹木繁茂するに至れり。元和五年領主高原佐助海濱樹林中に社殿を建て遷座す。今の社地これにして、舊社地は現地の西方一町餘の所にあり、同地に一祠ありて之を元宮と奉稱せり。寛永十五年領主高原次良右衛門直久社殿を修理す。玉藻集に「八幡宮 境内

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。 傳ふる所によれば、寛政三年(紀元二四五)頃金龜山八幡宮別當神宮寺主阿闍梨圭洞の創立する所なりと。

昭和七年拜殿を改築す。

大正四年二月^{字生島}琴平神社・天満神社を合祀す。

祭日 陰曆九月十一日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 三百七十二坪 崇敬者人員 一千人

(三五四) 澳津神社 下笠居村字植松

祭神 澳津彦神 澳津姫神

由緒 香西町郷社宇佐神社境外末社。 天正年間植松城主植松備後守、農作守護の神として此の地に祭祀せしものなりと傳ふ。明治十四年社殿改築、其の後大正十五年本殿並に幣殿、拜殿を新築す。

祭日 十月十六日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 七十五坪三合 崇敬者人員 二百六十人

貳反八畝八步御除地……別當圓明院、社家三宅采女佐』
と見ゆ。大正七年拜殿を改築、同時に上幣殿及び神饌所を
新築す。(玉藻集 古名勝圖繪)

明治四十四年ノ上宮ノ神社、字東荒神社を合祀す。

例祭日 九月十七日十八日

主なる建造物 本殿 上幣殿 下幣殿 拜殿 神饌所
境内坪數 二千三百九十七坪
氏子區域及戸數 大字女木島 百六十二戸

(三五) 住吉神社 雌雄島村大字女木島字谷奥

祭神 表筒男命 中筒男命 下筒男命

合祀祭神 猿田彦命

由緒 雌雄島村社八幡神社境外末社。傳ふる所によれば神功皇后筑紫より御還啓の御途次此の島に御碇泊ありて、住吉大神を奉祀し海路御平安を祈らせらる。後島人等其の御舊蹟に祠を建てて住吉大神を祀れりといふ。慶長九年領主高原久右衛門次利社殿を改築、元和十年領主高原佐助精舎一字を建立、寛文三年四代目領主高原内記仲昌社殿を造營す。高原氏退轉の後女木嶋は直嶋、男木島と共に松

主なる建造物 石祠 境内坪數 三十二坪

崇敬者人員 七百八十五人

(三六) 荒多神社 雌雄島村大字女木島字榎谷

祭神 玉櫛彦命(一に曰 佐比持神)

由緒 雌雄島村社八幡神社境外末社。御神體は神石にして海中にありといふ。古來神殿に奉遷せしこと幾度なるも、翌日は元の海中に歸り給ふと。此の神石暴風の兆ある時は其の方向を變ずと傳へ島民の崇敬淺からず。傳説によれば、此の石は、神代の昔火遠理命綿津見宮より歸り給ふ時命を御見送りせし一尋和邇の化したる所にして、古事記に所謂佐比持神なりといふ。

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 七十坪

崇敬者人員 七百八十五人

(三七) 村豊玉姫神社 雌雄島村大字男木島字殿畑

祭神 豊玉姫命

由緒 天正八年、慶長七年、寛永二年、寛文元年等屢々領

平氏の領となる、松平氏も亦崇敬厚く、正徳三年、元文四年の兩度造營ありたり。(玉藻集)

當社の神輿渡御式には島民長く業を休みて祭典及び餘興に奉仕し甚だ殷賑を極め、他村よりの参拜者亦多し。

明治四十四年ノ上宮ノ神社を合祀す。

祭日 陰曆六月二十四日二十五日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿 神樂殿 神輿殿
境内坪數 三百十五坪 崇敬者人員 七百八十五人
境内神社 八坂神社(素戔鳴尊)

(三八) 豊玉依姫神社 雌雄島村大字女木島字宮ノ上

祭神 玉依姫命

由緒 雌雄島村社八幡神社境外末社。由緒詳ならず。傳説によれば、神代の昔豊玉姫命屋島の西海にて御子を産み綿津見の宮に歸り給ひ、御妹玉依姫命を御子御養育の爲め代りて屋島に遣さる。玉依姫命海神の宮より此の島に御上陸ありて更に屋島に行き給ひしかば、島民其の縁由の地に命を奉祀すといへり。官社考證に「玉依姫神社女木島にあり」と見ゆ。(名勝圖會)

主高原氏によりて社殿の改築修理等行はる。玉藻集に「玉姫宮 境内壹反六畝六步御除地 御神體石像 別當長壽院 神職三宅采女佐」とあり。官社考證追録に「豊玉姫神社 男木島にあり」と見ゆ。名勝圖會に「豊玉神社 大姫島にあり俗に男木島といふ……」とありて、古事記豊玉姫命の事を記せり。

例祭日 十月六日七日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 八百七十九坪
氏子區域及戸數 大字男木島 百六十三戸

(三九) 加茂神社 雌雄島村大字男木島字大井

祭神 彦火々出見尊

由緒 雌雄島村社豊玉姫神社境外末社。玉藻集に「賀茂大明神 境内壹町八畝拾六步御除地也 御神體石像 別當長壽院 神職采女佐」とあり。

祭日 十月六日七日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二百二十九坪 崇敬者人員 八百十五人

(三六) 住吉神社

雌雄島村大字男木字島大井

祭神 表筒男命 中筒男命 下筒男命

由緒 雌雄島村社豊玉姫神社境外末社。玉藻集に『住

吉大明神 境内壹反三畝廿八歩御除地 御神體石像 別當

長壽院 神職三宅采女佐』と見ゆ。

祭日 陰曆六月二十二日 主なる建造物 本殿

境内坪數 七十坪 崇敬者人員 八百十五人

二二 直島村

(三七) 八幡神社

直島村字高田浦八幡山

祭神 仲哀天皇 應神天皇 神功皇后(一)に曰 中殿譽田

天皇 東殿足仲彦天皇 西殿氣長足姫尊 相殿譽田

天皇の臣數十柱)

由緒 社記によれば、應神天皇難波より御船にて吉備國を

指して船出し給ひしが、風船に隨はずして天皇の二年春三

月二十九日此の島の西浦に着き給ふ。こゝに高田浦の東山

の丘に新殿を造り居ますこと四日、舟楫を備へて吉備の國に至ります。後四十二年を経て、辛未歲四月新殿を作り天皇を奉祀して永く此の島の産土神と爲す。これ即ち當社なり。崇徳天皇本島に移りまして、院宣の御書を島人六人に賜ひ、これを神社に納めしが、延文四年八月十五日夜火ありて傳記院宣等焼失す。この時神櫛王命の後裔竹田與四郎源氏定、八幡大神の御神體を濱邊の清地に遷し奉れり。應永三年神殿を再興し、島人山城國雄徳山に詣で、足仲彦天皇、氣長足姫尊、仁徳天皇、菟道稚郎子命、武内宿禰命を勸請し、同五年八月十三日濱邊の清地に移し奉り、翌十五日足仲彦天皇を東殿に、氣長足姫尊を西殿に、應神天皇を中殿に鎮め奉りて八幡三柱大神と號し奉る。又仁徳天皇菟道稚郎子二柱命を攝社に鎮め奉りて若宮とあがめ、武内宿禰命を末社に鎮め奉りて松殿社とあがむ。天正十五年高原久右衛門藤原次利、此の島及び陰木島の領主となるや慶長六年八月十六日神職甚太夫吉久を招て八幡宮及び攝社の神殿を再興し、伊勢兩宮及び天鈿女命を勸請して末社の相殿に鎮祭り、倉稻魂命を勸請して寶倉社と號し奉れり。次利また甚太夫吉久をして陰木島の八幡宮、住吉社、陽木島の玉姫大明神、加茂大明神の神職となし、此の島の内十六

境内坪數 四千八百〇七坪一合五勺

氏子區域及戸數 直島村 五百九十戸

境内神社 惠美須神社(大國主神 事代主神 一に曰 惠美須神 海神三柱神) 慶長年間領主高原氏社殿を改築し、島

五年九月二十日七九六 番地より移轉遷座す。

綿津見神社(綿津見三柱神 惠美須神) もと宇風戸浦に鎮座

月崇敬者の希望により舊領主高原氏の城址に一社を建て、當社

及び惠美須神社を移轉合祭し、大正十五年九月二十日境内に移

轉せ

加茂神社(加茂御祖神) 慶長年間舊領主高原氏社殿を改築

轉せ 大正十五年九月二十日境内に移

(三九) 貴船神社

直島村字鏡山

祭神 素盞鳴尊 須勢理姬命 大國主命 事代主命 武甕

槌命(一に曰 經津主命をも祭る)

由緒 直島村郷社八幡神社境外末社。創祀の年月詳なら

ざれども古社にして、傳ふる所によれば、直島村は面積狭

少水量少く、旱害うち續きて島民は生計に苦しみしに、或時

島民に靈夢ありて當社を奉齋してよりは五穀豊饒、漁獲潤

澤となれり。依て氏神として厚く尊崇せられしが、應神天

主なる建造物 本殿 上幣殿 幣殿 拜殿 神饌所及樂室 隨神門

例祭日 十月十四日十五日

特殊神事 神社特別由緒祭

五月三日 應神天皇本島に三

月二十九日より四月三日まで御駐輦ありしを以て、四月三

十日(陰曆廢止に付き此の日を定日とす)宮の浦御腰懸石

を初め御舊蹟を巡拜し、八幡神社に到て太鼓を打つて禮拜

す。この太鼓を打つを以て神事の入と定め五月三日に至り

て祭事終了す。この間島民不淨物を取扱はず。

皇御來島の縁故により八幡神社の奉齋せられしより専ら八幡神社を以て氏神と爲すに至り當社は元宮と稱へらるるに至れり。高原氏本島の領主となりて尊崇厚く、五代目高原數馬、寛文十一年十一月社殿を改築し、島民の崇敬また厚し。(古名勝圖繪)

祭日 十月十九日二十日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 二千五百四十一坪四合

崇敬者人員 四千八百人

(三三) 護王神社

直島村字高田浦古城山

祭神 大雀命 武内宿禰命 沖津彦命 沖津姫命 火産靈命(一に曰 菟道稚郎子命をも祭る)

由緒 直島村郷社八幡神社境外末社。 寛文九年(紀元二

三二九)十二月領主高原内記八幡神社境内攝社若宮社に奉齋の仁徳天皇、菟道稚郎子命及び同末社松殿社に奉齋の武内宿禰命、竈殿三柱神を合祀し城南の鎮守として奉齋して護王社と奉稱す。高原家本島退去の後も島民の崇敬厚く靈驗亦顯著なり。寶曆五年六月二十三日八大護法善神社と改

稱。明治十七年五柱神社と稱へられしを、同三十六年二月現社號に改む。明治十五年二月炎上、同年八月改築す。

祭日 十月二十三日二十四日

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 九百七十七坪二合六勺

崇敬者人員 四千八百人

(三四) 稻荷神社

直島村字高田浦古城山

祭神 倉稻魂命

由緒 直島村郷社八幡神社境外末社。 慶長六年(紀元二

二六一)領主高原久右衛門藤原利次、寶倉社みくらやしろと號し八幡神社の境内に鎮祭せしを、四代目高原内記仲昌、寛文元年九月城内の鎮守として遷座奉齋せしものとす。高原氏退轉の後社殿荒廢せしが、寶曆三年二月改築、爾來島民の尊崇厚し。

祭日 十月二十一日二十二日

主なる建造物 本殿 拜殿 境内坪數 百九十七坪

崇敬者人員 四千八百人

(三五) 天皇神社

直島村字積浦(天皇山)

祭神 崇徳天皇

由緒 直島村郷社八幡神社境外末社。 神職三宅氏の舊記

によれば、保元元年葉月十日崇徳上皇在廳散位野太夫高季が造りたる松山の一字に御遷幸あり。國司直島の長者六人の者と談らひ、在所の並の岡に御所を築き配し奉る。上皇直島に座すこと三年にして志戸へ御遷幸のみぎり奉送の島人に、朕若し配所の土ともならば忘れず靈祭行へよとて記念かたみに忘員を賜ひ、又六人の長の者御配所の間よくかしづき奉りし故、末世まで當島所領安堵すべしと院宣をも賜へり。上皇崩御の後長寛三年八月二十六日小社を設けて神靈を奉齋す。寛文四年五月領主高原内記社殿を造營せる旨を記せり。保元物語に『さるほどに新院は八月十日御下着のよし國より御請文を奉り此ほどは松山に御座ありけるが國司すでに直島といふ所に御所を造り出されければ夫に遷らせ御座します四方築垣築き口一つあけ日々三度の供御まらする外は問奉る人もなし』とあり。名勝圖會に白峰寺舊記を引きて『直島玉積浦宮浦當山の氏子たるは保元元年崇徳院讃岐國に御遷御の節かの島へしばらく御船かゝり同所

に絶景ありこゝに御幸し玉ひしによりて氏神に勸請したてまつれり故に今にいたり祭禮のとき當山より御札ならびに鏡餅二重小餅月の數十二つかはし來れり』と見ゆ。崇徳天皇讃岐に還幸の砌先づ直島に寄せ給ひしといふ説と、松山より御遷幸との兩説ありて定かならざれど、天皇行在の御跡に奉齋せられたるものとす。(名勝圖會 玉藻集)

主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿

境内坪數 四千四百二十三坪一合九勺

(三六) 住吉神社

直島村字宮ノ浦

祭神 上筒男神 中筒男神 底筒男神

由緒 直島村郷社八幡神社境外末社。 傳ふる所によれば、應神天皇御即位の二年三月、天皇難波より御船にて吉備國に行幸し給ひし時、風浪悪くして直島の西の浦に御停船あらせられ、三月二十九日より四月三日まで四日間御駐船あり。櫛島の山上なる大磐石の上に住吉大神を祭りて海路の御平安を祈り給へり。此の磐今猶神石と稱し尊崇せらる。櫛島は此の時神籬の串を立て給ひしより串島と稱するに至れり。此の串天皇吉備に行幸の後横防山に建ち居たり

に絶景ありこゝに御幸し玉ひしによりて氏神に勸請したてまつれり故に今にいたり祭禮のとき當山より御札ならびに鏡餅二重小餅月の數十二つかはし來れり』と見ゆ。崇徳天皇讃岐に還幸の砌先づ直島に寄せ給ひしといふ説と、松山より御遷幸との兩説ありて定かならざれど、天皇行在の御跡に奉齋せられたるものとす。(名勝圖會 玉藻集)

しを島民畏みてその所に住吉大神を祭り海上守護の神として尊敬せしが、後寛文四年六月領主高原内記藤原仲昌（四代目）宮の浦なる天皇御腰懸石の邊りに地を選びて社殿を建て横防山より奉遷せりと云ふ。境内に御腰懸石あり。横防山は本宮山と稱し今猶舊社地を保存せり。

祭 日 十月一日二日 主なる建造物 本殿 幣殿 拜殿
境内坪數 四百三十九坪 崇敬者人員 四千八百人

昭和十三年十一月二十日印刷
昭和十三年十二月一日發行

定價上卷
下卷 貳冊金參圓也

編纂者兼
發行者

香川縣神職會

右代表者

關德市郎

印刷者

田村市太郎

印刷所

日本印刷所

發行所 香川縣神職會

香川縣仲多度郡琴平町
金刀比羅宮社務所內

香江新報

中華民國十二年十二月一日

香港新報

香港新報

香港新報

香港新報

香港新報

香港新報

香港新報

702
108

